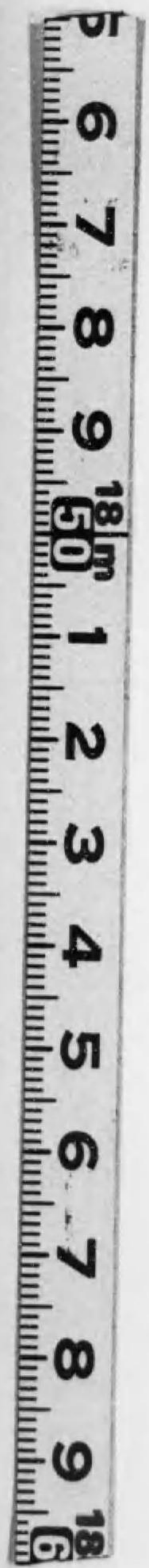


506
237



始



28. 8. 5

506-237



島田清次郎著

革命前後

改造社出版

大正
11. 9. 22
内交

目次

革命前後 (三幕) 一頁

別 札 (一幕) 六一頁

帝王者 (五幕) 九七頁

革命前後 (三幕)

——一千九百二十二年春の作——

登場人物

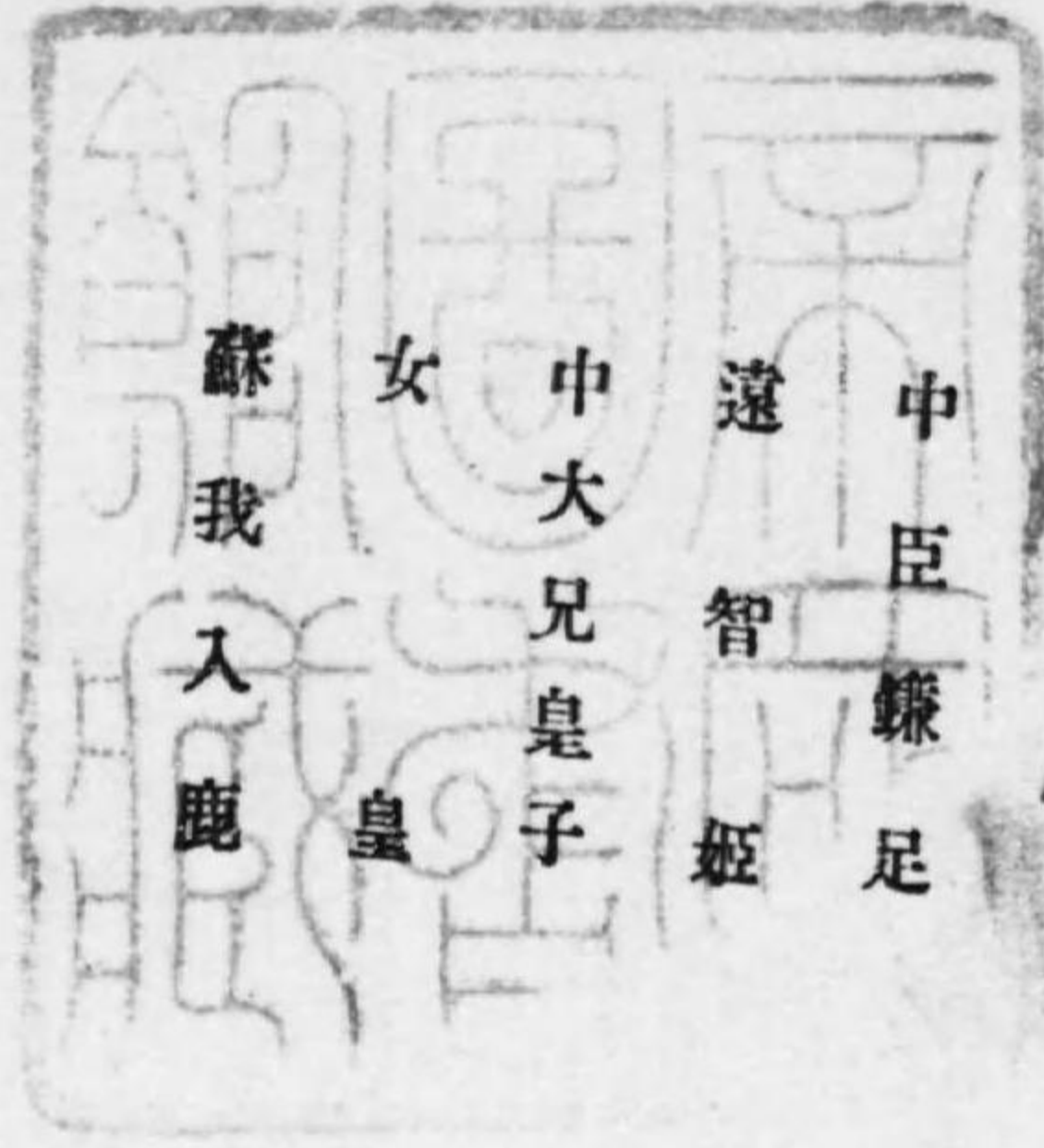
中臣鎌足

遠智姫

中大兄皇子

女皇

蘇我入鹿



第一幕

四

中臣鎌足

遠智姫

皇極三年春淺き日、蘇我倉山田石川麿の邸園の裏手、庭は高臺にして、左手濠河をへだて、甘樹岡に對す。新しく造營中の蘇我入鹿の邸宅は宏壯なる宮殿の趣きを以つて早咲きの櫻花の中にそびえて見ゆ。早春の午後。

中臣鎌足、三十一二歳、年よりはやゝ老けて見ゆる按配、剛毅重厚、深い熱と力の把持者、遠智姫——石川麿の娘、健康さうな娘盛りの美しさ、しかも清純で、熱情を潜むる一本氣と惻愍さ、——とともに登場。

遠智姫。わたしは何んで嘘を申すものですか。あそこをござらん遊ばせ。あの、むせぶやうな薄紅の雲は、みんな岡の櫻でございます。

鎌足。ふむ。

遠智姫。わたしは疲れました。少し休ませて下さい。あなたの強情には實際呆れてしまひます。よく、あれをござらん遊ばせ。

鎌足。わたしにはよく見えない。あなたに見えても、わたしには見えない。

遠智姫。あなたはさうしてわたしをお苦しめになるのです。わたしの胸はこんなに、嵐のやうに波立つてをります。あの天國の雲のやうに咲いてゐる櫻が見えぬなどと——今年も、はや、花は美しく咲きましたわね。

鎌足。岡の櫻は咲いた。そして、入鹿の邸宅も、すつかり出来上つたやうだ。

遠智姫。入鹿様はお幸福ですわ。あの岡の櫻の林に囲まれたお邸の立派さ、登る日とはあの方などを指すのでございますわね。

鎌足。あなたは入鹿を幸福者だと思ひますか。……昇る日のやうだと思ひますか。

遠智姫。だつてみなの方がさう申してゐますわ。

鎌足。皆の者の云ふことをきいてゐるのではない。貴女の本統の思ひをききたいのです。——
遠智姫。(沈黙)

鎌足。登る日はやがて没落する日だ。ハッハ、落ちなければ落すまでのことだ。

五

遠智姫。さう言ふ恐ろしいことを仰しやるものではありません、ほかほかと總身の血氣が湯のやうに和らぎ快よいこの春の日に、咲き匂ふ櫻林に邸を有つことは、幸福ではないのですか。

鎌足。さ、それが、天意に順つて、自ら具つて来た福德なれば、それほどの幸福はあるまいが、よこしまなる人間の小智小策で、流るゝ河の水をせきとめてこしらへあけた榮華に、何の幸福が恵まれよう。

遠智姫。入鹿様は、そんなに悪い方でございますか。

鎌足。入鹿一人を切りはなして考へれば、たかゞ、自分の偶然の幸福と、少しばかりの才能に増長した、むしろ愛すべき我儘者に過ぎないかもしれぬ。しかし、彼の男の位置が悪い。天下の政を一身に掌握してゐる今の位置が悪い。私の慾と公の務とが入りまじつて、思はぬうちに、大いなる悪事を爲てゐることにもなるのだ。公の權威を公のためにのみ奉仕することを忘れて、私の慾を充たすために用ひるやうになるのだ。小人が天下の位に在ることは、そのこと自身が大なる悪事だ。(半ば獨)悪はのぞかれねばならぬ。

遠智姫。(ハツとした様に)鎌足様、さつき仰しやいました、わたしへ折入つてのお話とは何のことでございますか。櫻のことに氣を奪られてしまひましたが、こゝには誰もをりません。どうぞき

かして下さいまし。(鎌足を見上る)

鎌足。そこへ腰をかけて、落付いて下さい。(姫を抱くやうにかけさせる)あなたはふるへていらつしやる。小鳥のやうに。そのふるへを静めて下さい。(半ば獨)もつと恐ろしいことがあなたの胸を凍らせるだらうから。姫よ、心を落付けて、ようく。

遠智姫。わたしは十分に落付いてをります、早くきかしていただきたく存じます。

裏の林で小鳥が鳴く。鎌足も傍へ腰かける。

鎌足。さ、わたしは、今言うてよいものか、悪いものか、迷つてゐる。

遠智姫。何故でございます。少し話があるから、人のゐぬところへ、と仰しやつたのはあなたでございませう。それ故、わたしは、こゝへ御案内申したのですのに。

鎌足。さ、それが——あなたは、わたしの話しよりも、入鹿の邸の櫻林の美しさに酔うてゐられるやうだから。

遠智姫。あなたは考へちがひをしてをられます。日頃潤達のお方とも思はれませぬ。わたしが甘樹岡の見えるこゝの裏手へお導きしたのは、人の氣配がないからでございます。岡の櫻が見事に咲いてゐるからでございます。美しい櫻の林をもつ入鹿様をお幸福と申したのは、櫻の花の美

しき故でございます。

八

鎌足。 さ、(深い思慮で吐息をもらす) どうしてよいやら。(遠智姫を見る) 姫よ。
遠智姫。 はい。

鎌足。 あなたは中大兄皇子をどうお考へになる？ それがおき、したいのぢや。
遠智姫。 どう考へると仰しやつても……わたしは、それほどよくは存じてをりません。

鎌足。 あなたの知つてゐられる限りに於て。
遠智姫。 わたしにはよくは分らないのですわ。

鎌足。 姫、わたしは眞面目に申してゐるのですぞ。あなたの知らないことや分らないことをきかしてくれと申すのではない。知つてゐられる限りに於て、どう考へられるか、それがおき、したいのです。

遠智姫。 それは御無理と申すものです。なんでわたしに、わたしの考へなどがございませう。ただ、人様のお噂を承はるだけですわ。わたしは、あなたから、皇子様はじめ、どなたのお噂でもおき、したいと常々考へてをりますわ。

鎌足。 あなたのお答へは、日頃石川磨朝臣の訓しづけの程もうか、はれて、床しさに打たれますが、

今は、あなたと私二人きりの胸と胸、真心と真心の對談です。もそつと、世間への武装を解いて、素裸かの心になつて下さい。——わたしに訓育といふ武装は unnecessary です。今の世で、あなたの價值を知るものは、わたしに越すものはありません。大丈夫です。ありのまゝのあなたになつて話して下さい。

遠智姫。(頬を赤め) だつて、わたしは、このとほりの、これ丈けの女ですもの。

鎌足。(これには拘はらず) あなたは中大兄皇子をどうお考へですか。

遠智姫。 皇子様は御立派な方でいらつしやいます。未だお若い青年のお身で、學問、武藝、諸般の政務にいたるまで、通ぜぬといふことのない、近頃稀れな、英邁の資でいらつしやると皆は申してゐるやうです。それで、わたしも、さうなのだと思つてをります。あの氣高い、若々しい、雄々しい、男性的な御顔やおすがたのうちにも、世を憂ひ、魂に悩む深い憂鬱を含んだ床しさは、わたしのやうなものにも、畏敬の念が起きずにはありません。わたしは、女皇様は、よき、日嗣の皇子を持たせ給ふことゝ、深い喜びを感じてゐるのでございます。——たゞ、それ丈けでございます。その他のことを、別にわたしは、考へたこともないのでございます。

鎌足。 ふむ、あなたの仰しやることに間違ひはない。(考へ込む)

遠智姫。

あなたは、皇子様とは、先年大極殿のお庭で、蹴鞠の御會の時以來、深いお交わりがあるやうにきゝ及んでをりましたが。

一〇

鎌足。

いや、御年少にはまじませど、中大兄皇子はわたしのこの世に於ける第一の掎り所です。光りです。熱です。太陽です。皇子の知遇を得てから、わたしの生涯は、天より授かつた軌道へ出ることができたのです。大いなる運命の軌道へ。——皇子は、亂れ、腐敗しつくした今の世に於ける唯一のたより所です。

遠智姫。わたしも、そのやうに存じてをります。

鎌足。

姫、もし、今のそのあなたのお言葉にいつはりがありませんねなら——

遠智姫。何んでございますか、

鎌足。中大兄皇子に對する信仰に、わたしと同じ熱い誠があるのなら、わたしは、あなたに一生に一つのお願ひがあります。

遠智姫。(ある豫想に身をふるはしつゝ) 願ひと仰しやるのは何のことでございますか。

鎌足。

男が一生の願ひです。それを言ひ出す以上はきゝ入れていたゝかなくてはなりません。約束して下さい。きゝ入れて下さることを。

遠智姫。

それは、御無理でございます。どういふお話しか分りもせず。約束事ができませんか。

鎌足。

わたくしを信じ、皇子を信ずる心に誠があれば、誓つて下さい。あなたの一生を。——

遠智姫。(身をふるはし) わたしにはどうお答へしていゝかわかりません。(鎌足をある情熱にて見上げる) きかして下さい。あなたの願ひと仰しやることを。

鎌足。

(嚴肅に) 姫、心を静めてきて下さい。わたしは、あなたを、あなたを、中大兄皇子の妃に御推し申さうとしてゐるのです。

遠智姫。(凜然として、情熱一時に逆上す。半信半疑で) 何と仰しやいます。悪靈がわたしの耳に間違ひ

をさゝやいたのに違ひありません。もう一度、仰しやつて、下さいまし。

鎌足。

わたしは、あなたを、皇子の妃に推し奉らうとしてゐるのです。

遠智姫。

(悪寒のごとくふるへ) それは、鎌足様、眞實、あなたのお言葉ですか。

鎌足。

中臣鎌足、生涯の言葉です。

遠智姫。(しげらく沈黙、考へてゐるうちに、ふとある考へに救はれし如く) 鎌足様、わたしはそのお言葉を眞に受けはいたしません。わたしが、皇子様を賞め讃へたのは、日嗣の皇子としての御立派さを、臣たるものゝ一人として賞めたゝへたに過ぎません。鎌足様、わたしを苦しめないで下

さい。——たとひ、どれほど皇子様が男らしい立派なお方であり、秀れた魂とおすがたのお生れつきであらうとも、わたしは、あなたのものでございます。そして、わたしのあなたであつて下さいませ。性の悪いいぢめ方を遊ばさずに、わたしの不調法はどこまでもおゆるし下さい。わたしは、あなたのものでございます。あなたの愛によつて、あなたのみ光によつてのみ、この世を幸福とも光榮あるものとも感じてゐる、かよい一人の處女でございます。今更のやうに、お試めしになる必要のない程完全にあなたのものでございます。——皇子様の御妃になど、わたしは、今の今まで、一度も夢にだに見たこともありません。わたしはお妃になることを理性では、その人生涯の光榮だとは思ひますが、わたし自身なりたいとは思ひません。——わたしの胸にはあなたお一人が主ぬちでいらつしやいます。むかしも、今も、そして永久に。

録足。 (ほつかり男子の涙を浮かべ) 姫、そなたが、さう考へるのに何の無理もない。それをきいて、わたしはうれしい。男に生れた冥加めがとも、これ、わたしの胸は未だ十年前の少年の時のやうにわなゝいてゐる。そなたのわたしへの誠心は、そなたが、さう言はいつでも分つてゐた。しかも、さう言はれ、ば、尙更に歡喜に胸はたかまり息はつまりさうにさへ覺える。が、姫よ、わたしは、そなたを、試めさうために、何の關はりもない皇子を持ち出して來て、有りやうもない作

り事を話してゐるのではないのだ。姫よ、そなたのわたしへの誠心は有りがたい。わたしは一生忘れまい。しかし、わたしの、今云うた事は、いつはりではないのだ。

遠智姫。そんなに執念深くわたしを苦しめないで下さいまし。わたしは何も知らぬ處女ちよめでございます。わたしにはたゞ、あなたを思ふ心に二すぢのないことのみを申し上げられるばかりですもの。

録足。 姫よ、そなたの熱い心は分つてゐる。この上は、わたしが申したことを、作り事と決めてしまはずに、眞面目にそなたの一生の大事として考へて見て下さい。

遠智姫。何を、何を、わたしは、その他に、あなたに二心ないことを證したほかに、考へて見ねばならないのでございます!!

録足。 (沈痛に) わしは、そなたを、大兄皇子の御妃に推し奉らうとしてゐる。そなたは、中大兄皇子のお妃になつて下さる可きであるのだ。

遠智姫。 (深い深い複雑な愕きと悲哀) それでは、それでは、さつきから、あなたの仰しやることはあれはみな、眞實の事でございますか。

録足。 そなたを試さうための作りごとではないのぢや。そなたの誠心はよく、わたしの胸にこた

えてをる。それ故にこそ、この頃、今日か、明日か、と思ひ惑ふて、なかなかこそなたに打ち明け得なかつたのだ。(岡の彼方を見て)……そのうちにも、潜越なる入鹿の造營沙汰はもはや完成にも近づかうとしてをる。今日こそ、そなたにこの一大事を打ち明け申さうと決心するには、わたしはどれだけ苦しんだことか。

遠智姫。

あゝ、(熱い涙におそはれる)それでは、今のお話しはみな、木統のことでもございましたか。

(泣き伏す) あなたは、餘りです。あなたは、わたしを、おだましになつたのです。何も知らぬ、處女の心を遊びになつたのです。そして、わたしが、お嫌ひになつたのです。それで、皇子様にかこつけて、わたしに因果をふくめようとなさるのです。あなたは、恐ろしい方です。(さらに泣き伏す) 鬼です。鬼です。恐ろしい方です。その恐ろしいお心も知らずに、わたしは、わたしは、この日頃、何となく深い憂に顔を曇らせ、人目を忍びつゝも、事しゆくわたしの家へ出入なされ、何となう何か話したけなあなたの御容子から、心まちに、あなたの熱いお心を打ち明けていたゞけるものと、心がまへてゐた自分が、愚かしくございます。わたしは、自分で思つてゐたより、もつともつと愚な女なのでした。そして、あなたは世にも恐ろしい悪い方でいらつしやいます。わたしは生き存へる氣がいたしません。父に願つて、尼になつて、清く淋みしく、

世をおくります。

鎌足。

姫よ、最初から心を落付けて、靜かにきいて下さる約束ではなかつたのですか。何んでわたしが、そなたを見捨てたり、そなたを捨てようとしてゐませう。わたしは當然ならば、皇子の御妃に推してよろしいかと願ひする代はりに、どうぞわたしの生涯の妻になつてくれと、あなたのその膝に伏したいのです。わたしがそなたに對する心はそなたのわたしへの心にも増して熱烈であることを信じて下さい。姫よ、白蓮華のやうに清純な、柔らかい處女の胸に現實の寒い凄い刃をあてて傷る罪は、この鎌足が生涯の罪として負つてゆきます。たゞ、さうした罪をさへ敢て犯させる、犯させねばおかぬやうに、この世の勢が迫つて來ました。

遠智姫。

もし、あなたのわたしを思ふお心がほんとうなら、この世の勢と、何のかゝはりがあるの

でございます。あなたは心がかはられたのです。

鎌足。 さ、今のあなたには、さうも思はれませう。しかし、人の生命とその一生は、わたし共が

考へるよりもつと複雑なさまざまな力によつて支持され、また支持もしてゐるものなのだ。それに、わたしは男だ。(胸を無意識にしかと抱く)そなたを知つてから一日もそなたの事を忘れるひまもなかつたやうに、また、英邁雄偉の若き皇子から天下改新の志を打ち明けられてから

といふものは、一日として、天下の勢は忘れることはできなかつた。——姫よ、わたしのあなたへの熱い思ひはかはらない。しかし、わたしは男だ。わたしは天下の改新のためには自分の戀に打ち克たねばならなくなつたのです。天はそれを望んでゐる。わたしは、自分の生命にもかへがたい戀をあきらめて、先づ第一の犠にしなければならぬ。——姫よ、わたしの眞心を信じて下さい。そして、皇子の御妃に、推し奉ることを、承知して下さい。

遠智姫。わたしは自分に克つことができません。わたしはか弱い處女です。あなたが、わたしを身返り遊ばすなら、わたしは尼になります。佛を供養して淋しく一人でくらしませう。皇子の御妃になどは勿體なうございます。

鎌足。わたしが何のために、かうも、自分の切ない心を、無理にも制して話してゐるのか、あなたには分りませんか。(四邊を見廻し、人無き確かめた後) ようく心を沈めてきて下さい。あなたとは、源は同じ一族ではあるが、蘇我の蝦夷、入鹿父子の專横驕奢、無恥無殘の行爲は、あなたも、御存じないことでもあります。すでに先代馬子の時から、穴穗部皇子を殺し、物部守屋を殺して專横極まりなく、崇峻天皇その專恣をためやうと遊ばさるや、逆賊馬子は東漢駒をして弑逆の罪をあえてした。後ちに既皇子を補けて外交に内治に萬事の治蹟をあらはしたことな

どは、彼奴の大逆の罪に比べて何ほどのことがあらう。蝦夷、推古帝の三十四年大臣となり、天皇崩するに及んで、遺詔を承けて皇嗣尙定まらざるに、彼奴は恣いままに田村皇子を立てようとして、遺詔による山背大兄王の後援者、叔父の境部麻理勢を攻め殺してしまつた。そして、田村皇子を天位に立て、以來の言語道斷さ。今上女帝即位の年十二月、祖廟を葛城高宮に立て八佾舞をなし、歌をつくりて謠はせたり、國內千百八十部の人民を發して豫かじめ三墓を上來にきづいて、大陵小陵と稱したり、それで足らずに、二年十月遂に病と稱して朝せず、私かに小せがれの入鹿に紫冠を授けて大臣に擬せざるさうな。しかも、その入鹿にいたつては、歴代專制の後を承け、今上女帝の氣に入るのをよいこととして、國政を専らにして、民衆は連年の重税と使役に疲弊しつくしてゐるにもかゝらず、上は山背大兄王を班鳩宮に殺し、下は民衆を酷使して宮城まがいの家を甘樹岡にきづいて、近頃、蝦夷の門を宮門己れの家を谷宮門、男女の小童共を王子王女と呼びならはさうとさへしてゐるさうな。——姫、涙を拭つて、そなたが今も、咲き匂ふ櫻花の美しきをたゝえた、その甘樹岡の花雲の間から、あのやうに、そびえてゐる入鹿が新邸の薨をよよく見て下さい。姫、遠智姫！

遠智姫。はい。(泣き伏したるが顔をもちあげる)

鎌足。あれをごらん、もう一度、ようく、あれをごらん。(指さし示し)あの美しい花の間にそびえてゐる新しい入鹿の邸は、下萬民の血と膏の結晶である。あの邸一つのために、どれだけの人衆の精力が経費され、どれだけの人衆の運命が虐げられたか、考へて見るだに恐ろしいことだ。姫、ようく見られよ。あの新しい邸は同時に、上、一天萬乗の天位をねらう叛逆のしるしだ。忠誠の心厚きもの、邸に、何故、あのやうに深い濠をめぐらし、あのやうに巨大な門をきづき、あのやうに高い柵をめぐらす必要があらう。すでに彼等のために、穴穂部皇子、崇峻天皇、山背大兄王と、弑されるものが多いが、過去でして來たことを未來に繰り返さずにおくやうな彼等ではなからう。今上女帝は幸ひにして彼等一族に好意を持つておられるからこそ無事であらうが、一度、あの新しい邸が完成し、柵門、兵庫、水槽の設備がととのひ、數千の力士が外部を守るやうになる時は、正しく、彼奴等名實共に天下を私する日であるに相違はないのだ。——しかも、姫よ、中大兄皇子は、御年少にはましませど、早くより蘇我一門の異志を看破し、世を濟ひ、天下の政を改新しやうとの理想に燃えていられたのだ。——わたしはそれを知らずじゐた。天下を愛するものは遂にわたし一人であるのかと淋しい胸を抱いてゐた。(回顧的に)わたしにはあの日が忘れられない。それは、姫よ、そなたをはじめて知つた日を忘れられないやうに。大極

殿のお庭で蹴鞠の遊があつたのだ。わたしはあとから考へてみると故意であつたかもしれぬ、あのお沓の抜けたのを、皇子の前に捧げた。「そちは誰れぢや。」「わたしは中臣鎌足でございます。」「お、そちが鎌足であつたか。」「そして、聲をひそめて皇子は仰しやつたのだ。余は天下を憂ふるの士を求めてゐるぞよ。」「それからといふもの、私共は人眼をさけて、南淵先生に周孔の道を聴くに托して、徐ろに時をめぐらし、時機を待つて來たのであつた。しかも、姫、正義を行ふには力がある。力は人だ。皇子は、そなたの父の石川磨朝臣とかたい交はりを結びたがつてゐられる。しかも、同族入鹿一門とさへ相容れぬそなたの父は、また、皇子達の心も疑ひなしにはきき入れられぬのだ。そなたの父に眞實を示すには、そなたを皇子の妃に納れるより外に、もう道はなくなつてゐる——」

遠智姫。 ええ？

鎌足。 わたしはあなたを愛してゐる。わたしはあなたとこの二度とない生涯をちぎり、人間に出生したる喜びをあくまでも味はひたい。しかし、わたしは男だ。わたしは、今や天下改新の大任を負つてゐる。しかも、その重大の時機は、目前にさし迫つてゐる。大義のためには、一身の愛戀を深い深い自分一人の神祕の王國へ藏ひこんで、天下に御奉公しなくてはならぬと覺悟

をしたのだ。姫、わたしの心が分りましたか、わたしの苦しい心を分つて下さいますか。

遠智姫。はい、わたしはどうしたらよいのでございませうか。(泣く)

鎌足。わたし共は、からだとからだの上では、恐らくこれ以上結ばれることは出来ないでしょう。又、結ばれてゐなかつたことは、寂しいことだが一つの幸福です。しかし、もつと深い、宇宙の大極のやうに深いところで二人は永久に結ばれてゐましょう。姫、涙を拭つて下さい。泣いてゐる可き時ではありません。わたしは皇子にあなたを推舉申します。皇子はあなたを認めてゐられます。美しい、純潔な處女として、また、あなたの父に、あなたが皇子の妃に册立されることを申しませう。あなたの父はそれによつてはじめて、信賴すべき吾々の同志となられるでせう。あなたに結ばれてあなたの父が吾々の同志となられることによつてわれ々の陣容はととのひます。わたくし共は機會の來るや、電光よりも神速にあの天を忘れ地を忘れ私慾の奴隸となつてゐる入鹿父子を弑して、上、天子を安んじ、下萬民のために新しい政治を實現して、當代改新の實を擧げるばかりです。姫、わたしの申すことが分りますか、そして、わたしの申すことをきいて下さい。すでに、わたしが、わたしの戀に打ち克ちました。あなたも、あなたの情けに克つて下さい。皇子は、決して、あなたのために、悪るい夫ではありません。のみ

ならず、あなたの皇子の妃に納ることは、偉大なる革命の成否の要となるのです——

遠智姫。(泣く)わたしはわたしの情に克てません。

鎌足。あなたも石川磨朝臣の御娘でせう。(力を入れ)そして、かりにも、中臣鎌足の愛しても愛して足りることのない愛人であつた!

遠智姫。(はげしく泣き)鎌足様、わたしは、わたしは、あなたのお心のまゝでございませう。

鎌足。(涙ぐみ)あゝ、天地よ、男と生れたことは、こんなにも辛いことなのか。——姫、よくもききわけてくれました。あなたのその一言によつて、日本の歴史は空前でそして絶後であらう偉大なる革命を成就するのです。姫!

遠智姫。はい、(と彼れにすがりつく)

鎌足。寂しいわたし達の戀を、天と地に祈りませう。(二人しつかと手を握る。その手わななくふるえる)

遠智姫。(涙のうちに涙と)わたしを皇子様のお妃にして下さいまし。

鎌足。永遠の戀人。

遠智姫。永久わたしの御夫。

二人はげしく慟哭する。櫻の花びらが相俯する二人の頭上へ散る。

——静かに幕——

第二幕

第一場

女 皇

中大兄皇子

皇極三年秋のある日。女皇宮殿の化粧部屋。今しも、盛装し終れる女皇、鏡にて姿を映しなるところ。四十歳ごろの年配なれど、豊麗圓滿の美しさ。

女皇。 (侍女に) 御幸の用意は出来ましたかや。

侍女。 はい。もう陛下のお出ましを、さき程から、お待ちするばかりになつてをります。

女皇。 それは御苦勞ぢや。では、そろそろ参ることにしよう。——さよう申し傳へておくれ。

侍女。 かしこまりました。

侍女一去る。

女皇。 (他の侍女に) 宮の楓も大さう色づいたが、甘樹岡の紅葉もさぞ美しいであらう。

侍女。

春になれば全山櫻となる岡の秋は、全山錦のやうに色づいて陛下の御幸をお待ち申してゐると申します。

二四

女皇。

(豊麗に) ほ、ほ。

部屋の外にあはたゞしく、侍女一かへり来る。

侍女。

陛下、中大兄皇子様が、急な御用向きでお會ひしたいと申されてをります。いかゞいたしませう。

女皇。

わたしは今、御幸の途中ぢや。皇子には、かへつて来てからにしておくれ。

侍女。

さよう申し上げたのでございます。皇子様には、たつてとお望みになりました……

女皇。

ならぬと申すのに。わたしは直ぐに入鹿の新しい邸へ行幸するのぢや。(侍女に) 皇子はそれを知つての上で、わたしに會いたいといふのは、行幸をさまたげようとするのかえ。——それとも、いつもの彼の口ぐせの天下の大事とやらの説法でもしたくなつたのかえ。おほ、おほ、今、天下は太平の盛りを極めてゐるのぢや。(立上る) 皇子には會はぬと申しておくれ。——供は揃ふたであらうの。

侍女。

はい、文武百官、表御殿に出仕して陛下のお行幸の出ましをお待ちしてをります。

侍女、宮官、女皇、左手廻廊より表御殿へ出でんとするところへ、あはたゞしく中大兄皇子、二十二三歳、背高く、顔色青白く、男性的な細面、秀でた眉、隆き鼻、清き瞳、神経質なれど、凜乎たる天稟は犯す可からず。皇子づか〜と歩み来る。侍女達畏れて後ずさる。

中大兄。

母君、無禮はおゆるし下さい。

女皇。

誰れのゆるしを得て、お前は入つて来たのぢや。わしはお前に、謁見のゆるしは出しませぬ。

中大兄。

少しお話し申したいことがございまして、陛下のお怒に觸れるを覺悟で、来たのでござい

ます。

女皇。

(言葉を和らげ) 話しは後でゆつくりききませう。今、わたしは急いでゐるのぢや。

中大兄。

何を、そんなにお急ぎ召されますか。

女皇。

わたしは今行幸の途中ぢや。お前はそれを知らぬことはなからう。そこを退いておくれ。わたしの言葉の柔らかさを失はぬうちに、おとなしく道を開いておくれ。

中大兄。

陛下は、いづこへ行幸遊ばされます。

女皇。

どこへゆかうとお前の知つたことではなからう。

中大兄。只今、きくところによれば、豫而仰出されしごとく、いよく大臣蘇我入鹿の甘樹岡の邸へ、觀楓の御宴に行幸遊ばされるのですか。

女皇。さうぢや。それはお前も知つてゝあらう。——事珍しけに何を言ひ出すのぢや。大臣の榮

華はわたしの榮華ぢや。春は花、秋は楓、四季のよろしきにしたがつて自然の美しさを愛でるは人と生れた生甲斐ぢや。又、天下太平の徴でもあらうぞ。(女皇ゆかんとす)

中大兄。(立ちてはむ) 母上、しばらくお待ち下さい。

女皇。(權威を帯びて) 何御用ぢや。用は還幸ののちに聴きとらせませうぞ。

中大兄。天下の大事が迫つてゐるのを、母君には御存じがないのでございますか。(侍女、宮官に) そち達は暫時次へ下つてゐてよからう。(侍女達迷ふを見て雄々しく) 下つてゐてよからうぞ。わしを通しての陛下の命ぢや！

侍女達畏る畏る去る。女皇默然。

中大兄。母君。

女皇。(答へず)

中大兄。今日の行幸は御止まり下さい。

女皇。(シニカルに) それがお前の天下の大事といふことなのかえ。おほ、お前は一人で何しにこゝへ來てゐるのぢや。お前の邸には、お前の美しい新妃が、淋しがつて待つてゐよう。早くかへつておやり。早くかへつておやり。遠智姫ほどの女子は日本はおろか唐天竺を探してもるはしまいぞ。その美しい姫を淋しがらすものではない。天下の大事は分つた。もうよろしい。お前は早く還るがよからう。

中大兄。今日の行幸はお止まり下さい。

女皇。おほ、新妃を迎へた新夫といふものは、ひねもす家にこもつて公へは出ぬものぢや。

天下の大事などを思つてはならぬものぢや。

中大兄。姫のことを今申されて、何になりませう。

女皇。それなら、そなたも、今日の行幸のことを言ふのは止められい。

中大兄。それとこれとは違ひます。

女皇。わたしはそなたと論争はせぬ。皇子よ、それ丈け話するのちも、お前へのなかなかの寛容ぢや。萬物には限度がある。天位に具はる寛容にも限度がありますぞよ。——お前は未だ若い。この世の實際が分らぬのぢや。實際政事がどうして行はれ、天下がどうして治まつてゆくか、

未だ分らぬのぢや。心に起こる不審を、直ちに理性の原理に想へて照破せず、不審は不審として不審そのものゝ内容を會得するやうにしないでならぬのぢや。

中大兄。母君、陛下が考へてゐられるほどに、わたしは年少ではありません。わたしは一人前の丈夫です。それは、いつかは、恐らくは近い將來に、母君御自身の胸にお分りになります。——不審を不審のうちにたづねて、それに順ふことは實際政治の要諦であると仰しやるお言葉には一面の眞理があります。しかし不可思議なるこの人生の實際に順ふことゝ、不合理と不正をみのがすことゝは同一に似て断じて同一ではございません。この世には人力をもつてはどうすることも出来ぬ不可説不可解があること、いな、この世そのものが不可説不可解であることは天竺の佛陀の説の通りでございます。不可思議に随順することによつてのみ、わたくし共はこの世から救はれるのでございませう。しかし、母君、國を建て政を布き、民百姓を地の安らけさに治めるには、人間界だけでの正義もあり合理もあります。其正義と合理性は、不可説なる世界に於ける人間同志の光明です。國家成立の綱紀です。不可説不可思議の世界と可説可思議の世界と、世界は別な二つの世界です。この二つの世界を混同しては天下の政は亂れます。……

女皇。お前は、わたしが今日の行幸を、政治の綱紀を亂すものとも申すのかえ。

中大兄。(震然として) さようでございます。

女皇。(やゝ苦痛の色にて) おほゝゝ、お前は氣が狂うてゐるのぢや。

中大兄。いゝえ、氣は確かです——陛下。

女皇。わたしの前で減多なことはつゝしまれたがよい。

中大兄。いゝえ、陛下、わたしはあまり言葉しやく申上げたたくはございません。今日の行幸はお止まり下さい。

女皇。(きつぱり) なりませぬ。

中大兄。(激して) 母君、陛下は陛下御自身を忘却してゐられます。天壤と共にきはまりなき天照大神のみことによりつて創められた、一天萬乗の王位にゐられるおん身です。

女皇。それがどうしたと云ふのぢや。お前は何故に、其やうに執念深くわたしにとりつくのぢや。(ヒステリックに) これ、誰れかるぬか、誰れかるぬか。(誰一人答ふるものなし)

中大兄。御用なら、わたしが達します。

女皇。わたしはお前に會うてゐるのが不快ぢや！ 退つてよからうぞー

中大兄。(沈黙、沈鬱の状態にかへる)

女皇。 誰れかるぬかえ。

三〇

(はい、と答へる聲がする)

中大兄。 母君。(內衣の袖をとらへて) 甘樹岡の邸は民百生の膏血の結晶です。民百生の怨恨の塊です。恐怖とけがれの窟です。しかも、陛下、あなたは人臣の身を以つて僭越にも、宮門と稱する入鹿の門をくゞられるのです。恰かも、入鹿の家來で、もあるやうに。陛下、あなたは内外に、無数の力士と柵との仰々しい武備をごらんになるのです。何のための武備でせう。そして、陛下、あなたは入鹿の子女共が、王子王女と僭稱するのをおきゞになるのです。その小せがれ共のからだには、崇峻帝を弑し二王子を殺した血がめぐつてゐるのです。陛下、今の下の権力は入鹿一門の把握するところのやうに見えてはをりまするが、實際はさやうではありません。何を苦しんで、入鹿の前に、ひざまづかれる必要があるのです。

女皇。 いつ、わたしが入鹿の前にひざまづいたらう。お前は氣が狂つてゐるのぢや。入鹿は國政をあづかる大臣ぢや。大臣が百生を代表してわたしを迎へたのぢや。入鹿の邸へ行幸することは天下萬民の家々へ行幸することぢや。いつの世にも不平の徒は絶えぬものぢや。不平は爲すなき輩のせめてもの心やりぢや。捨てをいてよいものぢやが。取り上げてはならぬものぢや。た

とひ、多少の専横の振舞ひがあらうとも、今日、入鹿一門をおいて、天が下に、誰人がかはつて國政をあづかるの大任にたえ得ると思ふのぢや。今の世は未だ太平ぢや。蘇我一族だとして父祖の代よりえらい苦辛の歴史を経て來て、やうやう今代の榮華ぢや。少し位ゐるの専横はゆるしておいてもよいことなのぢや。盛になるものに、その全盛を極めさせるのぢや。して衰ふる時に衰へさせるのぢや。これ天の命ぢや。天壤と共にきはまりなき萬世不變の王系は、天の命の體現ぢや。有爲轉變は大臣一族のことぢや、超世時の永遠の光は永久に天位と共にかはらぬのぢや、そして、そこにのみ、此百生の安んじて生き得る依り所があるのぢや、——入鹿の専横を怒るものは入鹿にとつてかはる丈けの力を養うたがよいのぢや。直に國政を負ふにたふるの力生じなば、流動の世ぢや、變らすにはるぬのぢや。今は、入鹿がわたしの旨を奉じて、世を治める力の所持者ぢや。わたしは、民百生のために、彼れの邸へ行幸するのぢや。

中大兄。 それは、危険なお考へです。一步をあやまると、節操なき唄ひ女の考へ方に墮落しませう……………それに、太平の世に柵をめぐらし兵を蓄へることは、合點が参りません。ことによつたら、今日の行幸を機會に、ゆるすべからざる大逆をでも企らみ……………

女皇。(いら／＼しつゝも、豊満な女王の誇りに美しく) お前は氣が狂れてゐる。靜かに心を養うたが

よい。——誰れかるぬか。用はすんだのぢや！

侍臣達出て来る。女皇廻廊の彼方へ去る。

中大兄。

(後見送り、腕組みして立つ。大きな吐息) 鎌足が言うたやうに、やはり、自分の努力も所詮空しいことゝなつた。地は人間の血に渴してゐると見えるわい。ふむ。

第二場

女 皇
入 鹿

甘樹岡、蘇我入鹿の新しき邸宅。宏壯なる高樓、庭園山水に面したる一室。庭園の樹が紅葉して美しい。欄干近きところに、女皇と、蘇我入鹿、三十四五、小肥りにして、賢こさうな落付きと一味の愛嬌とを具へてゐる。酒宴もをばり、別室便殿にて侍臣を遠ざけ休憩の間、語つてゐるところ。

入鹿。

(大商人の有つ物柔らかさと如才なまで) 人間は妙なものでございます。それほどに、祖父の馬子が、佛様の有りがたいこと、佛法の氣高く、神盡微妙の眞理であること、この世の苦惱と闘

争に充ちてゐること、人生の流るゝ水のやうに、一度行いては返らぬ、果敢なさを、何も知らぬ、頑是のない童の私に申し聽かしてゐますうちに、長い年月のうちには、幼ない私の胸へ、さすがに祖父の物語が沁みこまざるまじりませんでした。世間からは狼のやうに恐れられた祖父は私にとつては、羊のやうにおとなしい温かい好々爺でした。いつも私を抱きかゝえ、頭をなでて、「お前は日本で一番偉い僧にならなくてはならない。」と申すのでした。——

女皇。 おほゝゝ、大さうな御出家になられたものぢや。

入鹿。 何しろ、佛法を仕込む幼少よりのお師匠が祖父なのですから、そのお弟子の私がつんでもない出家になつてしまつたのも無理はないのです。祖父は、はじめて百濟から彌勒石像と佛を手に入れたとき司馬達等や池邊氷田や鞍作村立を四方につかはして修行者を求めしめたこと、播磨の國で還俗者の高麗人慧便をさがしあてたこと、司馬達等の女を善信尼にして自分の娘を二人までもお弟子にした上で、佛殿を家の東に經營してとにかく新しい佛陀の教を日本へみちびき入れて、大陸文明導入の先驅をなしたことから話し出すのです。祖父のつもりでは、それを最初のふり出しに、佛を祭るために受けたさまざま難儀と苦闘のうちにも、厩戸皇子の時代となり、自分の運命がひらけたことに、佛様を信じたおかけであると、申したかつた

せう。果敢ないこの世のたゞ一つの頼りは佛法よりほかにはない、佛の法のほにかなら
どんな苦しい目にあつても、祖父のやうに、いつか運命はひらけてくる——といひたか
でせう。ところが、私といふ縁えんのない衆生は、この祖父の有りがたい生涯の物語りのうちから
少くとも、佛の法の有りがたさの最後の極小分をもとりのぞいた、そのほかの一切をだけ、受
け容れてゐたものでず。人生は果敢ない、この世は無常だ、さう云はれますと、果敢なくない法、
無常でない佛にすぎる心よりも、その果敢ない、無常な現世への愛惜と戀着の想ひが、たゞも
う、潮のやうに高まつて来るのでした。私はよく一人で思ひました。無常でなく果敢なくもな
いものなら、そんなものはいつでもあるのではないか。無常で、果敢ないこの世こそは、この
世に生れて来なくては、またと得られないものではないか。私は、祖父の期待にそむくかもし
れぬが、私の一生は佛にさゝけずに、無常迅速じんそくな頼りにならねばこそ、一そう魅力のあるこの
現世にさゝけよう。さう思ひました。現世の一切に。美しい食物に。美しい衣物に。美しい
女に。富に。権力に。この世の力と美に。快樂に。あゝ無常と知れば知るほど、何とこの世の
一切は愛しても愛し足りなくなるとだらう。千年も萬年も、生きられる丈け生きてゐたい
さう思ひました。さう云ふ心の芽の育つのと共に私は私の青年時代をもつたのです。そして、

祖父の馬子の生涯などを靜かに考へる力が生きて来てみますと、私は私の考へられます本統
であることを確かめないわけにはゆきませんでした。祖父の生涯のどこに佛法の有りがたさが
しのばれませう。私はをかしくて一人で高らかに笑ひました。祖父の生涯は快樂と権力と富を獲
得するための不斷の闘争ではなかつたでせうか、祖父があんなに、朝廷に於ても、家庭に於て
も、公私を問はずに主張した佛教そのものも、祖父のこの現世的欲望の一つの道具でしかなか
つたでないでせうか。いゝえ、さうに違ひありません。——

女皇。(ほゝふみ) さうばかりとも限らないだらうが。しかし、何しろ、馬子の我朝文明への貢献
は偉大なものであつた。

入鹿。(苦笑) その偉大な貢献とやらを餌に、一切の権力と富と快樂を獲たのです。陛下、聽いて
下さい。私のこのほんとうの胸のうちを打ち明けられるのは陛下だけです。父は色慾のお化け
です。妻や妾は色慾を充たす道具です。陛下だけが、今の世の私の友です。了解者です。——
私はそこで考へたのです。佛教の教理を教へられ、祖父の生涯をつぶさにしらべることによつ
て。結局、私は現世の子です。法は世界一如、過去もなく未來もなく、彼方もなく此方もなく、
無始無終永遠であるなら、どつちにしても、同じこと。それよりか、私は水流のやうにはかな

い、とりかへしのつかぬ現世に生きようと決心しました。陛下、まことに、私は悪虐無残な男です。祖父は狼でしたが、狐の皮をかぶることを忘れませんでした。私は狐の皮をさへかぶらうとしない狼です。アツハハ、祖父も自分の孫がこんなにならうとは思はなかつたでせう。

女皇。 狼でないものは、この世に一人もゐはしませぬ。

入鹿。 陛下お一人です。さう云つて下さるのは。——(小氣味よく)アハツハハ、どうして、かう云ふ狼を陛下は御信任下さるのですか。

女皇。 狼が一番強いときは、狼の強いのを認めるまでぢや。おほ、。それに、狐の皮をかぶつた狼より、狼だと自分から云ふ狼はどこか、小氣味のよい可愛ゆらしさをもつてゐるものぢや。それに、わたしは個人的にそなたのやうな男が好きなのぢや。

入鹿。 陛下、私も、陛下を、畏れ多くも陛下の美しさと御人格にうたれずにをられないのです。陛下のゐられることは、私のこの世に於ける純粹な喜びです。

女皇。 おほ、。私がそちの純粹の喜びであるばかりに、私の生命があるといふわけなのかえ。

入鹿。 (きよつとしかけるが、直ぐに平靜になる)陛下、さようでございます。もし、陛下が、今陛下で

ゐられるやうなお方でなかつたなら、向ふ見すの私は、とうの昔に、陛下を亡き方にしてゐるに相違ありません。蘇我一族の執念深い、用意周到の向ふ見すさで。

女皇。 私も、そちが、そちであるやうなそちでなかつたなら、とても、そち達の専横と無禮と身の程知らずと驕奢とを我まんできなかつたらう。そちのその悪を悪と認識しない小氣味のよいほがらかさがなかつたら。その無類の奇蹟のやうな正直さがなかつたなら。そちは、善人ではないが、正直者だからね。とにかく、そちだけの生き方をもつてゐるからね、どことなく可愛ゆけのあるのはそのためなのだらう。

入鹿。 私が陛下の御寵遇を辱うするのは私の幸福です。また、陛下の幸福です。そして、民百姓の幸福です。

女皇。 さうでせうかね。

入鹿。 陛下、陛下を見ずには、瑞穂の國、日本の本の國の元首としての陛下を頭腦に描きますときは、この世の慾に燃え立つこの入鹿の不敵な心は、陛下に對して恐ろしい憎悪を感じ、残虐を企らむのです。ところが、いよいよ陛下にお會ひしますと、私は、陛下に、元首としての陛下よりも、一人の優れた人としての陛下を見出すのです。私はこの世に於ける價值を

認めることの出来ない男ですが、陛下にお會ひしますと、陛下は私に、あの永久的な價值を見出して下さいます。その力は何んでせう。その陛下に具はる力は陛下御自身の價值でなくてはなりません。一切この世の萬物を無視する不敵な私の心にも、陛下の價值を否定出来なくなりません。陛下を弑することは自分を殺すことであることが、私を恐ろしいジレンマに追ひ込みます。私は陛下が陛下でないことをどれほど希むだかしれません——

女皇。 (平然と魅力深くほゝみ) そちはいゝ素質に生れた男なのだが——

入鹿。 同じ佛の教へに養はれても、私のやうな魂に成長することもあるとは、自分ながらをかしい位です。(間)今の私には、たゞ一つ自由にならないものがあります。それは陛下のお生命です。しかも、陛下にお會してゐる間は、それが、私の本意にそむくことではないのです。たゞ陛下にお別れしてをりますと、自分の生仲の生柔しさが、苦痛と自責の種となるのです。——陛下、陛下は、この世を超越してゐられます。傳統の王位に就いてゐられ乍ら、その王位そのものさへ超越してゐられます。私は、この世に於て、私の上に位し、私の上に權威ある王位そのものを憎めますが、その王位をさへ超越してゐられる陛下を憎むわけにはゆかないのです。

女皇。 おほゝゝ、妙なことで、わたしは生命拾ひをしてゐるらしいね。

入鹿。 (立ちて指さす) あの五色の楓の林の蔭にきらめく、白刃の閃めき、兵士共のうごめく様を御らん下さい。

女皇。 わたしも、さつきから氣がついてをりました。

入鹿。 襖の彼方につめよせてゐる力士共の息づかひを、耳をすましてきいて下さい。

女皇。 それも、氣がつかぬでもなかつたのぢや。

入鹿。 それで、どうして、陛下はそのやうに、悠つたりと、豊かに、美しく、氣高く、打ち寛ろいでゐられます。

女皇。 さう、そちには見えるのぢや。でなければ、それはみな、わたしの生れつきぢや。佛のめぐみぢや。

入鹿。 私には陛下を弑することができません。陛下は、不思議なお方です。——今日も亦、力士共が齒がみをして口惜しがることだらう。

二人沈黙。侍女あらはる。

侍女。 申し上げます。舞の用意ができてございます。

入鹿。 (うなづき、女皇に) 私の女共の舞を御らん下さい。

女皇。

(うなづき) そちの女はいくつにおなりかえ。

入鹿。

十五に十三の二人でございます。

女皇。

さぞ花のやうに可愛ゆく、美しいことであらう。

侍女。

(わざとらしく) どうぞお早くお出下さいませ。王女様達は待ち遠しがつてゐられます。

入鹿。

(うなづく、侍女去る)

女皇。

そちの王女達の舞を見ようかや。

入鹿。

は、どうぞ、——

女皇。

人は一人一人に己れが王國の王ぢや。そちの力だけの王ぢや。そちの女は王女ぢや。遠慮には及ばぬのぢや。

二人立ちて歩みかける。舞臺廻りて場面かける。入鹿の女、花よりも美しい二人の女、輝やかな舞姿で待つてゐる。右手正面の襖ひらけば、女皇、入鹿、その他朝臣侍女達ならびなる。左手、樂師の一圈、幽艶なる音楽を奏しはじめ。二人の女立ちて舞ふ。

二人の女。

(唄)

君が代は千代に八千代にさざれ石の

岩ほとなりて苔のむすまで。

(くりかへし唄ひ舞ふ)

女皇。

おゝ、立派な王女達ぢや。入鹿、そちは可愛い、男ぢや。

——静かに幕——

第三幕

四二

中大兄皇子
遠智姫

大化元年六月、入鹿大極殿に於て誅に伏したる翌日。中大兄皇子の居間。午後。中大兄皇子、顔色蒼白く、懊惱深き様子。遠智姫も憂はし氣になり。戸外はじめ／＼とした梅雨なり。

遠智。御氣分はお宜しうございまして。お藥を差し上げませうか。

中大兄。いや、それには及ばない。肉身の患ひではない。心の痛手だ。藥は搦らぬでも、癒る時は癒るであらう。

二人沈黙。侍女來る。

侍女。申し上げます。

遠智。何御用。

侍女。中臣様より御病氣お見舞のお使にて、一瞬も早く御全快、御出仕お待ち申してをります、

とのことでございます。

遠智。(皇子に)いかゞ取計らひませう。

中大兄。病患は別段に變りはないが、所勞にて臥してゐる故、出仕は一二日出來ぬと申し傳へよ。

侍女。かしこまりました。(去る)

遠智。昨日の今と云ふのに、それでお宜しいのでございますか。

中大兄。これでいゝのだ。(思はず)あゝ。

(間)

遠智。殿下、

中大兄。何んだ。

遠智。わたしにはどうも合點がゆかぬのでございます。

中大兄。何が心得ぬと申すのぢや。

遠智。わたしの愚かさはおゆるし下さい。たゞ、わたしには、あれほど幾年の間、艱難辛苦を忍び、さていよいよ、昨日といふ昨日、めでたく本望を遂げられた、その殿下が、昨夜から、鬱々と心樂しまぬ様で、何やら深い懊惱に沈んでゐられるのが、合點がゆかぬのでございます。

四三

中大兄。

そのことか。そのことはきかすにおいてくれ。

四四

遠智。 わたくしは愚かな女でございます。昨夜も、一夜、まんじりともせず、苦しんでをりました。殿下が、勇氣に充ちておかへりになること、ばかり信じておりましたのに、蒼白いお顔を、淋しさうに、ろくに、お言葉さへかけては下さいませんでした。それも、大事の後の、お力ぬけかとも存じてをりましたに、今日になつても、あなたは、やはり、さうして何かお苦しみ遊ばして、昨日のやうさへ話してきかして下さいませぬ……わたしは愚かな女でございます。昨日の御殿でのくはしい摸様が承はり度いのです。そして、お喜び申し上げたいのでございます。

中大兄。

何もめでたいことはないのぢや。喜ぶやうなこともないのだ。

遠智。

どうしてでございます。長年の御苦辛の効あつて、大望を遂げさせ給ふた今、どうしてお喜び申してはいけないのでございます。

中大兄。

今日の日が来い迄は、わしも、今日の日を、わしの生涯の最大の歡喜の日だと信じてゐた。

遠智。

そして、さう信じ、さう夢みることによつて、全身に勇氣が感じられたのだ。——
さうして、それが、どうして喜びであつてはならないのですか。

中大兄。

(嘆息) さ、それは、わしにも分らぬ。

遠智。

あなたは、かくしていらつしやいます。殿下。

中大兄。

さうかもしれぬ。又、さうでないかもしれぬ。いや。わしは、今のこの憂鬱のわけを知ること自分でも恐れてゐるのだ。分つても分りたくはないのだ。そのくせ、もうわしには何もかも分つてゐるやうな氣がする——

遠智。

謎のやうなことを仰しやいます。わたしには分りません。

中大兄。

何も分らぬうちが、人生の樂園とも言へる。分つてしまへば、淋しさが、常冬とこふゆの淋しさが迫つてくるだけだ。

遠智。

今日は勝利の日でございます。革命の大事が成就した日でございます。殿下は幾年の苦辛がむくいられて、一時、お力抜けがしてゐられるのです。——もし、さうでないといふやうなら……

中大兄。

遠智姫よ、勝利とはいつたい何んだらう。革命とはいつたい何んだらう。革命の大事が成就した——とは、いつたい何を意味するのだらう。無窮無限のこの人生に、小刻みな區切りをつけて、一生懸命に騒いで見たところで、それが、それがいつたい何になるのだ。

四五

遠智。それが、あの、勇氣と智慧と正義に對する熱情に燃えた中大兄皇子殿下の仰しやるお言葉でせうか。どうぞ、氣をひきしめて、純一無雜な昨日のあなたをお取りかへして下さいまし。でない、わたしが、切なうございます。

中大兄。純一無雜な熱情に、ひびがはいつた。虹のやうに燃てゐたわしの理想の幻は破れたのぢや。遠智。何んと仰しやいます。あなたの雄偉なる御理想は、やうやく。今がその實現の第一歩ではないのでございますか。——きくところによれば、昨日も大極殿で、最初にあの入鹿に鋭い太刀先きで斬りつけたのは、殿下ではなかつたのですか。その理想のためには勇猛無比の……

中大兄。それを言うてはくれるな、わしはそれをきくのが切ない。姫よ、わしは今迄、何も知らなかつたのぢや。世界の廣大なことも、人生の無限なことも、そして人間の力の微少なことも。何も知らなかつたのぢや。——純一無熱情とは、何も知らぬ子供の自己の満足であつたのぢや。雄偉なる理想とは、新しい虹を夢みてをつたのぢや。——わしは苦しい。それは、この山さへ越せば、眞善美の極樂園があるとかく信じて、その信仰一つにはけまされて、険しい山を越える旅人が、さて、一つの山を越えてみると、さらに前よりもつと険しい山をゆく手に見たやうに。それは無意識であつたかもしれぬ、しかし、わしは、革命の成就と同時に、新しい世

がひらけ来るものと信じ——夢みてゐたものだ。

遠智。新しい世がひらけてゐるのではないのですか。そして、新しい世はあなたを求めてゐるのではないのでございますか。

中大兄。新しい世？ 昨日と今日と、何にが代つてゐるといふのだ。昨日と今日と、何が新しくなつてゐるといふのだ。姫よ、わしは、ここ數年來の間、心をくだき肝を苦しめて企てた、いはゆるこの世の改新と革命といふことが、こんなものであらうとは一度も考へたこともないのだ。(間)わしは昨夜から一睡もせず考へてゐるのだ。いつたい、わしは、ここ數年來、何をやつて來てゐるのか。盲目が滅法に歩きまはつてゐたやうな氣がする。一人で相撲をとつて、一人で力を入れてゐたやうな氣がする。

遠智。どうしてそんなことがございませう。殿下は長年不忠の蘇我一族を誅して天下に正義を布き、この世の軌道を正しきに還させ給うたのです。あなたは、御自身の功業の偉大さを、未だほんとうに見きはめられる落付きを得られぬのです。

中大兄。何がそんなに偉大な功業であるのだ。姫よ、もし知つてゐるならそれを知らしてくれ。わしは、偉大な業であることを信じてゐた。しかし、今となつてはそれは、子供の喧嘩と寸分も

違はぬものであることが分つた。喧嘩して勝つただけのことぢや。それが、どこに、偉大といふ価値を胎んでゐるのぢや。(間)しかも、わしは、何のことはない、人のために、喧嘩に使はれてゐたのぢや。

遠智。 何と仰しやいます。

中大兄。 (沈痛に) わしは中臣鎌足といふ猿の猫の手となつたばかりぢや。さ、かう言つただけでは、お前には何のことか分らぬかもしれぬ。が、わしは、今はお前に懺悔しなくてはならない。そもそもはじめから。お前と會つた最初から。

遠智。 (蒼白くなる)

中大兄。 わしはお前を愛してはゐなかつた。わしには未だ、女性に對する思慕はそんなに強くなかつた。わしは、わしの内に湧く理想の熱情のみに溢れてゐた。女を美しいとは思つた。しかし、戀しいとは思はなかつた。いやいや、女は恐ろしいものだ。自分の大きな望みを遂げる力を鈍らす邪魔物ぢやとさへも思つてゐた。そのわしが。お前が石川磨の年頃の娘であるといふ知識以外、お前を戀しいなどと云ふ思は髪毛一すぢほどもなかつたものぢや。

遠智。 (蒼白、ふるへる) え!!

中大兄。 お前のことをわしの耳へ入れたものは、あの中臣鎌足だつた！ わしは、大義の革命を成就するには。蘇我一門を亡ぼすには、力が要る位のこととはわきまへてをつた、わしは中臣と蹴鞠の御會を縁に結ばれたが、わしの方から彼れを近づけたと思ひつゝ、彼れの方からわしを引きつけてゐたのかもしれない。今となつて見れば、その彼れは、われわれが大事を成すには同志が必要であること、同志の一人に、ぜひお前の父の石川磨を加へねばならぬこと、それにはお前と婚を結んで、お前の父を安んぜしめねばならぬことを説いた。わしは、初は言ふことを容れなかつた。しかし、革命のために眼のくらんでゐたわしは、遂に、彼れの説に服したのぢや。わしはお前の前に懺悔する。わしはお前を愛してはゐなかつた。いや、お前の存在そのものさへしらすにゐた。たゞ、お前の父を味方に入れたいばかりに、假りのちぎりを結んだまでぢや。

遠智。 どうして、そのやうなことを、仰しやるのでございます。殿下、殿下はあまりに清い氣高いお方でゐられます。わたしは、わたしは………

中大兄。 いやいや、わしは今、お前を愛してゐる。心から。いや、婚姻のその夜から、お前のすぐれた女性である、ことをわしは知つて、愛せずにはゐられなかつた。しかし、それは、お前を知らぬ前の、知る迄のわしの罪惡を償ひはしないのだ。(間)わしは、お前に懺悔して、かう云ふ様

性を拂つてまで企てたことがまるで、水の泡のやうに消えゆかうとしてゐる悲しみを言ひたいのだ。(間)入鹿の専恣はもはや一刻も捨て置くべきでなく、味方の陣容もとのつた。南淵先生に周孔の道を聴くさまをして、われわれの謀議も熟した。いよいよ、六月三韓進調の日大極殿に於て入鹿を誅することに決定した。あゝ、その時のわしの洋々たる希望と歡喜といぢらしい意氣込と！ わしは自分の可愛ゆさに涙がにじんでくる。——昨日母君陛下の傍に、入鹿はいつものやうに悠つたりと、いつもいつも平和と春とがつかつき、いつまでも彼奴の我儘が正しいこととしてゆるされてゐるやうな、平氣な顔をして侍坐してゐた。お前の父の石川鷹はいゝ年配であり乍ら、結果を氣支つてか、表文を読みながら聲がふるへた。いや、石川鷹ばかりではない。夫養綱田も佐伯子磨もぶるぶるふるへてゐた。ふるへぬものは鎌足と陛下と入鹿と——わしは、わしのことは分らなかつた。恐らくはふるへてゐたらう。すると入鹿が、あの朗らかな、人を馬鹿にしたやうな、何とも云へぬ安易な調子で、「石川鷹よ、何故そのやうにそちの聲はふるへるのぢや。」と言つた。お前の父はさすがに年功で、女王陛下の御前で天顔に咫尺し覺えず不調法をいたします。」と答へた。すると、入鹿は、やはりと何とも言へぬ複雑な笑ひを浮べた。すると、わしはカーツとして、矢庭に彼奴に一太刀浴せずにはゐられなかつた。すると彼奴は、ま

たにやいと笑つて、傷手をおさへて、「しばらく待て。」と言つた。そして、陛下の御座へ近づいて、ぢいつと母君を見上げてゐるが、ほつかりと眼に涙を、姪よ、入鹿が眞珠のやうな涙を浮べた！——涙を浮べて、「陛下、とうとう、待つてゐた時が参りました。蘇我一門は亡びても、入鹿の生涯は、私にとつては、これより上のない生涯でした。陛下、お別れです。お名残惜しう思ひます。陛下は私の生涯に於ける光りでした。——お別れです。」さう言つた。そこでわしは、入鹿の不遜の行爲を並べ、まさに天位をさへ傾けようとしてゐることを申した。その時、白刃の下で入鹿は「皇子よ、心眼を開いて見られよ、入鹿といふ権力者は今、こゝでたふれても、私のたふれたその瞬間は、もつと恐ろしい鎌足といふ権力者を迎へることでありませう。入鹿は天位をねらはうやうに見えてゐて、何もしないが、鎌足は公事につくすやうにして、天位を空くするであらう。ハツハ、勝つ者が果して勝つのか、敗けるものが果して敗けるか、それは、それは誰れも知らない。」さう言ひ切らぬうちに、わしの傍にゐた夫養綱田が切り殺してしまつたのだ！

遠智。 おゝ(身をふるはす)

中大兄。 その前後に、母君陛下は内御殿へ入りたまつた。——ふと氣がついてみると、どうぢや！

今の今まで、入鹿にひれふしてゐた朝廷の文武百官共、みな一様にわしと鎌足の前に忠誠を誓ひをつた、しかも、さらには、つと氣がついて見ると、文武百官ごとごとくが、さきに入鹿に對してよりも一その忠誠さで、鎌足の手足となつてしまつてゐたのぢや！入鹿は、もとより誅す可き奴ぢやつた。しかし彼奴にはどこかスキと可愛らしさがあつた。——わしは、入鹿を誅すると同時に天國が招來するやうに夢みてゐたわしは、その瞬間は、つとはかない幻影の滅び去るのを感じたのぢや。もつともつと恐ろしい鎌足といふ第二の入鹿が朝廷いつばいに根を下してしまつたのぢや。

遠智。 殿下、殿下の仰しやることは尤もでございます。鎌足は、鎌足といふ人は、恐ろしい、恐ろしい人でございます。——

中大兄。 (はじめて遠智姫の異状の様に氣づく)

遠智。 殿下、殿下の深い深い御懊惱に、さらに一つの暗い影を加へることをおゆるし下さい。わたしは、殿下に恐ろしい罪を犯してをります。

中大兄。 わしに罪？ 貞節なお前が罪とは何んぢや。

遠智。 わたしは、殿下を知らぬ前に、外に一人の男と心を通はした不とゞき女でございます。

中大兄。 相手は誰れぢや。

遠智。 中臣鎌足でございます。殿下、今のわたしの身も心もゆだねつくした誠心と愛をお疑ひ下さいますな。たゞ、わたしが未だ、何んにも知らぬ娘でゐた時に、この世の春が身に心にしみじみ感じられ初める頃に、鎌足は、少くとも無關心で素通りをしなかつた男でございます。心の蕾を賞でて、花の咲くのを待つ心を寄せる男でございます。娘心のわたしは、彼の男を戀しいとさへ思ひそめてをりました。

中大兄。 ふむ。

遠智。 去年の春のことでございます。彼れは、不意に、わたしに、皇子殿下の御妃に推舉する心であると打ち明けました。——わたしは最初は信じませんでした。男が、氣を引いて見る策略かとさへ思ひました。——しかし、さうではなかつたのでした……鎌足は、人の魂と血をぬすむ恐ろしい男です。

中大兄。 ふむ。彼奴は、わしの間中へまで、泥足でふみこんでゐる！そして、何しらぬ顔をして、天下の大義だとぬかしてをる！

遠智。 殿下、しかし、わたしは、今は鎌足の猿智慧の策略を喜んでをります。あの男がるませぬ

なら、わたしは殿下を知り得なかつたのでございます。殿下、たとひあの男にどんな深い企みがありましたも、企られたことは、時が過去へ押し流します。そして、私共は固定した死物ではありません。呪ひは解放されます。あの男の企らみはかへつてあの男を亡ぼします——

中大兄。 ふむ、(いつか、もとの愛憎にかへりをる) わしは、この世に對する信仰を失つたのぢや。

遠智。 そんな悲しいことを仰しやるものではありません。鎌足がもし第一の入鹿であらうとするなら、いつまでも理想を失はず、その鎌足の力を牽制し、抑制してゆくのは殿下のお力です。神聖なる國家のため、全國民生のため、殿下は、昨日と同じく今日も、昨日の殿下でゐられなくてはなりません。

中大兄。 さ、わしには、今、廣い無限な世界が一時にひらけて、自分の力ではそれを拾收しよしきすることができぬのぢや。昨日、母君陛下は、内御殿から、直ちに、皇位をわしにゆづらうとの御意を傳へられた。が——

遠智。 何故、それをお受けなされなかつたのです。入鹿亡き後は、殿下自ら皇位に就かれ、かねての新しい改革の經綸を實現遊ばされるのが當然ではございませぬか。

中大兄。 さ、みなが、わしの登極を喜びさへすればな。——母君陛下よりその御意があつた時に、

第一に不賛成の情をあらはしたものは、實にあの鎌足であつた！ わしは、咄嗟のうちに、鎌足がひそかに、わしの叔父に對して、他日翼戴の意を通じてゐたことをとつたのぢや。わしは、母君陛下にひそかに辭退の意を申し上げ、あはせてわしの叔父——母君の弟に位を傳へられるやうにと、言はねばならなかつた。——しかし、それも無理ではない。入鹿を殺したのはわし一人の力ではない。いや、むしろ、わしやお前の間柄へまでふみこんでゐる鎌足一人の力ぢや。天下は今日から鎌足のものぢや。わしは、わしは、切ないのぢや。

遠智。 その鎌足を制へ、天下を正しきに導く責任と實力は、今や、殿下お一人の上にあると申さねばなりません。昨日の勇猛の心に、今日の深い思慮と智慧を加へられた殿下は、今や、日の本の柱石でございます。ものほしさうに、そこらをうろつくことも見苦しうございますが、殿下、勇氣を新に遊ばしませ。無限で永遠である限り、理想を奉じて、常に、新しい戦ひを戦ふのが、本統ではないのでございませぬか。今日の鎌足の勢力が昨日の入鹿に増すならば、殿下は、新しく、鎌足の力を制しなくてはならぬものではございませぬか。

中大兄。 ふむ。(少し明るい表情)事實をありのまゝに知ることは一つの力の泉ぢや。昨日の勇氣と力が新しくよみがへりかけるらしい。

この時、侍女来る。

侍女。 申し上げます。

遠智。 何御用。

侍女。 中臣氏よりの御書状でございます。

遠智。 これへ。

侍女、書状を渡し去る。中大兄皇子ひらきよむ。

中大兄。 ふむ。十四日を以て、天皇受禪し、わしを皇太子に、左右大臣内臣四博士を置くことにしてもよいか、と云うて来た。

遠智。 殿下、この世は不斷の新しい戦でございます。皇太子の位にお就き遊ばせ。もう一度この世への情熱をよびさまし遊ばせ。

中大兄。 ふむ、上天皇を奉じ、下鎌足を制して、新しき代の改新に力をいたす力をよびさますものは、今は、お前のほんとうの愛よりほかにはないのだ。

遠智。 殿下！

中大兄。 姫！（中大兄皇子、遠智姫、かたく抱きしめる）この愛に、いつはりはおつてはならぬ。この聲

にいつはりがあつたなら、それこそ、天下の亂れ。姫わしは、明日から、いつが終りといふことのない無限無窮の、正義の戦ひに参するであらう。（間）……それは、かつてはわしの自由であつたが、いまはわしの宿命となつた。それは、かつては、わしの権能であつたが、今は、義務となつてしまつた！——

——幕——

別

れ

(二幕)

別
れ

時

現

代

場所

湘南の別荘地

人物

河上俊雄

愛子

南部

お絹

思想家

その愛人

本屋の番頭

待合の女將

東京に近きある海岸の別荘地。高臺の、庭園に圍まれたる西洋風の家。書齋を兼ねたる應接室で、前面の左方は窓、右方は開扉になつて庭のヴェランダに通じてゐる。青い空と四月半ばの暖かき太陽。窓から、芝生、草花、櫻などが咲き亂れ、そのむこうに海が見える。

左手扉口、その傍に書棚、右手にピアノ。中央に卓子、椅子など、いつたいに清新で落付いた感じ。愛子(二十七歳)、近代的な魅力を持つ、やゝ高貴ではあるが類廢的なおまかげ、品のよい丸髷に結つてゐるが、どこか凄艶で、高貴の出生と育ちば否まれない。

左手扉口から、朝のコーヒーを持って出て来る。

愛子。

(部屋を見廻し) あなた、あなた——今、ここに見えたのに、どこへいつたのだらう。あなた、コーヒーを召し上れ。(ヴェランダの方へ出て) おや、あんなことをしてゐるのね。お止しなさい。そんなこと。お召し物が大へんぢやありませんか。ジョンや、ジョンや。ふざけるでないよ。——あなた、ジョンにかまふのはお止しなさい!

(ジョンのふざける聲、やがて、河上俊雄(二十八歳)苦みばしつた、しかし静かな青年である。一見、急進的思想家とは見えぬが、何かの言動の節々に犯し難い精神力は閃めく。) あらばれる。

河上。

そら来い! (幸福さうに犬に戯れて) はつはつ、お前はえらい元氣だな。今年はどこへも出かけぬので弱るかと思つてゐたが、はつはつ、一人で元氣に肥りやがつたな。(ヴェランダに腰かけ、ジョンの背を撫でてゐる) どうだ、この肉のしまりやうは!

愛子。

あなた、

河上。

(急に陰鬱な険しい表情になる) なに。

愛子。

コーヒーが冷めてしまひますわ。召し上れ。

河上。

うん、——ジョンといふ運動をしたよ。こいつは、いつになつても元氣でゐてくれる。こつちへ引つこしてから、瘦せるどころか、私が東京にゐた時分よりも、二倍方も達者に強く美しくなつたやうだ。どうだ、この毛並みのつや／＼しさは。

愛子。

あなたは、ジョンのことになると、まるで無我夢中でいらつしやいますわね。殊に、この

頃は。(間) コーヒーはお嫌や?

河上。

うん。ジョンとでも遊ぶことが、纔かに、今の生活の喜びとなつてしまつたのだ。——そらゆけ! (犬をばなす、犬一さんに庭へ走り去る) はつはつ、ジョンも久しく獵につれてゆかないので、もう、鳥をとることは忘れてゐるかもしれない。

(河上、ツエランダから室に入り椅子にすわる。急に憂鬱な表情。)

愛子。 あなた。(同じく椅子に腰かける)

河上。 え。(ぼんやり愛子を見つめる)

愛子。 何を急に、ぼんやり、わたしの顔を見ていらつしやるの。コーヒーを召し上げ。

河上。 うん。(器械的に一口コーヒーを飲む)ハンカチをかして下さい。少し汗が出たやうだ。

愛子。(ハンカチを渡し)

あら、ひざのところ、ジョンの足跡で大へんぢやありませんか。あなた

河上。 たは近頃、ジョンとばかり駆けまはつていらつしやつて、何もなさいませんか。あな

愛子。 うん。(汗をふき、泥をはたく)何もする気がしないのだ。

河上。

どうしてでせう。あなたは、一日一日と元氣なくなつていらつしやる。(しんみりと)わた

河上。 しは心配でなりません。たしかに、俊さん、あなたはどうかしてゐるのね。

愛子。 自分でも、どうにも、しょうがないのだ。愛さん。

河上。

わたしは近頃、一度、しみじみあなたに伺つて見たいと思つてゐました。でも、めつたに

言ひ出して、又、俊さん、いつものくせでいらしてはいけないと思つて、わたし一人の胸

に納めて黙つてゐましたの。言つても、いゝ? きて見てもよくつて?

河上。(黙つてコーヒーを一口のみ下す)

愛子。 気分はどう? 今日は、こんなにほかほか暖かくて、明るくて、美しい日ですわね、気分

は悪くはないらしいわね。きいてもいゝでせうね。

河上。

どつちにもするが、いゝのだ。僕は、頭が曇つて、自分でも鬱々と、何が何んだか分らな

愛子。

(鋭く見て)あなたは、わたしが嫌におなりになつたのです。あなたは、わたし達二人の生活

が倦怠に思はれていらしたのです。さうに違ひありません。俊さん、わたし達は別に約束はし

ませんでした。しかし、あなたに、嫌になつても一緒にゐる義務があらうとは思へません。お

嫌になつたのなら、さうと、はつきり云つて下さい。今の生活が倦怠で退屈で堪へられないの

なら、今の私達の生活を破壊するまで、すわ。

河上。(しばらく黙つて愛子を見つめてゐる)あなたは、何を言ふのです。

愛子。 何を言ふと仰しやる法はないぢやありませんの。わたしは、今日か明日か、とこらへて来て

ゐます。しかし、今といふ今、どうした見知らぬ人の思召しか、わたしの胸の中の思ひが、言

葉となつて現はれてしまひました。俊さん、とほけたり白ばくれたりしないで、はつきりと私

にきかして下さい。あなたは、わたしとの生活に嫌気がさしたのではなくつて？（河上、黙つてゐる）何故、黙つてゐるの。そんなことは、分りきつたことだと言はぬばかりに、あなたは黙つてゐるのね。さうなら、もし、さうなら、さうと、はつきり言つて頂戴、わたしは、あなたに嫌はれてまで……………

河上。 愛さん、何を言ひ出すのだ、僕は……………

愛子。 いゝえ、あなたは、確かに、わたしが嫌になつたのです。あなたの戀も、やはり、世間普通の若者の戀のやうに、新しい對象を追うてゆく一時の出来心に過ぎなかつたのです。――

河上。 僕は、あなたを嫌ひはしない。愛さん。僕は、あなたを、あなたを知つた最初の日よりも一そう深く、熱く愛してゐるのだ。

愛子。 それなら、何故、この頃、毎日々々、何もせず、ろくすつほ勉強もせず、終日一人黙つて、ゐるのです。そして、わたしの顔さへ見れば、まるで、看守の前の囚人のやうに悲惨な陰鬱なあなたになつてしまふのです。それが、わたしには分りません。今だつて、あなたは、あのジョンと庭の原つばで遊びたはむれていらつしやる間は、本統に愉快さうに、生き生きと、むかしながらの元氣なあなた丸出しであるのに、わたしの前へ來ると急に、年寄り臭く、陰鬱

に黙り込んでしまふぢやありませんか。それは何故です。わたしを愛していらつしやらないからです。わたしに倦きておしまひになつたのです。今の生活が嫌になつてしまはれたのです。でなくては、何故、そんなにしかめつ顔をしていらつしやるの。（間）あゝ、最初にあなたにお會ひした時、あなたはそんな方ではなかつた。あなたは覇氣と矜悍の氣が横溢していらつしやつた。あなたの情熱は、わたしの魂へ、かういふ青年も、この世にはゐるのかと、そゝろに總身の血を逆流させるほどに強かつた！

河上。 （苦しさに）それを言はないで下さい、愛子さん、それを言はないで下さい。

愛子。 いゝえ、わたしは、それを言はずにはゐられません。また、このことを、何故、言つてはならないのです。あなたは、それほどわたしを苦しめようと底意地悪く遊ばすのですか。あゝ、最初に、あなたを知つた頃の、あの偉大なすばらしい情熱。それは、わたしにとつても、生涯の最初の情熱でしたもの。その時の自分を振りかへつて見るのが、どうしていけないのです！

河上。 （苦しさに）私は、あなたを愛してゐます。あなたにお會ひした時よりも以上に、今もあなたを愛してゐます。――もつと深い／＼情熱で、もつと深い心の底から。

愛子。 そのお言葉はこの頃のあなたの行爲が裏切つてゐます。わたしは信するわけにはゆきません。いつたい、あなたは、何が氣に入らなくて、そんなに、陰鬱に、くすぶつてゐるのです。もし、わたしを愛してゐられるとするならば、あなたは、わたしよりも、飼犬のジョンに、より多くの愛情を示し、より多く慰さめられてゐるぢやありませんか。

河上。 (やうやくはつきりと力強く) 愛子さん、愛することは苦しむことです。あなたは、まさか、わたしから、ジョンと同じ程度の愛を要求なさりはしませんか。

愛子。 誰れが！ あなたはそんなひどい侮辱を投げつけて、それで――

河上。 愛子さん、誤解しないで下さい。僕はどんなに、今、深くあなたを愛してゐるか。そしてその愛はどんなに純粹なものであるか。そのことを信じて下さい。

愛子。 わたしは信することが出来ません。あなたのお心に變化があつたのです。どんなにあなたが辯解なさつても、あなたのお心に致命的な變化のあつたことだけは否定は出来ません。そして、この變化は、わたしへの愛の冷却です。わたしへの嫌悪です。あなたは、決して、そんな陰鬱なお方ではありませんでした。去年の夏、三崎の別荘へ、あゝ、二度と口にすまいと思つてゐる名をあなたは言はせません。夫の大久良男を避て避暑にいつてゐる時でした。わたしは、

出入の大學生といつしよに、臨海實驗所へゆきました。その時、そこにあるのが、あなたです。わたしは最初、同じ大學の研究室の方かと思つてゐましたが、だんだん話してゐるうちに、あなたは若き思想家としてかなり有名なあなたが、友人の大學生と避暑がてら生物學の實驗にきてゐられるのだといふことを知つて、何んともいふ胸のどきめきを感じたものでした。あゝ、それから一週間ばかりの間の、何んといふ楽しいわたし達の黄金時代だつたでせう。あなたの言動は眞夏の太陽のやうにわたしの淋しい孤獨な胸を充たして下さいました。本統に、わたしが一足先きに東京へかへるやうになつたあの夕方、かへつてからの交際のかたい約束をしながら、それで一生おあひ出来ぬのではないかと、小娘のやうに一人涙ぐまれてなりません。あの時の、あの深い青い空の色調、眞つ赤いお日様の圓さ、みんなみんな忘れないものですわ。あなたは丘の上に立つて、わたし達の自動車の見えなくなるまで、見送つてゐて下さいました。それから――

河上。 もう止して下さい。僕は苦しいのです。僕を苦しめないで下さい。

愛子。 わたし達のせめては楽しかつた日の思ひ出が、あなたを苦しめるのですつて！ 何が、あなたを苦しめるのです。それほどわたしはあなたにとつて害ある存在なのですか。

河上。 いや、あなたが悪いといふのではない。僕は、僕の罪を責められて苦しいと云ふのです。
愛子。 むかしのあなたに、どんな罪があるのです。あなたがわたしを愛していらした、そして、わたしも、あなたを愛しました。それで、わたしは、夫の大久良と別れました。そして、あなたに結びつき、新しい生活を初めたのでした。そのことのごとくに罪があるのです。罪と云へば、今のあなたこそ、罪を犯していらつしやるのです。

河上。 愛子さん、あなたには寸毫の罪はありません。あなたは、終始一毛も亂れぬすぐれた美しい愛の生活者です、無自覺の故の罪は、自覺の故の離婚によつて救はれました。あなたは救はれていらつしやる。そして、あなたが、男爵の大久良の手から逃がれて、あなた御自身の愛の生活へおはひりになるために、僕は恐ろしい罪を、あなたに對して犯してゐたのでした。

愛子。 わたしに對して、あなたが、罪を犯してゐたのですつて、それはどんな罪です。どんな罪です。

河上。 わたしは、あなたを愛しては、ありませんでした！

愛子。 え、？！

河上。 わたしは、あなたを本統に愛しては、ありませんでした。

愛子。 い、ま、それはウソです。あなたはわたしを愛して下さいました。真心から。たゞ、あなたは、今は、わたしが嫌になつたのです。それで、氣まりが悪るいものだから、ほんたうに愛した自分を打ち消さうとしてゐるのです。

河上。 さうではないのです。わたしは、今こそ、あなたを真心から愛してゐるのです。そして、今の、本統に、深いあなたへの愛を知り、あなたと結びつかれるまでの最初の動機を考へるにつれて、僕は、そこに、恐ろしい不正、恐ろしい罪惡が犯されてゐることを發見せずにはゐられなくなつたのです。(間)それは、僕は、あなたを本統に愛してゐなかつた、といふ不可動の事實です。

愛子。 それでは、あなたは、わたしをだましてゐたと仰しやるのですね。

河上。 さうです。深く考へてみると、僕はあなたをだましてゐました。

愛子。 (椅子を立ち) 惡黨！ あなたは、ひどい、ひどい方です。ひどい方ですわ！ わたしをこんなにしてしまつておきながら、わたしをだましたと、だましたと………(泣き伏す)

河上。 愛さん、泣かないで、僕の言ふことをきいて下さい。

愛子。 わたしは、そんなこと、きゝたくは、ありません、あなたは……あ……

河上。

七二

僕は悪黨ではありません。最初から企らんで、あなたをだまさうなどと不とゞきな心であなたとつきあひはしませんでした。あゝ、愛さん、あなたが仰しやる迄もありません。あなたにとつての黄金時代は、僕にとつても青春の黄金時代です。あなたにとつて、やうやく、女性としての自覺が、魂に芽ぐみ、たゞ一塊の肉塊にすぎぬ大久良男の夫人としての生活に何の意義を見出せぬ魂の寂寥の時代は、僕にとつても、さびしい戀のない青春の寂寥に惱まされ、この世より進みすぎた思想の世界の憧憬とその實現をこの世に見たいといふロマンティックな願ひに充たされた時代であつたのです。僕が、あなたといふ高貴な優しい美しい方を大久良夫人として見出したとき、僕の胸はときめきました、そして、あなたの愛にすがり得るならば、僕の一生も、この世の規約もふみにじつてもいゝと思ひました、それが正當な僕の事業だと思ひました。

愛子。(かすかにすゝり泣く)わたしは、ききたくはありません。

河上。

さう思つた僕の心がウソでないことは、あなたを思ふ心に二すぢはないと幾度となく誓つた言葉がウソでないと同じでした。たゞ、今になつて考へてみますと、かつして、あなたと、社會をのがれて、靜かに二人でくらしながら、魂の隅々まで、照らしあはして見ますと、その

いつはりならぬ思ひのもう一つ底に恐ろしい邪惡な冒險すきな、心が住んでゐたのです。(間)
それは、僕の男としての虚榮心です。

愛子。(泣き止んでゐる)

河上。虚榮心！虚榮心は恐ろしい。それは、さまざま美名と尤もらしい理論の蔭に知らずしらす這ひこんで、人をして、思はず恐ろしい罪を犯させる。愛さん、もともと僕は聖人ではありません。又、聖人になるのが生涯の目的でもありませんでした。僕は、現代の一人の若者、貧しい中から伸びてゆかうとする若者、この世の革命を生涯の志とした若者です。僕は、あの三崎で、はじめてあなたを知つた時、あなた御自身の美しさ、氣高さ、——あなた御自身のその裸かな肉體と魂の價値に打たれると同時に、あなたの特異な地位と境遇に異常な注意と好奇心をそゝられたのでした。あなたが、あなたとは二十歳も年のちがふ有名な、我國有數の大實業家の夫人でゐられること、あなた御自身が我國名門の出でゐられること、——少くとも、當面の敵たる我國有數の大資本家の大久良から、美しい小鳥なるあなたを奪ふことは、男の意地だと考へました。あなたが、もしも、普通の平凡な家庭の奥さんでしたなら、僕は、恐らく、あんなにも大げさに、熱烈に、あなたの魂をゆり動かし、あなたの思想の眼を開き、あなたを

完全に征服しようとはしなかつたでせう。僕のあなたの眞價にまゐつた純粹な戀心といつしよに、いや、恐らくはその戀心よりも以上に、僕の男としての虛榮心が、あなたの眞價と何のか、はりのない、あなたの境遇と地位に宣戰して、混ぜてはならぬ不純な心理で、愛の名の下にあなたを奪ひ、僕の不純な心を満足させようとしたのです。僕は、全力を注ぎました。さまざまの事情が、その僕の行爲に味方してくれました。僕の卑しい野望はとにかく見事に成功しました。あなたは大久良に離縁狀をたゞきつけて、僕の胸へとびこんできてくれました！

愛子。

おゝ。

河上。 それより外に道はないと、僕はあなたに斷言しました。(間)しかし、それよりほかに本統に道はなかつたのでせうか？ たとひ、又、さうなるよりほかに道はないにしても、たとひ、その結論は同じであつても、その動機が濁つてゐるのをどうしませうか。愛子さん、僕は馬鹿でした。僕は馬鹿でした。僕は、あなたの眞價を知りませんでした。最大級の言葉で、生命にかけてもと、あなたの美と品性を讃美した時も、それは、眞に、あなたの肉體の美しさ、品性の崇高さを知つて、讃美してゐたではありません。知らず識らずのうちに、大實業家、あなたの先の夫大久良男といふ假想敵を向方にまはして、あなたをこつちへ奪はうとする、だゝの

手段としてあなたを讃美したに過ぎないのでした。それは、言ひかへれば、世間の俗人が言ふ空世辭、娼婦が客に云ふおもねりに過ぎないのでした。——しかも、あなたと、かうして、二人きりで、生活してゐるにつけ、一日一日と僕の心の奥深くへこたへてくるものは、あなたの肉身の美しさだ。あなたの情けの深さだ、あなたの精神の氣高さだ。僕は一日一日、自分がどんなに馬鹿で、淺薄で、淺ましい男であつたかをひしひしと身にこたへしめられるのだ。あなたへ呈したあらゆる讃美の言葉、それを、何故、僕は本統に、心の奥から、言へなかつたのだらうか？！ それを思ふと、僕の心懐にえくりかへるのだ。僕はたゞ、あなたを獲たい、といふ一念、その一念は「大久良男から獲たい」といふ一念であつたことを、どれほど呪つても呪ひたりません。なぜ、純粹に、あなた一人を慾しいといふ氣になれなかつたか。なぜ、こんなに美しい、こんなにいい、女のあなたを前にしながら、わざわざ「資本家なる大久良の夫人」といふハンデキャップなどをつけて、假想敵までもうけた上で、やうやく、あなたを奪はふといふ氣を、わづかに起してゐたのが、それが殘念でなりません。そして、その自分にとつての殘念さは、あなたに對するとき、あなたの眞價を冒瀆した大なる罪惡となるのです。僕は、何といつていゝか分らない罪人です。愛子さん、(間)僕を、ゆるして下さい。

河上。今の生活、今の生活も本統ではないやうな気がするのだ。僕は、今の生活をもう一度たゞきこわして、もう一度生活の根から洗ひ清めて、動機と出發點を清めて、さうして、新しい第一歩をふみ出したいのだ。

愛子。それにはどうなさるのです。わたし共は、今のまゝで――

河上。愛さん、あなたは立派に新しい生活を創めそして新しい生活を生きてゐられるのだ。それは、あなたが一本氣で、心にウツと虚榮なく、僕のやうなものをでも眞に愛し、僕のやうな者の言葉でも眞に信じてくれた賜物だ。そこへゆくと、僕は、僕の生活などは、生活ぢやないのだ。生活ではない……の……だ。

愛子。では、どうしたらよいの。

河上。あゝ。

愛子。あの若々しい力をよびさまして下さい。生活と事業と勉強への聖い熱をよびさまして下さい。

河上。だめだ。僕はだめだ。僕は僕の内の醜いもののためにかみくだかれてしまつた。

愛子。あなたのうちの醜いものは、かみくだかれても、その醜いものをかみくだくあなたは儼と

して生きていらつしやいます。力をよびさまして下さい。生きてゐるあなたの力を見出して下さい。

河上。(沈黙)

(女中、ノックして、「奥様、奥様」とよぶ。)

愛子。君かえ。

女中。はい、明けてもよろしうございますか。

愛子。いゝよ。

女中。(左手扉をあけて入り来る)あの奥様、

愛子。何んだえ。

女中。(名刺をさし出す)この方が、お目にかゝりたいと言つてられます。

愛子。あなた、お會ひになりますか。(名刺を示す)

河上。今度にしてくれ、と云へ。(女中去る)

愛子。どなたですの。

河上。今度、出すことにした、例の僕の研究論文の版元の人だよ。

愛子。では、お會ひになつた方がよろしくはないの。

河上。

嫌だ。人にあへるやうな、心の状態にゐはしない。

愛子。

でも、(そこへ女中、又、あらはれる) どうおしだえ。

女中。

あの、今日は、面會日ださうですわ。それで、もしお差支へなかつたら、急な御用事ですから、一寸お目にかゝりたいつて——

愛子。

あゝ、さうだつたね！ あなた、(笑ひつゝ) 今日には面會日でございますわ。この間あなたがあんまり鬱陶しくしていらつしやるものですから、少しは世間と交はるのもいゝといつて、毎週今日を面會日と決めたでせう。お忘れになつて。(女中に) お通し申しておくれ。(河上に) いゝでしよ。

(河上黙してゐる、やがて、女中、版元の番頭南部を案内してくる)

南部。

(丁寧に御辭儀して) 奥様でいらつしやいますか。××堂の南部でございます。お早うござい

ます。

愛子。

いゝお天気だね。(河上に) あなた、わたしは失禮してゐてもいゝでしよ。えいゝでしよ。(ぼんやり) いゝよ。

河上。

愛子。

どうぞ、ごゆつくり。(一禮して去る)

南部。

(椅子に腰かけ) 先生、しばらく御無沙汰申してゐます。

河上。

あゝ、しばらくだつたね。——今日はよく來られたね

南部。

えゝ、散歩がてら、やつて参りました。途中で京濱電車が混んで、どうも大變な人出でござい

ますな。(ちろ／＼河上を見て) どこかお加減でもお悪るいではありませんか。

河上。

なあに、一寸、氣分が悪るい丈けのそだ。

南部。

春も盛りになりますと、人間のからだも鬱して來ますからな、ハハ、

河上。

(箕を吹かして、窓の外を眺める)

(女中、コーヒーをもつておいてゆく。小閑)

南部。

先生、今日お伺ひしましたのは、外でもありませんが、先達判をいたゞいてゆきました先生の「社會革命の將來」が、いよく製本できましたので——

河上。

あ、さう。

南部。

それで、其見本と、それから、初版の印税とを持つて参りましたのですが。

河上。

あ、さう。

南部。(風呂敷包より本を三冊ばかりと銀行小切手を出す)これが見本でございます。中々いゝ本になりました。米國イ・シー・フユラー社製造のスマイス製本機で綴付けたものですから、今の日本ではこれより確かな製本はございません。それから(河上の様子をうかがひつゝ)それは、主人の方から、初版の分丈け、差し上げてくれるやうにと………

河上。 なんだ、それは。

南部。(多少皮肉に)昔の河上先生とちがひ、今では本の印税などあてにはなざるまいが、ま、この春のお小遣ひだ、——初版分の印税でございます。どうぞお受取りを。

河上。(小切手を受取り、ぼんやり見つめてゐるうちに、顔がひきしまつてくる)これはどういふ勘定になつてゐるのかな——

南部。 初版三千部、一冊二圓五十錢、で——七百二十五圓でございますが。

河上。 ふむ、(さつと南部を一へつして)印税の歩合は?

南部。(づるさうに)へつへつ、それは、何んでも一割の勘定に——

河上。 それは最初の約束とちがつてゐるやうだな。

南部。 さやうでございますか。私は一向に存じませんで、それではかへつて主人に申しときます

から、これは、一先づお收めなすつて下さいまし。

河上。(片手で後頭部を制へてゐたが、さつと眉を動かす)受取れぬ。それは。

南部。 どうしてでございますか。それでは——

河上。 かない約束をした、約束通りにやつして下さい。

南部。 え、それはかへつてから話してをきますが。(周囲を見まわし)以前とちがひ。先生も、あふ云ふお立派な奥さまをおもちになつて、こんな結構なお住居に何不自由なく暮らしていらつしやるのですから、印税など、少しは——

河上。 ふむ。己れがかうして愛子といつしよになつてゐるから、印税は負けろといふロジックかえ。ハツハツ(悲痛なる哄笑)最初の動機(濁りが、ここまでつきまといつて來てゐるとは!)がっかりしたやうな聲)南部君、

南部。 はい。

河上。 本を止めてくれ。出すのは止めてくれ。

南部。 そ、そ、そんなこと、あなた御冗談仰つちや困ります。そんなことをされた日には手前共××堂は破産してしまひます。

河上。お前のやうな者の言ふことをきいてるては、この河上の生活が破産してしまふわ。ハツハ、いや、君のせいではない。一つの悪い種子が、ここまで、まっはりついて來てゐるのだ。邪惡な己れの最初の心の陰影が——(南部に)印税なんか、どうでもいゝ。どうでもいゝやうに勝手にしろ。

(そこへ、女中あらはれ、少しためらつてゐるが河上に一禮する)

女中。あの、お客様でございますが。

河上。愛子はゐるのか。

女中。奥様は、お庭の方へ出ていらつしやいません。

河上。ふむ。誰方だ。

女中。お會ひすれば分りますからとさう申してをります。あの、三十四五の丸髷にゆつた女の方でいらつしやいます。

河上。(なげやりに)とにかく通してみろ。(女中去る。南部に)どうしても君の方の勝手にしろ。

南部。それは、先生御無理と云ふものです。

(女中、新橋のある待合の女將お絹(三十四五)藝妓あがりの遊いうちに艶氣のある年増をみちびき來

る。お絹は、風呂敷包みを持ち入り來る。)

女中。どうぞ、こちらへ。

お絹。はい、まことに、どうも恐れ入ります。(河上を見る)おや、河あさん、お久しぶりでございます。

河上。(一寸驚ろく)うむ、お絹さんか。

お絹。(南部に一禮し、河上に)お絹さんか、もないぢやありませんか、河さん、その後はほんとにどうなすつたの。(椅子にこしかけ、あたりを見廻す)たいさう、結構なお住居ぢやございませんか。その後河さんには、御出世遊ばしておめでとうございます。いくら、いゝ奥様を射當てなすつたからつて、たまには私共へもいらして下すつたつて、罰もあたりはしないでしやうに、ほん

とに……………

河上。(苦々しく)どうして、ここにゐることが分つた。

お絹。それはあなた蛇の道は蛇と申しますもの——

河上。そんなことをきいてゐるのではない。

お絹。あれ、やつぱりもとの怒りつほいのは直らないと見えますわね。(風呂敷包みから菓子折りを

出す)何んにもなくて、河さんのお好きな風月の最中を少し買つて来ましたの。(河上をじつとみて)河さん、お加減がお悪いのぢやありませんか。ええ?

河上。 うん、少し頭が痛い。

お絹。 實はね、去年の暮から、今の奥様との事件以来、河さんはばつたりお出にならなかつたでしよ。新聞や世間ではそれはく大した評判なものですから、あなたもとんだことをなさつたと内々心配していゝのか、お祝ひしていゝのか、どつちにしようかと迷つてゐたのよ。そのうちに、何んでも、あなたは、いよく大久良さまの奥様と一緒に世帯をもちなすつたへあたりを見廻し心持聲をひそめる)といふお噂でしたが、あなたのお所は皆目知れませす、こんなに、結構な生活を遊ばしてゐるとは夢にも思ひませんし。

河上。 ふん、(目をつむつて、腕を組む)

お絹。 一三日前に、よくあなたと御一緒に見えた、あの篠塚さんが三人づれでお見えになつて、私共がお相手をしてゐますと、もう、口をきわめて河さん、あなたの悪口をしてゐるのでしよ。(間)河上ももうだめになつた。理想だ革命だと、大きなことを云つてゐても、結局女一人に參つておさまつてしまつたぢやないか。女一人で納まれる理想や革命なら、最初から、どう

とかこうとか——とそれはきいてゐるわたしでさへかつとするほどだつたものですから、あなたは今どうしていらつしやるか、おたづねしますとね、かうかうかういふ結構な別荘に奥様成金で納つてゐらあ、さうさう、さすがに世間が戀しくなつたと見えて、新聞の消息に、毎木曜日を面會日にする^と出てゐたから、今度お前、行つておいでつて、といふ鹽梅なんですよ。さうですか、でもね、河さん、幾日ぶりですかね、もうかれこれ半年になるぢやありませんか。

河上。 うむ。(小さく)しばらく御無沙汰した。みんな變りはないか。

お絹。 それがね、河さん、(ぐつと涙ぐみ)それはそれは、ねえ。河さんのやうに、かうして結構な出世——

河上。 出世とは何んだ——

お絹。 あなたは、やつぱり、恐はいのねえ。おほ、河さんのやうな工合にゆけば申分はないけれどね、河さん、あの、あの妓ね、小春ちやんはあなた、今年の二月死にましたね。可哀さうに、あなた、(間)死ぬ間際まで、あなたのことを恨んでをりましたよ。ほんとに、ま、あんな可愛い、一本氣な妓をむごたらしく見捨てるなんてことが——私共では小春さんを殺したのはあなただと申してゐますわよ。

河上。

(涙ぐみ) さうか。小春は二月死んだのか、——大分病つても死んだのか。

八八

お絹。それがねえ、長病ひでもして死んだのなら、未だあきらめもつきますけれど、さうね、二月の十四日の晩でしたよ。夜の衣装の着つけを一人でしてゐるうちに、鏡の前でとつぜん、倒れましたね、そして、その夜の十時過ぎに、それは安らかに、消えるやうに佛様の國へなくなりましたよ。ほんとに、あんな氣立の優しい、子はどこへいつたつて、とてもものことに——

南部。(さつきから黙つてきいてゐたが) 先生、それでは、それ丈けはとにかくお預けしてをきますから、あとは、又、家へかへりまして、主人と相談しまして——

お絹。(南部に) どうも、御用談半ばへ参りまして、とんだお邪魔を——

南部。いや、なあに、河上先生とは古いおなじみのやうですな、

お絹。は、毎度御ひいきにしていたゞいてをります——

河上。(お絹に) お絹さん、あなたの方へ、その後、ほつたらかしてある借りがどれ位になつてゐますかな。

お絹。いゝえ、河さん、それは、もう、わたしや、小春さんへの香典だと思つて、決して何んしてゐませんから、たゞ、もう、あなたのお住居の知れたうれしさに、小春さんの亡くなつたお

話しやら、その後どうしていらつしやるのやら、何やかやらで、お伺ひしたのですから。

河上。いや、さうばかりも言へない。(間) それでは、と(南部の出した小切手を取り、お絹の前に置く) これ丈けを取つてくれないか。小春への香典やら何やらに——

お絹。いゝえ、滅相な、そんなこと! (と云ひつゝ小切手を見る) あら、河さん、これああなた、大さうな金高ぢやございませんか。あなたの方の借りといつたつて、高々二百かそこいらですもの、河さん、これは、あなたしまつておをき遊ばせ。

南部。(にやにやと) それぢや、わたしは失禮いたします。別に何も御用はございませんまいね。

河上。うむ。どうも御苦勞、どうでも君のいゝやうに勝手にしてくれたまへ。(半ば獨り) 河上が、本など書いて出すのが、そもくの間違ひなんだから。

南部。おかみさん、御のつくり、失禮します、(去る)

(左手扉にて愛子の聲で「さよなら」ときこえ、やがて扉口よりあらはれる)

愛子。あなた、本屋はかへりましたね。

河上。うん。

愛子。(無言にてお絹を見る)

お絹。奥様でいらつしやいますか。毎度、こちらの先生には御ひいきになつてをります。今日は
大さうお邪魔をしてをります。

河上。わたしが、以前よくいつた待合の女將だ。

愛子。おや、さうですか。河上がお世話になつてをります。

河上。(お絹に)お前にこれをやる。これは、お前や、亡くなつた小春や、その他、しばしの情け
をこのわたしに惜しまなかつた女達への、わたしの懺悔の心の片はしだ。今日は、何も云はず
に、これをもつてかへつておくれ。

お絹。でも、河さん、こんなに、していたゞく法はないぢやありませんか。たとへ、今どんなに
不自由のない生活をなすつていらしても、こんなことをなさるものぢやございません。わたし
は、このうちから、それでは、二百圓丈けいたゞいて――

河上。お絹さん、お前は未だこの己れの心が分らぬのだ。有る丈けの金は黙つてもつていつてく
れ。こんなケチのついた金は、たとへ、お前さんが残していつても、わたしや、溝へすてゝし
まふのだから。

お絹。河さん、あなた、どうかしてゐるのぢやないの。

河上。どうもしてはゐない。今日は頭がいたい。切角来てくれて、未だ茶も出さないが、今日は

この金をもつて、黙つてかへつてくれ、小春の家や朋輩衆にもよろしく言つてくれ。(何となく
涙ぐむ)

お絹。(何となく涙ぐむ)それぢや河さん、とにかく、お預りして参ります。それでは奥さん。御免
下さいまし。河さん、東京へお出の節はぜひお立寄り下さいまし。お待ちしてをります。それ
では、いゝえ、どうぞ、そのまゝで。ではさようなら、御機嫌よろしう。(去る)

愛子。(見送り)さようなら。(間)あなた。

河上。(黙つて卓子にもたれて考へこんである)

愛子。あなた。どうなさいまして。お薬をもつて参りませうか。

河上。(いらなさいといふ容子)

愛子。ピアノでも弾きませうか。(河上、黙つてゐるが、急に軽快にピアノ臺にむかふ。そして、なつか
しき春五月の曲を奏しはじめ)あなた少しは心を楽しくもつて下さい。わたしは幸福なのです
ら。(音楽)あゝ、どんなに、今の生活が、わたしには、幸福でせう！そして、その幸福を與
へて下さるのはあなたです。あなたはわたしの太陽です。王様です。光りです。すべてです。

(楽しいピアノの演奏は、かなりにつづく。春の日、青い空と海。)

九二

河上。

(頭を伸ばし、愛子の後姿を、いつと見守つてゐる。やがて、沈痛に。)

愛子。

はい。

河上。

ピアノをお止め。

愛子。

え、(止めてこつちを向く)何御用。

河上。

驚ろいてはいけない——

愛子。

え。

河上。

僕は、あなたにお別れしなくてはならない——

愛子。

え、!!

それは、それは、どういふ意味のお言葉です。わたしには分りません。

河上。

僕は、あなたと別れなくてはならない。

(河上椅子より立つ。椅子後へ大きな音を立て、倒れる。愛子も亦立つ。二人しばらく沈黙佇立す。)

愛子。

わたしを苦しめないで下さい。さつきわたしの申したのは、あれはウソです。

河上。

僕は今眞面目に言つてゐるのです。

愛子。

何故、私達は別れなくてはならないのです。この生活のどこが悪いのです。私は幸福で

ございます。あなたさへ、わたしを愛して下さいますなら。日はあんなに輝やいてをります。空はあんなにも喜ばしげに蒼々と、海はあんなにうつとりと藍色にうるんでゐます。そして、ここは、静かで、温かく、楽しいではございませんか。

河上。

僕は(苦しさに)あなたに、とにかく別れなくてはなりません。

愛子。

どうしてでございます。何がいけないのでございます。

河上。

僕がいけないのです。いけない僕の生活を、一人で、最初の第一歩から歩み直すために、

僕はあなたにお別れしなくてはなりません。

愛子。

あなたは、さつき、懺悔をなさいました、それでいゝではございませんの。そして、今日から、このまゝで、さらに新しい生活へはいれるではありませんの。

河上。

だめだ! 愛子さん、僕はお別れするのが辛い。しかし、お別れしなくては、僕の生活の

根が地へ下りません。僕の生活が死にます。(間)今のさき来た南部は、僕があなたといつしよに生活してゐるのを、約束の印税を破ることの理由と心得てをつた。また、あのお絹は、僕があなたと生活してゐることを「出世」だと言ひをつた、——それ丈の事實でも、愛さん、僕はお別れする十分の意義を認めずにはられません。僕の第一の失策は、地に足のついた重い深

い誠實なしに、あなたに對したことにあります。愛さん、僕をもう一度一人にして下さい。そして、僕が、もつと、本統の人間になつた時、その時、もう一度一緒に生きて下さい。

愛子。 そんなこと、(狼狽して) そんなことを仰しやるものぢやありません。俊さん、そんなことを言はないで、わたしといつしよにゐて下さい。あなたは、わたしの救ひ主、あなたはわたしの太陽。あなたなしのわたしの生活はどうなりません。考へても見て下さい。わたしから逃げてゆくことは、わたしを殺すことです。わたしの生活を破壊することです。わたしの幸福を粉砕することです！

河上。 僕の罪をゆるして下さい。僕達は——いえ、僕は、知らず識らずのうちに、間違つた軌道を走つてゐました。いつまでも、その軌道を走りつゞけることは出来ません。僕の罪をゆるして下さい。最初の出發點に、不純なものをもつた僕の罪を。あなたは、正しかつた。あなたは立派な勝利者だ。僕に對しても、あの大久良男に對しても、社會に對しても、あなたは立派な勝利者です。僕は、いつまでもこのまゝ、かうして、ゐられません。

愛子。 でも、今更ら別れるなど——
河上。 別れねばなりません。僕をもう一度一人にして下さい。

愛子。 あなたが一人になることは、わたしも一人になることです、それはわたしの破滅ですわ。

河上。 あゝ！ たとひ、あなたの破滅でも、(さつと青くなる) 僕自身の破滅にはかへられないのだ。愛子さん、僕を一人にして下さい。

愛子。 あなたは、あなたは、(ピアノ臺にすがり、泣きかゝる) どうして、そんなことを仰しやるのです。河上。 僕が悪かつたのです。——僕には正當な意味で、未だあなたを戀する——征服する力量が具つてゐないので。あなたを戀することは、僕にとつては力量以上の仕事だつたのです。その力量以上の仕事である僕は虚榮心でごまかしてゐたのです。——あなたによつて眼はひらかれたのです。そして、あなたの本統の値打ちが、このごろやつと分つて來たのです。そして、僕は、僕として生きるためには、もう一度出直す必要に迫られてゐるのです。このまゝでは、僕は滅びます。僕も、河上俊雄です。男です。僕は滅びてはなりません。たとひ、それが、あなたの破滅にならうとも、今は、そんなことをかまつてゐられません。僕は第一に僕自身を救ふ義務をもつてゐます。あなたには大丈夫、あなた自身を救うてゆく力が具はつてゐます——

愛子。 わたしは お別れしたくはありません。

河上。 僕も別れたくはないのだ。何んで、別れたいものか。たゞ、このまゝゐるでは、僕はあなた

の肥料になつてしまふ。この僕が！僕は、あなたに別れなくては、死んでしまひます。僕は
生きたいのですから。僕がもつと強く、もつと力量が具はつたら、そしたら、又僕を愛して下
さい——

愛子。 おゝ。(ピアノの上へひれふす)

河上。 あゝ、何んで、僕が、別れたいものか……。たゞ、僕は——

(愛子のすゝり泣き)

静かに幕

帝 王 者 (五 幕)

——一九二一年春の作——

帝王者

人物

清瀬豊次郎

革命家

飯森音羽子

その愛人、王立劇場の女優

花子

その娘

飯森忠哉

音羽子の兄、海軍豫備將校

染菊

京都祇園の藝妓、清瀬の愛人

廣野源一

労働者の首領

みや子

その愛人

丘 眞 太 郎 みや子の兄、廣野、清瀬の親友
 綾 子 その愛人、廣野の妹
 宮 川 久 子 王立劇場の女優
 齋 田 京都の警察官
 芳 村 一 哉 家出せる少年
 と し 子 同じく少女
 その 他 女將、女中、藝妓、不良青年、労働者、刑事、少年、少女など
 場 所 東京、京都、湘南の地
 時 代 現代、ある年の秋より春にかけて

第一幕

秋九月の中頃、東京下町の比較的静かな町の音羽子の家なる庭前に面した音羽子の半ば西洋風の居間。
 窓際によせて一臺のピアノ。今しも、一人の令嬢のお稽古をしまつた所。花は傍で玩具に餘念がない。

少女。 それでは先生、失禮いたしますわ。——今日で、やつとわたしシヨパンが少し分りかけたやうな氣がいたします、シヨパンの美しさと、その英雄的なしかし女性的な感情とが、ほんとうれしくてなりませんわ。

音羽子。 (ピアノのキイを無意識にかきならしつゝ) そんなに、お氣に召しまして。

少女。 え、わたしすつかり氣に入つてしまいましたの。感謝いたしますわ、先生に。初歩でさへかうですもの、これからが楽しみですわ。——先生のやうに弾けたらどんなにかいゝことだらうと、今、考へずにもられませんの。

音羽子。 わたしなんぞ、弾くお仲間へははいれないの。

少女。 それなら、わたしなどは、どんな部類へ入るのでせうか。心細くなつて参りますわ。——大さう長居をしてしまひました。先生、御免下さいまし。いゝえ、どうぞ、そのまゝでいらし

て下さいまし。

一〇二

音羽子。では、お見送りはしません。お大切に。さやうなら。

少女。さやうなら。(少女次の室へ出て、去る。音羽子、何かを弾きかけては又、他の断片を弾す)

花子。お母さま、もう、お傍へ行つてもいいの。花ちゃんはひとり寂しくなつてよ。

音羽子。

マ、さんは、もう、おひまになつたから、こちらへいらつしやい。(花子、玩具を捨て、

走りよる。胸に顔を押しあて、頬すりをする) 花ちゃんはよつく、さつきからおとなだつたわね。

さう、もう今日はこれでマ、さんのお仕事はお仕舞ひにしませうね。

花子。

あたし、眠くなつたのよ。なんだか、淋しくつて、つまらなくなつて。起きてゐてもつま

らないの。マ、ちゃん、寝るとね、寝るとね、寝るとそれ面白いものにたいさう會へるの

よ。

音羽子。

眠むたいのなら、床をしいて、夕方までお寝みなさい。

花子。

(音羽子の膝へもたれ) あたし、いつかのやうに、ここで、お母さまのところでねたいんだ

の。

音羽子。

そんなことを言はずに、ちゃんとしてお寝みなさい。ね、花ちゃんはおとなですからね

え。(ピアノをしめ、立ち上り、部屋の後方の帷をあげ、花子をねかす) さ、マ、さんはまだお仕事がありますから。さう、唄を唱へつて、それちや一つだけ唱つて上げますから、一人でお寝みなさい。(微かに) ……唄を忘れた金糸雀は、象牙の船に金の櫂、月夜の海に浮べれば、忘れた唄を…：あら、もう、この子は眠つてしまつてゐる。これちや、まるで唄はおまじなひのやうぢやないの。ほ、淋しくて、つまらないのは、お前ばかりではないのよ。ほんとに、何といふ淋しい、つまらない、この頃のわたしなんでせう。(ピアノ臺に戻つてくる。ほんやり戸外を眺める。戸外で戸を明ける音) おや、又、誰れか来たやうなこと。

女中。

あの、宮川久子さんがお見えになりました。お通ししてもよろしうございますか。

音羽子。

い、よ。こちらへお通ししておくれ。

女中。

はい。(去る、宮川久子入り来る)

久子。

しばらく御無沙汰してをりました。今日一寸この近所まで用達しに出たものですから、お

寄りしましたのよ。それに、少—

音羽子。

ようこそ、ほんとにしばらくでしたのね、お變りもございませんでして、さう。大さ

う、今度の興行は、評判ではありませんか。蔭ながら私喜んでゐますわ。

一〇三

久子。

い、え、とても、私なんかだめなのですわ。みんなよくさう申してゐますのよ。今度のあの「孔雀夫人」なども、貴方が一座においでになつたら、どんなに素的な、目覚めるやうな、艶でやかな孔雀夫人が見られることかつて。

一〇四

音羽子。

お世辭ばかり。私のやうな舞臺を捨てた女をからかはないで下さいな。

久子。

い、え、少しもの分つた観客達は私の孔雀夫人を見ながら、頭の中では、音羽子さん、あなたの女王のやうな誇らかな美しい嬌艶な幻しを描いてゐますのよ。どんなに私が精一杯の藝能の力を注いで勤めたところで、結局、みんなはかう云つてくれるだけですわ、あんな女でさへがあれだけにするのだから、前の音羽子が演つたら、どんなに生き生きと精彩のある藝を見せてくれることだらう。——でもね、私はさう云はれても、決して不快でもなければ、何んでもありません。あなたの天才の力が、こんなにも深く人々の胸にやきつけられてゐるのかと、眞實の藝道の力の恐ろしさと偉大さを感じてゐますの。そして、さうしたあなたの、永久の友達の一人としてゆるされてゐるのかと思ふと、わたし、うれしくてならなくなりませわ。

音羽子。

さう仰有つて下さるのは貴方ばかりですわ。私は、今となつては、自分を大それた天才だとも思ひませんし、思ひたくもありません。わたしは、たゞ平凡な、つまらない、しかし、眞

面目な、一人の女であるに過ぎませんわ。

久子。

い、え、それは、貴方が近頃、妙に沈んで引つこんでいらつしやるせみなんですわ。それあ世間では、する分あなたのことをひどくいつてゐますの。しかしそれは何も世間ばかりが悪いといふわけではないわ。いろいろ貴方のことを悪く云ふのも、つまりは可愛さあまつて憎さが百倍といふ心理なんですのよ。あなたがはじめて王立劇場でクレオパトラを演つた時には、公衆ははじめて日本にもほんとうに女優らしい女優が出現したと一人のこらす思つたのよ。そして貴方の天才と將來を讚美もすれば祝福もしたのですわ。つまりね、これから、どんなによい芝居が見られるか、それを想像しただけで久しい間の渴望をもう一時に満足させられたやうに思つたのね。ところが、貴方は一年と経たないうちに、役ならやつと三つ四つ位しか演ないうちに、あの札つきの——ごめんさい、——清瀬さんとあゝした仲になつてしまつたでせう。世間から云へば、自分の畑に自分の手で育て上げようとした大切な芽を横取りされたやうな形ですわねえ。それでも、世間は割合に寛大だつたのよ。あなたが舞臺へ出てゐる間は、あなたが清瀬さんと同棲してゐるやうが、花子さんといふ可愛い、子を見せつけられようと、あなたの藝術に對して黙認してゐたのよ。ところが、今度といふ今度は、あなたが舞臺を休んでから半

年にもなる……………

一〇六

音羽子。 そんな話、もうよして下さいね。何もかも、私が悪いのですから。私の悪いことは私が一番よく知つてゐるのですから。

久子。 だから、あなたはぢれつたくなるのですわ。貴方は少しも悪くはないのです。音羽子さん、怒らないでよく、聞いて下さいね、貴方は少しも悪くはないのです。たゞ、悪い蟲にあなたはつかれてゐるのです。悪いことにかけては日本一といはれる悪者があなたをしつかと羽がいじめにしめつけてゐて離さないのです。そして、あなたの眼を心を、魂を蔽ひかくして、本統のものを見せまいとしてゐるのです。よく心を落着けて考へてごらん下さい。——貴方はたしかに清瀬さんにだまされてゐるに違ひありませんのよ。

音羽子。 どうして、わたしが、清瀬にだまされてゐるのでせうか。

久子。 (少し嘲笑ふ) どうしてだまされてゐるのか、あなた、胸に手を置いて考へてみたらよさうなものぢやありませんか。それでは、あなたの善良な頼もしい清瀬さんは、今、何處にゐるのです。あなたはそれを御存じでして。(音羽子沈黙) どこにゐられるか御存じでして。

音羽子。 でも——

久子。 御存じではないでせう。清瀬さんが支那へたゞれたのは、今年の春もまだ浅い三月のことではございませんか、それからもうかれこれ半年以上の間、あなたのところへ何かお便りがありませんか。

音羽子。 あの人は、旅へ出てお便りをするをしない人なんですから。

久子。 まあ、あなたのやうに、さう言つてすましてゐられ、ば、それでいゝやうなものですけれど、それにしても、半年以上も、遠い支那へ、しかも、清瀬さんのやうに、社會の改革だの革命だのと生死も分らない凄お仕事をなさる方が、御自分の愛人や可愛い、お子さんのところへ一つや半分のお便りがありさうなものぢやないでせうか。

音羽子。 でも、便りはしないからと初めからのお約束だつたのですから、便りのないのは達者な證據だらうと思つて、安心してゐるのよ。

久子。 さうお、——それだけあなたが、清瀬さんを信じていらつしやるのなら、何も、私なんか彼れこれ云ふべき筋合でもないやうですけれど、しかし音羽子さん、男は恐ろしいものなんですのよ。お分りです。えゝ？

音羽子。 (淋しく微笑。)男が恐ろしいものだと思つてゐるの。でも、わたしは、そんなに、男を知つて

一〇七

はるませんから、何とも申し上げられませんわ。

久子。 男といふものは女をだますことを一つの功名手柄のやうに考へてゐますのよ。女を征服することが、男にとつての何よりの事業であるときへ考へてゐるのですわ。だから、あなたも御用心遊ばせ。

音羽子。 わたしが、清瀬にだまされてゐるとしても、仰有るのですか。(半獨言、微かに)そんなことは、とてもわたしには、信じられませんわ。

久子。 世間では、みんながさう申してゐますのよ。音羽子さんも惜しいものだ、清瀬といふ毒蛇に十重二十重にとぐるを巻かれてゐては、惜しい一生を臺なしに、日蔭の花として送つてしまふのか、と。あなた御自身のためにも、あなたの才能のためにも、それはそれは、氣をもんでゐますのよ。あなたはどうか考へか知れませんが、以前のことはしばらく云はないとしても、今度のことだけでも十分考へて御らん遊ばせ。清瀬さんが支那へいらつしやることは、それやおの方の生涯の事業のためでもあり、一つには日本の今の政府と仲が悪く日本にゐられないといふ事情もありだつたのでせうから、無理もありませんけれど、なぜ、それなら、貴方を連れていらつしやらないのでせうか。それが第一わけが分らないぢやありませんか。それも、

たゞの支那浪人といふのではなし、日本にゐるやうが支那へのゆかうが、立派に何かの思想家として、革命家として領袖の方ぢやありませんか、その心ざしだけあれば、あなたを伴へていらつしやることは別に何んでもないことぢやありませんか。それで、貴方だつて、たゞの素人ぢやないので、場合によつては、支那を舞臺に四億の民衆にあなたの天才を見せてやることも出来るんでせう。それに、あなたを連れてゆかないで、しかも、あなたに清瀬さんの歸るまでは、一切舞臺へ姿を見せてはならぬといふのはあんまり専横すぎるぢやありませんか。——全く、音羽子さん、あなたのことだけれど、わたし自分のことのやうに腹が立ちますわ。あなた程の方になれば、もうあなた、あなたはあなた一人のあなたでもなければ況して清瀬さん一人のあなたでなく、全社會のあなたぢやありませんか。その天下のあなたをそんなことになさるといふことは、まるで、社會の公共物を横領するやうなものぢやありませんか。——それである、あなたの方へは毎月仕送りでもしてくるのでして？

音羽子。 いゝえ、でも、それは、最初からの約束ですから。清瀬が支那へいつてゐる間はわたしは、自分で自分の身を支へてゆくことにしてゐますから。

久子。 それが、第一分らないぢやありませんか。あなたに舞臺へ出ることを禁じておき乍ら、一

文の仕送りもしないといふ法はないでせう。あなたは、そんなに清瀬さんに勝手に振舞はれながら、それでゐて、別に、よく辛抱してゐられますわね。

音羽子。 だつて、舞臺へ出なくとも家へピアノや何か教はりにくる令嬢方からの月謝や何かで、わたし一人位どうにでもやつてゆけますから。だから、別に清瀬からの仕送りなんかなくても十分ですわ、——それに、舞臺へ出てゐなければ、無駄なぜいたくはしなくて済みますからね。

久子。 それがあなたの仰有る言葉でせうか。飛ぶ鳥も落した王立劇場のスターの仰有る言葉でせうか。世間ではあなたのことを馬鹿だと申してゐますわ。

音羽子。 それは、世間の方はお利口ですから、わたしを馬鹿だと仰有るのに無理もありません。といつて、私は、お利口になりたいとも思ひません。

久子。 あなたは、どうして、さうも、變つたのでせう。音羽子さん、實際、あなたはお變りになりましたわね。むかしのやうに、むかし以上に美しくいらつしやるあなたが、どうしてさう思想ばかりが、むかしとは變つて來たのでせう。

音羽子。 でも、むかしは、わたし、馬鹿だつたのですわ。

久子。 さうでせうかしら。世間では、今のあなたを馬鹿だと申してゐますわ。

音羽子。 (沈黙)

久子。 それにはね、——音羽子さん、わたし、餘つ程でなくては云ふまいと覺悟して來たのですけれど、申し上げますわ。驚きになつてはいけませんよ。清瀬さんはね——

音羽子。 清瀬がどうかしたのでございますか。

久子。 清瀬さんはもう一と月前から日本へ歸つてゐらつしやるのださうです。(音羽子の様子をうかがひ)何んでも今は京都にゐらつしやるさうです。支那から大さうお金を持つていらつしやつて、そのお金を京都の祇園で湯水のやうに使ひ捨て、おいでになるといふ噂ですのよ。支那においてになる時だつて、それはそれは、大遊蕩だつたさうですね。京都では、今祇園で有名な染菊といふ舞妓が清瀬さんに熱くなつてそれは生きるの死ぬのと大へんな騒動ですつて。だから、それを知つてゐる樂屋内のもものは、流石に清瀬さんはえらい、日本一の銀流しだと今更のやうに感心してゐますのよ。

音羽子。 それは眞實の、確かな話してございますか、それとも、唯、單に、噂だけなのでございますか。

久子。 確かな話ですのよ。その清瀬さんのお金の出所が分らないといふので、今、警視廳や新

聞社は大騒ぎをやつてゐるのよ。あなたのところへ何か来やしなくつて。

音羽子。 え、近頃ちよい／＼いろんな方が見えるには見えますわ。

久子。 それ、ごらんなさい。實際、清瀬、清瀬と天下にその悪名を誣はれるだけあつて凄しい人は凄しい人ですわね。わたしは、その筋の方から聞いたのですから、事實は確かですのよ。

音羽子。 あの人は、金さへあれば、なくなるまで費はねば承知のできない人ですから。

久子。 あなたは未だそんなことを言つていらつしやる。でも、もう、それは負け惜しみといふものになりますわ。一と月前も日本へ歸つてゐながら、あなたの處へ来ないといふ法がないぢやありませんか。ハガキの一枚位よこしたつてよささうなものぢやありませんか。ハガキ一枚よこさずに、お金があるからといつて、好き勝手に、祇園あたりで藝妓買ひしてゐるといふ法はないぢやありませんか。

音羽子。 でも、それは、あの人の自由のことですから。多分、わたしに知らさないのは、又、直ぐ支那へ歸るのかもしれないわね。

久子。 どうしてあなたはさうも素直で、眞ツ正直でゐられるのでせう。あなたはそれではまるで生娘まがらよりもわけが分らないぢやありませんか。

音羽子。 どうだと仰有るの、久子さん。

久子。 あなたは、一度でも、清瀬さんはあなたを捨てたのではないかしら、とお考へになつたことはないの。あなただつて、もう花ちゃんといふ可愛い、お子さんまであるたゞの娘さんの年頃でもないでせうに。

音羽子。 そんなことを、わたしは、考へたことはありません。それに、考へたくもありませんし、考へる必要もないことですから。

久子。 ほんとに音羽さん、しつかりして下さいよ。あんな、革命ゴロの思想ゴロの、天下の政治も經濟も思想も文學も、男も青年も、女といへば、貴族の夫人、令嬢、女學生、藝妓、ありとあらゆる女をなめつくして歩く、天下名うての大悪黨に、王立劇場の花形が一杯くはされて黙つてゐられますかよ。音羽子さん、しつかりして下さいよ。あなたは、だまされて、あなたの最もいゝところを吸ひつくされて、そして、花ちゃんといふ子供まで背負されて、そして結局、捨てられてしまつたのですのよ。

音羽子。 わたしが、何故、どうして、捨てられたと仰有るの。わたしは分りません。

久子。 それが、あの男の手なんですよ。女といふ女の魂の髓まで喰ひ入つて、たとへあの男が永

久に、その女の前から見えなくなつても、尙、その女を生涯、しつかと後から羽がいじめにして身動きのできないやうにするのが。あなたが、あの男に捨てられたのでないかしらと、丸半間の留守にされ、手紙一本もらはず、金一文送られず置いてきほりにされて、日本へ歸つて來ても知らされず、京の祇園で遊び放題に遊んでゐると云はれても尙ほ、あの男を疑ふ氣になれないほど、それ程に、あの男はあなたの心も體も、髓の髓まで喰ひいつてゐるのよ。それ程にあなたは征服されつくしてゐるのよ。さう云ふ目にあはされてしまつて、一生涯を埋れ木にしてしまつた女はこれまでに數知れない程ゐるのですから。音羽子さん、あなたもいゝ時分に目をさまして、あの恐ろしい悪者の魔力から脱れて下さいな。私達がどんなに氣をもんでゐるか、それにもかゝはらず、あなたのあの男を信することの深さや、一面あなたの香氣さには實際あきれて物が申されない位ですわ。——

音羽子。でも、わたしが捨てられたと仰有ることは、どうしても分りませんわ。

久子。だつて、あなた、現に、捨てられてゐるのぢやなくつて？

音羽子。どうして、わたしが捨てられてゐますの。

久子。だつて、清瀬さんは半年もよりつかず、日本へかへつてもあなたに端書一本よこさないぢ

やありませんか。

音羽子。それが、捨てられるといふことなんですか。

久子。さうですとも、戀ひしてゐた男が、何とか理由をこしらへて、支那へまで逃げ出し、半年もうつちやつておけば、捨てたのではなくつて。

音羽子。わたしは、清瀬がそんな男だとは思ひません。清瀬は女一人を捨てるために、わざ／＼支那へまで出かけなくてはならぬやうなそんな卑怯な無氣力な男だとは思ひません。第一捨て、捨てられるといふ言葉がよくないと思ひます。清瀬はよく申しました。男と女は捨てる捨てられるといふやうな從屬的なものであつてはいけません。むしろ、お互に別れる、別れやう、と云ふことでなくてはならぬと。私と清瀬が別れるに、清瀬は別に私にこつそり、いつはつて、支那へ出かけたかきまでしなくてはならぬわけはありますまいと思ひます。別れるなら別れると、明白に私に云つてくれるはずで。——たとへ、別れたところで、私の清瀬に對する考へは變りません。一緒にゐるから清瀬は豪い男で、別れたからつまらない男などと、自分の勝手によつて男の價値を上下したくはありません。何といつても清瀬は清瀬です。同じやうに、私は私なんですわ。

久子。 すつかり貴方も清瀬張りにおなりですわね。

音羽子。 それあ、貴方は貴方で、何とでも仰有つても、私はそれを別に何とも思やしませんの。しかし、あなたの仰有るやうに私が捨てられたのであつて、清瀬とはもう永久に別れるのであつても、私の清瀬に對する尊敬と愛情はかはらないつもりですの。ほんとに、清瀬は、私に人生といふものがどんなものであるか、男といふもの、女といふもの、戀愛といふもの、すべて一切の生活の真相がどんなものであるか、といふことを教へてくれた、いはゞ人生の大宗師でしたから。この人生と世界に對する眼を開いてくれた眞の先生でしたから。清瀬に會ふまでは、私の眼はひらいてゐても物象を見ることをしませんでした。たゞ、一面にほうとした人いきれ、慾望、バニテイ、名聲を博したい、といふやうないぢらしい感情と思想に充たされてゐました。舞臺の上で、一生懸命に歌つたり、しやべつたり、踊つたりして、さもしい公衆の喝采を受けることが、どんなにどんなに、うれしかつたことでせう。しかし、さうした慾望のいかに低いものであるか、又、心も體も下劣な公衆に對つて、悲惨な喝采を獲ることの、いかに淺ましいものであるかを、知らしてくれたのは清瀬でございました。俗衆の浮薄な好奇心や、姦亂心をあてにして生きる哀れな女となつてはならぬ、人は誰れ人のためよりも先づ、自分自身の

ために生きなくてはならぬ、さう清瀬は云つてくれました。

久子。 それがああ、男の手なんですわ。先づ、何もしらぬ未耕地のやうな柔らかい純潔な女の魂の世界を、あの男特有の思想と情熱とをもつて征服してかゝるのですから。人は公衆の世俗心のために生きずに、自分自身のために生きよ、といふことは、取りもなほさず、あの男自身のために生きよといふことなのよ。

音羽子。 それはさうかもしれませんがね。何故なら女として、あのやうに一概に偏よつた考へに壓倒されない限り、先づ第一に自分自身のために生きねばならぬといふことがはつきり胸にしみて感じられ、ば、自然清瀬のやうな眞實に男らしい男に戀ひすることになるかもしれない。ん。(間)しかし、それは結果であつて、原因ではありません。清瀬の説く教へは依然として、汝自身の生を生きよといふことなんですわ。そして、たまたま清瀬自身が、一個の赤裸々の間として見るときに、現代のどんな男よりも一級すぐれて人間らしい男であることが、清瀬を慕ふ情を女に起さすにすぎません。ですから、もし罪があるといへば、清瀬を男らしい男にくつた天そのものに罪があるとも云へますわ。—— 眇くとも、私にしたところで、いはゆるバトロンと稱してついでくる、お金持や華族の色がき共や、株主や社長のヘンな男共の玩弄物に

なつてゐるよりか、現代の特権階級にとつては一大敵國の想ひのする、革命家で、思想家で、世界的な人物で、いかなる迫害にも屈することなく、飽くまで眞の現代の思想を双肩に擔つて、天下を闊歩してゐる、力も情けも涙もある清瀬の全身全靈に愛されもし、愛しもする方が、どんな女としても本望でもあり幸福でもあるか分らないぢやありませんか。

久子。(ひるんで沈黙)

音羽子 誰れだつて金ぶくれの禿頭よりか、あの英雄的な、情熱に充ちた未だ三十になるか成らずの清瀬の方を好きに違ひはないのですけれど、世間の思惑が恐ろしかつたり、少しのけがれたお金でいゝ着物が着たかつたり、重役に肉を賣つてまでよい役にありつきたかつたり、何もろくすつほ芝居の筋さへ分らないやうな三階のヤブ入りの小僧共にまで喝采してほしかつたり、するもんだから、好きな清瀬と云ふ日本一の男の手がとれずに、嫌な禿頭と、待合ばいりをするのぢやありませんか。清瀬はよくさう言ひましたわ。自分自身のために生きよ。いかなる事があつても、自分の意志を捨てるな、自分自身の意志を捨てないもののみ、最後の勝利を得るのだ、と。

久子。だつて、音羽子さん、貴方がいくら、さうやつて清瀬のために辯護したり氣焰を上げたり、

お安くないおのろけをきかしたりしたところで、先方が、京都で藝妓買ひしてゐるのでは問題にならないぢやありませんか。

音羽子。失禮ですが、あなたと私とは物の見方がまるでちがひますので、よくお分りにならないやうですわね。清瀬は世間からは女蕩しと評判されてゐますが、あれは世間の見方ですわ。私から見れば、清瀬は女蕩されですわ。女からみれば、清瀬のやうな男は、今の世にめづらしい頼もしい、好きな男なんですから。女が自分自身に生きる時、戀愛の對象としては眞實好きな男を獲ようとしてゐます。世間から、清瀬が女たらしといはれるのは、清瀬が悪るいのではなくつて、女が悪るいのだと思ひます。女が浮氣なんだと思ひます。その證據には、清瀬に捨てられたと云はれる今迄關係のあつた女で口では兎に角、内心一人でも清瀬を馬鹿にしたり輕蔑したりする女が一人でもゐませうか。みな、清瀬を尊敬し、清瀬を戀ひ慕ひ、ある人は殺すほどに憎みながらも、やはり、戀しい慕はしい、いゝ男だと云つてゐるでせう。——それは、それ程に思つてゐながら、一生を清瀬に委せきり、一生を清瀬に結びつける覺悟が淺かつたせゐだと思ひます。捨てるのは女からで、しかも淺はかな女のまはし氣からで、かへつて清瀬自身から見れば、「己れはいつも女から捨てられて來た」といふことになるのです。

久子。 そんなことを云つてあの男はだましてゐるのに、ね、あなたは！

音羽子。 いゝえ、さうではないの。 いったい、清瀬ほどの男を、生活の一から十までことごとく

あつちの社会
的出現
の軸
を軸とする
と圓動する

を女との關係、又は性慾、戀愛によつて動いてゐると考へるのが、世間の考へ方の重大な間違であると思ひます。それは、殆んど致命的な誤解ですわ。清瀬にはね、戀愛のほかに事業があるのよ。お分りになつて。秀れた男にとつては、私共には一寸想像もできないほど、事業といふものは重大な感じをもつものなのです。事業、世界と對する出生の意義、使命、それはある場合には戀愛以上の強い力を持ち得るものなのよ。そして、ここが肝心のところなのよ、あなたはどうか知りませんが、私のやうに、少し生意氣な女にとつては、男で偉大な使命の感に充たされてゐない男は、たゞの肉塊、金袋、位にしか思はれませんの。尤も、それも以前のやうに、たゞお金がほしいとか、いゝ着物がきたいとか、いゝ役がつけてほしいとか、喝采してほしいとか、考へてゐれば、そのもや／＼に眼をくらまされて、金袋とでも肉塊とでも抱かれて寢られたものでせうけれど、少し、自分の生命の尊嚴に目覺めてきますと、精神的な使命の感、何か偉大な事業の熱望をもたない男は、デクノボーに見えてしようがないのよ。だから、さ、自然さうした男に惚れるやうになるでせう。ここに、悲劇の素因があるのよ。お分りにな

つて。ほれるほどの男は、使命の感に燃えてゐる。使命の感に燃えるほどの男は、時には、女の情よりも、自分の事業の分を最重要、より大切なものと、考へ勝ちなのですわ。かう云ふ見地から云ひますとね、清瀬なんぞは一生、女といつしよに、平和に安樂に、いはゆる節操正しく浮氣もせず、おとなしくをさまつてゐられない男ですわ。しばらく女といつしよにゐると、もう矢も楯もたまらなくなつて飛び出して、支那へいつたり、ヨーロッパへ出かけたり、演説をして歩いたり、また、新聞をおこしてみたり、他から見れば、よせばよいのにと思はれることをして、時には半へも入れられたりするのよ。世間ではあの人を女蕩らしだの、浮氣者だといふけれど、あの人の生來の心持を察して辛抱した女がこれまで一人でもゐますかしら。ゐないぢやありませんか。あの人が、一寸社會から攻撃でもせられさうになるともう蒼くなつて逃げ出し、といつて、あの人には忘れられず、結局一人淋しく、妙な風に一生をしくじつてしまふのぢやありませんか。つまりあの人、英雄的な天才的なところにほれながら、その英雄的、天才的なあの人の素質が生かされると、それにたへきれなくなるのぢやありませんか。だから、あの人、浮氣ではなく、外の女が浮氣なせるだと思ひます。わたしは、さう信じます。だから、私は、もう覺悟を定めてゐますの、わたしの一生はあの人に上げたもの、また、あの人、一生

も、あの人がどれだけ女をよそにこさへようと、どこでのたれ死にしようと、結局、わたしのものと、さう觀念して、もの靜かに、花子の成長を見守つてゐますのよ。——だから、久子さん、捨てるも、捨てられるも、何もあつた話ぢやないぢやありませんか。

久子。あなたが、それ程深くあの人のことを了解し、信じ、愛してゐらつしやるのだとは知らなかつたのですからね。ゆるして下さいね。——でもね、音羽子さん、女も、三十の關を越しますと、もうだめなのよ。今のうちに、よつく考へてみて下さいね。今日お伺ひしたのもね、實は、たいさうな議論を初めてしまつたけれど、さう云ふ噂を聞くにつれ、わたし、あなたのことが、自分のことのやうにくやくつてくやくつて、——それで、専務の方とも相談をしましてね、何とかして、あなたを見捨てたあの清瀬を見返してやらなくては、音羽さん、王立劇場の體面にもかゝはりますからね。社長の云ふには、一度お世話をしたあなたのことだから、一生影になり目向になりお力添へはしたいと、かう尤もな話なのよ。それでね、今度なども、もう、あんな男とは手を切つてしまつて、生れかはつた氣で舞臺へ立つてくれまいか、といふやうな話なのよ。

音羽子。わたし……………

久子。ま、わたしの言ふことをすつかり聞いてからにして下さいね。實際このまゝ、あなたといふ人を、その若さ、その美しさ、その天才を、清瀬一人の食物にして、みすみす埋れ木にするのは惜しいことでもあり残念でたまらぬといふのよ。天下の財寶を深山に埋めておくやうなものだと社長は云ひましたわよ。それに、もう半年以上舞臺へ出ないのでせう。今、あなたが獨り立ちになつて、何かすばらしい女王役を買つて、舞臺に立つてごらんなさい、その盛んな人氣は今から想像しても、ぞうつと身に沁む位ですわ。さうして獨り立ちをしてごらんなさい。さすがはあなただ、音羽子さんだといはれて、清瀬の薄情を見かへすことも出来るし、あなたの顔も立つわけですし、わたし達も世間へ肩身が濶いといふものですわ。

音羽子。あの人はそんなに、薄情なのではありません。あの人は、わたしを捨てたのではありません。世に稀れな男の中の男、天才であり英雄である清瀬を常人の物尺ではかつて、折角のあの人を失ひたくはありません。あの人の心は熱すぎるのです。あの人の戀は永遠すぎるのです。永遠を契りあうた戀仲にとつて半年の別離などは常人の半日の別れに過ぎません。京都と東京とのへだたりは一寸隣の街へ來てゐる位のことなんでせう。ほゝ、たれが、自分の家となりの街でコーヒーを一杯——さうですわ、祇園で遊ぶことはコーヒーを一杯のむ位の事なんです

から——呑んでゐるからといつて、わざわざ知らず馬鹿があらませう。私はあの人を信じます。そして、私はあの人から離れたくはありません。一時の淋しさのために、一生の淋しさを求めたくはありません。世間の人はあの人ほど偉大な人間であるか、どれほど廣大な視界を有する人間であるかを知ることができないのです。これまでの多くの女はあの人、眞の豪さを知らぬことが出来なかつたのですわ。わたしには、それがかすかに分ります。ですから、私は、あの人から離れたくもなし、あの人を捨てたくもありません。私はあの人を待つてゐます。そしてあの人、超人的な情熱に又もや空しいそれこそ「捨てられた」寂寥を感じさせまいと決心してゐます。ですから、今、私は舞臺に立たうとは思ひません。あの人、旅が終つて、こちらへ落着いて、又何か著作の方の仕事でもやりはじめたなら、私もあの人、ゆるしをうけて、舞臺へ立たしていただきますわ、——久子さん、どうぞさういふわけですから、あしからずね、悪く思はないで下さいね、また、舞臺へ出るやうになつたらよろしくね、社長さんにもよろしく申上げて下さいまし。

久子。 私には何んだか分らなくなりました。——音羽子さん、今日はこれで失禮いたしますわ。さう云ふお志もなんですけれど、未だ末長い大切の身を誤らないやうに遊ばせ。いつでも、御

用の時は仰有つて下さいね。では、失禮いたしますわ。

音羽子。 大へん興奮してしまつてすみません。でもね、かう云ふことは自分のためにもはつきりさせておく必要があつたのですから。大へん失禮しました、みなさんにどうぞよろしく申し上げて下さいまし。では、(立上らんとす)

久子。 いゝえ、音羽子さん、どうぞ、そのまゝで。

音羽子。 いゝえ。(音羽子送り出さんとす。そこへ女中かけ来る)

女中。 あの、奥様、お客様でございます。

音羽子。(顔をしかめ) 誰方だえ、今、わたしは大さう疲れてゐるのだが。

女中。 いえ、あの、横須賀の旦那様に、春夫さんでございます。今日、東京へおいでになつたので、お寄りしたと、かう仰有つてらつしやいました。

音羽子。 さうかえ、兄さんだつたのかえ。

久子。 では、あの失禮いたします。お大切に。

(久子一禮してゆかんとす、そこへ、音羽子の兄飯森忠哉(退職海軍將校)息子の少年春夫を連れてどや〜入り来る)

忠哉。 やあ、突然出て来て、大へん失禮してしまつた。

音羽子。 ようこそ。どうぞ、こちらへいらして下さいまし。大へんとりちらかしてゐるものですから。(女中に)お茶をもつておいで。それに、わたしに、葡萄酒を一杯もつて来ておくれ、それから、花ちゃんねむつてゐるか、見てきておくれ。

忠哉。(すわりながら)花ちゃんは丈夫か。

音羽子。 え、ありがたう。あまり丈夫過ぎて、わたし一人の手に餘ることもありませんの。

忠哉。 さうか。子供は親の手に餘る位でなくては頼もしくないからな。どうだ、近頃は。

音羽子。 え、別に、何も、變つたこともございません。(春夫に)春夫さん、この前とは、見違へるほど大きくおなりだわね。この前お出になつたのは何時だつたかしら、さうさう夏休みの終りぎはでしたかね、そんなに経ちはしないやうに思つてゐても、もう二月足らずになりますわね。

春夫。 この夏はほんとお世話になつてありがたう。——あれから學校へかへつて、この夏はどこで暮したかつて聞くものだから、東京の叔母さんのところへいつてゐたのだといつて、叔母さん、あなたのことを話してやつたらね、驚いちやつた！ みんなあなたの名を知つてゐまし

てね、はつ、馬鹿な奴等だ。うらやましがつてジタバタしてやがつた。そして、今度はせひ、あなたのところへつれてつてくれつて頼みやがつてさ。叔母さんは、豪いものだと、僕感心しちやつた、實に。叔母さんのおかげで僕、すっかり名聲を上げちやつたよ。

音羽子。 ほ、それはようござんしたわね。

(女中、茶と葡萄酒を運ぶ。奥にて、「ママちゃん、ママちゃん」と花子目覚めて呼ぶ聲する)

音羽子。(女中に)花子が目を覺ましたやうだ。こちらへ連れて来ておくれ。

春夫。 僕、連れて来てあげよう。(春夫去る)

音羽子。 いつも、春夫さんは元氣で、ほんとにせいせいしますわ。

忠哉。 はッはッ、己れが、海軍の方へ入れようと思つて、その方の勉強をすゝめるのだけれど、親父のやうに、少佐やそこらで、豫備役仰せつけられちや、やりきれないからつて、遊んでばかりるてしようがない。何んでも己れよりかも、こちらの清瀬の方がよつほど段違ひに豪いのだときめてゐやがつてね、この間も、机の前に何か寫眞がはつてあるので、よく見ると、お前、それは清瀬の肖像ぢやないかね。

音羽子。(寂しく微笑)さうでございましたか。

忠哉。 清瀬のどこが豪いかと聞くと、だつて僕の叔母さんのやうな人といつしよになつてゐる丈でも豪いや——、父さんはいつたいほんとに音羽叔母さんの見貴かい、なんて云ひ出してね、困つたものだよ。手に負へなくつて。

春夫。

(花子の手をひき) さ、こつちへおいで。花ちゃん、おほえてゐるかい。え、おほえてゐるか

花子。

横須賀の兄さんだよ。そら、あすこに叔父さんがゐるよ、叔父さんが。知つてるだらう。

花子。

(うなづく) え。

音羽子。

叔父さんにごあいさつをなさい。

花子。

をぢさん、いらつしやいまし。あのね、花ちゃんはね、花ちゃんはね。

忠哉。

(笑ひ) 花ちゃんがどうしたのかい。

花子。

花ちゃんはね、あのね、——忘れちやつたわよ。(音羽子に) マ、ちゃん、何かちやうだい

な。あたし、淋しいわ。

忠哉。

あ、おみやを忘れて来たつけな。——春夫、お前、花ちゃんをつれて少し戸外へ遊びに

つておいで。(音羽子に) 少し、お前に、話もあるのだ。

春夫。

さう、僕、それぢや、そこいらを一廻りしてくるよ。花ちゃんおいで。僕が手を引いてつ

てあけるから、ね、そして、歸りに、何がいゝ？ そら、忘れたかな、おいしいシュークリーム

を買つて来ようね。(手を引いて去る。忠哉、音羽子、しばらく沈黙)

音羽。

兄さん、話と仰有いますのは何のことでございますか。

忠哉。

いや、なにね、さう別に改まらなくてもいゝことなのだ。(音羽子をみて) お前は、いつ見ても綺麗なことだな。

音羽子。

それが、何か、今、お話に關係でもあることなのでございますか。

忠哉。

さうお前に出られては、私も、二の句がつけないがね。——近頃はどうかね。

音羽子。

相變らず、どうにか、花子と二人で口をぬらしてゐますのよ。

忠哉。

ピアノの稽古をつけてやつてゐるのか。

音羽子。

え、その方が結局樂で、それに、わたしの性分にも合つてゐますから。

忠哉。

淋しいとは思はないかね。

音羽子。

淋しくないといふことはどんなことなのでございますか。兄さん、舞臺に立つて、作者の傀儡になり、社長の金まうけの手段になり、世間の愚かな馬鹿者の淫らな眼を満足させ、藪入りの小僧共のでたらめな拍手を得、變な芝居ゴロの餌食になることなのでございますか。そ

れが、淋しくないといふことなら、淋しくないといふことは、社會とか世間とかいふ勝手な觀念にとらはれて、自分の二つとない大切な生命を賣ることぢやありませんか。豚に眞珠をまきちらすことぢやありませんか。それよりか、兄さん、わたしは淋しくとも、一人で、かうして、大切な自分の命を、いつとみつめ、養ひ育て、ゆきたいと思ひますわ。別に淋しいとも思ひません。

忠哉。清瀬からは便りがあるか。

音羽子。ありません。便りはしない、最初から約束のことは、兄さんも御存じぢやありませんか。

清瀬のことは、私一人の問題ですから、どうぞ、言はないで下さい。

忠哉。それあ、清瀬がするだけのことをしてれば、己れも何も口を出すには及ばないが、清瀬がするだけのことをしてゐないと、己れはお前の兄だから、清瀬一人に勝手な眞似をされて黙つてゐるわけにはゆかない。

音羽子。清瀬が何か勝手な眞似でもしてゐるのですか。

忠哉。清瀬は、お前、日本へ一月も前から歸つてゐるのだ。

音羽子。(冷靜に)それは、私、存じてをります。

忠哉。お前の方へ便りがあつたか。

音羽子。いゝえ。今のさき、宮川久子さんが見えて、親切にも知らして下さいました。ほんとに

世間へ顔を出さないと、さう云ふことを知らないだけでも、命が延びますことね。

忠哉。それぢや、やつぱりお前へ便りはないのか。——清瀬が京都でどんなことをしてゐるか、それは知つてゐるだらうな。

音羽子。えゝ、薄々、祇園の藝妓がどうかしたとか……………

忠哉。お前はそれを何とも思はないのか。

音羽子。だつて、兄さん、清瀬が祇園で遊んだからといつて、別に、私がどうかう思ふ必要はないぢやありませんか。

忠哉。ふむ、いゝ度胸だが——ま、これを読んでごらん。(忠哉、新聞を出す)

音羽子。(見ようとせず)それは、何んでございますか。

忠哉。大阪の新聞だ。東京の新聞は何も未だ書かないが、大阪では大へんな騒ぎだ、読んでごらん。

音羽子。さう。(手にとり、ひらいて黙讀、暫くして、下におく)こんなこと、別に、とりたて、云は

なくともいふことのやうに思ひますわ。

一三二

忠哉。支那の上海の假政府から五十萬圓の金を取り出して來てゐながら、それを湯水のやうに使ひすてゐるといふのは、一種の國際的の大悪事ぢやないか。

音羽子。だつて、それは、あの人の考へ一つにあることでももの。何も、世間がかれこれ云ふ可きことぢやないぢやありませんか。

忠哉。ふむ、それは、ま、いゝとする。音羽、己れも、海軍ぢや狼といはれたほどの男だ。己れが、清瀬とお前との間を黙認してゐるのも、一つにはあの男に見所があつたからのことなのだ。えゝか。ここをよくきき分けてくれないと困る。しかしだ、いくらあの男に見所があるにしても、あの男が、お前に對する誠意がなければ、己れは、お前の兄として斷々乎として處置をするのに別に理由はいらないことだからな。

音羽子。よく、皆さんが、私にそんなことを仰有いますわ。併し、どうして又、清瀬に誠意がないと仰有るのですか、私にはよく分りません。皆さんのやうには。

忠哉。五十萬圓の大金を握りながら、お前の方へ便り一つしないといふ法はない。

音羽子。だつて、五十萬圓の金とわたしとは何の關係があるのです。それに、そのお金は何れ、

何かの運動費ぢやありませんか。

忠哉。しかし、あいつはそれを湯水のやうに使ひ捨てゝゐる。

音羽子。でも、それも一つの軍略かも知れないぢやありませんか。

忠哉。ふむ、お前のやうにさう考へてゐれば、天下は泰平なものだがね。己れは、今に、お前が後悔しやしないかとそれが心配でならないよ。己れもうつかりしてゐるが、半年の餘もお前に便り一つせず、日本へ一月も前にかへつてゐながら知らせもしないといふ法はないよ。實際。實際は、今日は、うちの奴にすつかり云はれてしまつたが、云はれてみれば、明白至極なことを薄ほんやりしてゐるたやうな氣がして、目が醒めたやうに恐ろしくなつたよ。實際、お前しつかりしてくれないと困るよ。

音羽子。兄さん、わたしのことはわたしに委せておいて下さいね。よく皆さんが、清瀬は悪者だの、清瀬は女蕩らしだの、清瀬は薄情だのと仰有いますけれど、みなさんはどれだけ深く清瀬を知つてゐるのでせう。いつたい世界に、一番深く、一番よく清瀬を知つてゐるものは誰でせうか。清瀬の顔もろくに知らない世間の人達でせうか。一度か二度あつたきりの顔見知りの方々でせうか。敵同志のやうに睨み合つてゐる政府の人達でせうか。時々會つて話する友人

一三三

の人達でせうか。それとも兄さん、五年間連れ添つてあらゆる青春の美と純潔と血を捧げつくとし、可愛い花子までも設けたこの私でせうか。ありとあらゆる世間の人々が清瀬を悪者と罵るとき、たつた一人の私が、いえ、清瀬は日本未曾有の偉大なる天才です、と云ふ時に、兄さん、あなたは、どちらを信じて下さいませうか。兄さん、私が見さんの立場になれば、私の言ふことを信ぜずには居られません。

忠哉。しかし、何といつてもお前は女だからな。清瀬は女蕩しで名うての男だ。

音羽子。何故、さう清瀬ばかりを悪く仰有います。清瀬が女蕩しなら、私は男蕩しですわ。その名うての女蕩しを五年間も傍にひきつけておいた男蕩しでせう。いつたい、兄さん、あなた方の男と女との間に關する考へ方は大へん間違つてゐると思ひますのよ。私は考へます。男と女はあくまで、對等でなくてはならず、あくまでお互に自由で獨立者で、何れが何れにより從屬的であつてはならないと考へます。私と清瀬との間を、今の世の男女關係や、今の世の戀愛關係や、今の世の夫婦關係と同じい標準で見ないで下さいな。それは清瀬といふ一人物を評價するに、今の世の道德や今の世の倫理でもつて評價してはならないと同じことです。清瀬は今の日本にとつては少し勿體なさ過ぎる程豪い男でございます。清瀬と今の世の人とは少くとも一

世紀や二世紀の文明の差があるのでございます。清瀬は未來の支配者です。私は今の世に清瀬に會へたことをどんなに感謝しどんなに喜んでゐるか分りません。清瀬に會はなかつたなら、私はタダの女優として、よくいつたところで王立劇場の星として、——世界的な名聲を獲られたところで、いはゞ、高等藝妓として、花々しく、しかし、平凡に哀れに、その一生を送つたことでせう。しかし、天は私にもつといふ、もつとすばらしい生活のあることを、清瀬によつて知らず程に私に恵んで下さいました。私は清瀬によつて生れかほりました。世間の者は生れかほつた私を知らずに、とつくの昔に死んでしまつた昔の音羽子をさして、いろんなことを言つてゐるのでございます。——兄さん、私はかう言ふことを、繰返し繰返し言ふのが厭でございます。私のことは私にまかして、放つておいて下さいまし。實は、さつき久子さんに、いやといふほどしやべられましたの。

忠哉。久子——宮川久子が何か言つてゐたか。

音羽子。私にもう一度舞臺へのほれつて勤めに來たのよ。大方、やはり、この新聞を見て、私のために心配してくれたのよ。お志はありがたいけれど、まるで、眞實の事情が分つてゐないのだから。

忠哉。ふむ、それでも、未ださうして親切に言つてくれる友達があるか。實は今日は、己れも、お前に一つ相談があつて来たのだが、お前の今の鼻息ではとてもだめなことだらうな。

音羽子。どんなお話でございますか。何んなら、そのまゝ持つてかへつて下さいましな。

忠哉。いや、さう云はれると、一寸意地になつて話さずにはゐられなくなるがね。實はね。

音羽子。はい。

忠哉。お前が、今年の夏、横須賀の己れの家へ二日ばかり来てゐたことがあるな、あの時もうお前がかへりぎはに、遊びに来た男があつたらう。

音羽子。私、よく覚えてをりませんわ。

忠哉。困るね、海軍少佐で、未だ元氣で若々しい男があるぢやないか。

音羽子。あ、和田さんとか仰有る方のことですか。

忠哉。さうだよ、その和田君のことだよ。あれでお前、海軍きつての秀才で、將來日本の海軍は和田のものだとみんな言つてゐるのだ。あの男が獨身者でね——

音羽子。和田さんと結婚でもしろと仰有るの。私——

忠哉。さう先きまはりをされては話ができんぢやないか。あれで武骨なやうでも、海軍は一種の

外交官でもある。和田が、あれまで結婚せずには深い事情があることなんだ。何んでも、ある美人で名の高い伯爵の令嬢とかと中尉時代に同級の男と競争して負けたんださうだ。それで、結婚するには、少くともその女より以上の女でないとあかんといふので我慢してゐたのださうだが、お前を一目見て、あいつ、すつかり参りをつてな。はッはッ。考へて見ればお前も罪な女だよ。

音羽子。(沈黙)

忠哉。そして、己れにそれとなく結婚の意志を明かしをつたのだ。さう云ふわけだ。音羽、こころは一つ兄さんの意見を入れて、和田のところへ嫁つてくれないか。

音羽子。兄さん、あなたは、私を侮辱なさいますね。

忠哉。別に侮辱はしやしないぢやないか。兄さんが頼んでゐるのだ。

音羽子。私は、清瀬の妻でございます。一人の夫をもつてゐて、どうして又結婚ができません。

忠哉。さ、清瀬がお前の夫であると思つてゐるのがお前の間違ひなのだ。そこをよつて考へてごらん。お前が清瀬の妻だと、一人で、いくら力んだところで世間がさう見てくれないから仕方がないぢやないか。世間ではみんな、お前のことを、清瀬にだまされて、子供まで生

ませられて、そして結局、捨てられてしまつたのだ、とかう見てゐるのだ。又實際、半年以上も音信も仕送りもなしに支那へ行つてゐて、かへつてきても知らせずに勝手に遊びまはつてゐるといふことは、お前を捨てたといふことの立派な表示なんだからな。いゝか、音羽、お前は清瀬に捨てられたんだ。だから、お前は清瀬と別れなくてはならないのだ。いゝか、いゝか、加減にあきらめをつけて、兄さんの意見にしたがつて、和田へ嫁にいつてくれ、和田はいゝ男だ、和田を父親にもてば、花ちゃんも決して不幸ではない。

音羽子。

兄さん、止して下さいまし。そんな話は止して下さいまし。あなた方は無禮な方々です。

あなた方は踏み入つてはならない神聖な人の魂の境内へ泥足ではいりこむ、無禮なるモツブです。豚共です。あなた方には、私といふものも、清瀬といふものも、清瀬と私の間の戀といふものも、何も分つてゐるやしないぢやありませんか。そして、分つてゐるもしないくせに、重大な運命の樞機に干渉しようとしてくるぢやありませんか。退いて下さい。私共の神聖な戀の世界からその泥足を退いて下さい。清瀬が、日本と世界の現在の社會革命を、彼の其の生存理由とする清瀬が、一年や半年家を留守にしたところでそれが何です。世界的偉人であらねばならぬ清瀬が五十萬や百萬の金を使ひ捨てたところでそれが何です。そんなことゝ、私の戀との間に

何の關係があるのですか。私と清瀬との戀は、そんなたゞ世間並な肉と肉とがくつつきあつて、官能の陶醉に己れを忘れるぬるま湯の戀ではありません。存在と存在が、永遠に結合し、永遠に一つとなつて流れゆく、生命と生命との融合です。私と清瀬の戀は、億々々年の未來へかけての不滅な戀です。半年や一年別れてひびの入るやうなそんな慘めな哀れな戀ではありません。一生これで會へなくとも、尙ほ消ゆることのない戀なのです。——また、たとへ、清瀬が私を捨てたとしても、私は清瀬の妻であることに別に仔細はないぢやありませんか。何故なら、清瀬が捨てゝも、私は捨てませんから。私は捨てません、未來永劫捨てません。私が捨てない限り、清瀬は私のものです。どこにどうしてゐようと、何をしてゐようと、私のものです。今の世の人は男の勝手のいゝ見方ばかりをしますけれど、眞實に自己に生きる世界では、戀は男と女と双方の立場から見られるべきものといたします。清瀬が捨てゝも、私さへ捨てなれや、私のものです。私が捨てゝも、清瀬さへ捨てなれや、私は清瀬のものです。一方が捨てゝさへ、さうなのに、兄さん、私共のは、別に私も捨てなれや、清瀬だつて私を捨てやしませんわ。

忠哉。

私には、お前の言ふことがよく分らない。しかし、世間ではもつぱら、さう言ふてゐるか

らね。さう聞いて見れば、お前の兄として心配しないわけにはゆかないからね。

音羽子。世間に何の責任があるのです。今日乞食をしてゐても、明日百萬圓の富豪になれば、その前に頭を下け、そしてその翌日一文なしになれば、又卑しめるのが世間です。世間に何の權威があり、何の價値があり、何の批判がありません。兄さん、私の言ふことを信じて下さい。私の言ふことさへ信じて下さればいいのです。——和田さんの話など、あんまり兄さん、早手廻しすぎて、滑稽ぢやありませんか。

忠哉。何が、滑稽なことがあるものか。兄さんは眞面目で言つてゐるのだ。お前の行末を案じて言つてゐるのだ。怒つてくれては困る。

音羽子。それぢや、心配しないで下さいね、私はそんなつまらない男に一生をまかしてゐるのではありませんから。私の眼に間違ひはないはずですから。たとへ萬一、私が間違つてゐるにしたら、——いえ、いえ、そんなことは決してあるわけではないことよ。

忠哉。それならいゝけれどね。兄さんも、もう和田の話はしないことにする。けれども、ほんとうに十分よく考へてみてくれないと、困るよ。——清瀬は、ほんとうを言へば、未だ海の者とも山の者とも未知數の人間だ。お前が考へてゐる程に偉大な人物であつてくれれば、それに越し

たことはないが、もしやびよつとして、下らない山氣半分の悪者でもないことはないから、もしそんなことがあつては、折角、日本一の女優と言はれる迄に仕上げたお前の生涯はいつたい何のためか分らなくなるからね、清瀬一人の喰物にするために仕上げたやうなことになるからね。

音羽子。兄さん、止して下さい、何故私が清瀬の喰物のですか。私が清瀬の喰物なら、清瀬も私の喰物ぢやありませんか——たとへ清瀬が兄さんの仰有るやうに偉大な人間でないとしても、よ。しかし、そんなことは、兄さん、もう言はないで下さい。私の意思は、もう、花子が生れぬ前から決定してしまつてゐるのですから。

忠哉。では、お前は、どうあつても清瀬と別れない覺悟と見えるね。

音羽子。さうですわ、兄さん。

忠哉。清瀬と別れないと云ふことは、一生孤獨でくらすといふことになつても。

音羽子。そんなことはありません、私は清瀬といつしよにくらします。

忠哉。ところが、清瀬が永久お前のところへ歸つて來なかつたら？——たとへ清瀬にその意志があつても、たとへば、外國へ行つたきり歸らないといふやうな場合には。又は、思想問題でも

ひきおこして、捕へられて牢獄へつなげられるといふやうな場合には？

音羽子。 そんな場合には、わたし一人でくらしめます。女王のやうに淋しく。それでも、私は清瀬のものですよ、清瀬は私のものですわ。——私の心持や私達の世界は、兄さんにはお分りにならないやうね。何んだかお氣の毒に思ひますわ。兄さん、私の今の世界を申しあげませうか。何といつたらよいのでせう。それはそれは、大きな大河の静かな深い、ゆつたりとたゞへた水の面の静かさに、美しい夕映えが、しかも決して暮れるといふことのない夕映えが、あかあかと、青い青い水面に映つてゐるやうなものよ。それが兄さん、人間にゆるされたほんとうの寂しい幸福といふものであることを、私は清瀬に會ひ清瀬と長年住むまでは知らずにをりましたのよ。兄さん、清瀬は私の恩人です。(間)いえ、もうこんなことは申しますまい。兄さん、御免下さい。

(音羽子立上り、ピアノに向ひ、ある静かな美しい寂しい曲を奏しはじめ)

忠哉。 音羽、お前の言ふことが正しいか、世間の言ふことが正しいか、それは「時」が裁断してくれるだらう。

音羽子。 世間は空手で無責任で言つてゐるのです。私は私の全生涯をかけて言つてゐるのです。

私の方が正しく、勝つにきまつてゐますわ。(間、この間ピアノの音)現に、私が勝つてゐるぢやありませんか。兄さん、世間は清瀬から何を得てゐるのでせう。あの天よりつかはされた偉大な天才から。何ももの得てゐないぢやありませんか。そしてあの人の悪い點を見るのならよいけれど、むしろ、こしらへてからに、その悪い點ばかりを噂し合つて、たかだか茶のみ話にしてゐるに過ぎないぢやありませんか。何といふ馬鹿な道化者でせう。(間、ピアノの音)ほんとに馬鹿な人達ですわ。兄さん、私を見て下さい。私の生活を。今の私の生活の静かな充實さを。これが人間の生活といふものなのよ。私はそれを知りませんでした。しかし、一度知つた以上はもとのガサツな、いそがしい本統のしみじみした幸福のない世間のための生活に返るわけにはまゐりませんわ。

忠哉。 そして、お前はいつまでも、かうしてゐるつもりなのか。

音羽子。 え、いつまでも、いつまでも、私は今の生活をつづけてゆくつもりですわ。(間、ピアノの音) あの人が留守の間は静かに誇り高く待ち、あの人がかへつてくれば、喜びと幸福とであの人を迎へ、お互に自由で、獨立で、しかも、死ぬほど愛し合つてゐる。——あの人が帝王の如く生きるなら、わたしは、女王のやうに生きてゆきますわ。

忠哉。

お前は寂しいことを言ふ。世に帝王と女王ほど寂しいひとりほつちなものはないのだよ。それをお前は知つてゐるかい。

一四四

音羽子。

寂しいひとりほつち！ 孤高獨存の寂しい平和、それが女王の生活につきものな位は、兄さん、わたし、知つてゐますわ。ほんとうの生活は寂しいものなのよ。その寂しい中に燃える聖い熱情こそ、生と死を超え、日月を超え、人間を超える情火なんですわ。でもね、私はこんなことを餘り云うてはならないのです。——兄さん、もう話は止して下さいね、それよりか、いつものやうに私の弾くのを聴き遊ばせ。

ピアノ一きは高く鮮やかに鳴りひびく。忠哉腕ぐみして音羽子の背後に立つ。

静かに暮

第二幕

京都加茂川に臨んだ木屋町のある旅舎。秋未だ深からざれど、清風、樓に充つ。やうやく四邊仄暗く右手東山の緩き山並、對岸の市街、川原、川の流れ、薄曇にて描ける如し。清瀬、酒に酔ひて眠つてゐる。女中達、酒宴のあとを取りかたづけ終つたところ。

女中。

染菊さん、ぢや、あなた、お守りをしてゐて下さいな。

染菊。

え、よろしい。わたし、一人でここに、居りますから。(染菊一人淋しく残る。縁より河原を眺め、吐息をつく) また、今日も暮れてしまつたのね。ひつそりと淋しいこと。(間) どんなに一人でゐても淋しいなどと思つたことはなかつたのに、何故かこの頃はしみじみ淋しさが身に沁みて感じられる。

女中。

(さつきの女中あらはれる) あの、染菊さんえ、かあさんが、あちらへ来て休んでゐなさいと言つてらつしやるのよ。あちらへおいでなさいまし。

染菊。

でも、姐さん、わたし、ここに清瀬さんをお守りしてゐますわ。

女中。

清瀬さんは寝つてらつしやるから、あちらへ来ていらつしやいまし。——さうまで勤めな

一四五

くともよいのよ。

染菊。 いゝの。わたし、ここに一人でゐますから。

女中。 さうまでしなくとも、花はちやんとついてゐますから。——いくらあなた一人で熱くなつたところで、この人には通じはしないのだから。つまらない勤め氣を出さないで、あちらへ来て休んでゐらつしやいと、さう言つてるのよ。

染菊。 (ぼうつと赤くなり、河原の方を眺める)かうしておいて下さいね。少しお酒に酔つてゐて、苦しいのですから。酔がさめたらそつちへゆきますからね。

女中。 さうお、ほんとに傍で見てもぢりぢりしますわよ。(去る)

(染菊、清瀬の枕元にすわり、ゆすぶります)

染菊。 清瀬さん、清瀬さん、淋しいから起きてゐて下さいな。起きて、ゐて、下さい。だめよ、この方は。本統に眠つてらつしやるのかしら。それとも、眠つてゐる眞似をしてらつしやるのかしら。どつちでもいゝから清瀬さん、起きて下さいまし。起きてゐて下さいまし。

清瀬。 誰だ、そこにゐるのは。

染菊。 わたしですわ。染菊ですわ。眼を開けて御覽遊ばせ。可哀さうな染菊一人がお側にゐるの

でございます。

清瀬。 染菊か。(再びそのまま眠入らんとす)

染菊。 清瀬さん、眼を開けて御覽遊ばせ、わたしがどんなに淋しくどんなにつましくあなたの傍にゐるか、それがお分りになれば、きつと起きてゐて下さるでせう。

清瀬。 しょうがないぢやないか、人の眠てゐるところを起して。(眼をひらく)お前一人ゐるのか。みなはどうしたのだ。

染菊。 みなは一先づ下りました。もう、日が暮れて、一くぎりの刻限でございますから。わたしも下らねばなりませんのですけれど、一人でああなたのお傍にをりました。でも、ものの小半時もたゝないうちに、淋しくて淋しくて、とても一人で堪へ切れなくなりました。御免遊ばせ。

染菊。 そんなに淋しければ屋方へ歸つて待つてゐればよいのに。でもわたし家へはかへりたくはございません。あなたさへ起きてゐて、かうして話してゐて下さるなら、もう、おやすみにならないで下さい。

清瀬。 はゝ、お前がそんなに言ふなら、私は起きてゐてもよい。

染菊。 ほんとでございますか。わたし、嬉しうござんすわ。今も、女子衆が、わたしに辛苦なこ

とを言つてゐましたのよ。でも、あなたはそんな人の誠心を受け容れないやうな冷酷な方では
 ございません。あなたが起きてゐて下されば、わたしの肩身が廣いと云ふものですわ。

清瀬。 お前は淋しいことを言ふやうになつたね。未だそんな若い身そらで苦勞をしては、早く年
 を老るよ。義理だの人情だのと云はずに、いつ迄も面白く若々しく暮してゆくのが、結局徳か
 もしれないな。

染菊。 いゝえ、それでは、あなたが最初にわたしに仰つたお言葉とは違ひます。今になつてそ
 んな世間並みなことを仰つても、わたしにはもう信じられなくなつてゐるのでございます。
 わたしは貴方にお會ひしなければ兎に角、お會ひした以上は、そして、あなたの愛をたとへ假
 りそめにもせよ、お受けした以上は、今となつて後へ引くことはできません。善いにしろ悪い
 にしろ、油断なく前へ進んでゆくよりほかに道はございません。

清瀬。 ふむ、私はまた、世界にもう一人お前といふ美しい情の熱い純な娘のゐたことを知つたの
 を喜びながらも悔いてゐるのだ。そして、何とはなしに濟まぬことをしたやうな、何か無慥至
 極な極悪事でもしたやうな氣がして、ゐても立つてもゐられぬやうな氣もするのだ。が、かう
 云ふことは、染菊、言はぬ約束だつた。一生添ひとけられるといふ仲ではなし、餘り辛苦なこ

とに思ひ詰めて、別れて後までも苦勞の種を作らぬやうにするがよい。ほ、どうして黙つてゐ
 る。私の云ふことが氣に障つたと見えるな。さ、沈みこんだりせず。明りを點けてくれない
 か、大さう暗いぢやないか。

染菊。 はい。(立ちて電燈を點す、清瀬起ち、縁側に出て坐る)

清瀬。 お、誰か。

染菊。(あわて全部まで言はせず)何御用なのでございますか。

清瀬。 お冷を持つて来てくれないか。お前がわざわざゆくには及ばない。

染菊。 いゝえ。わたしいつて参りますわ。(染菊、お冷を持ち來る)はい。

對岸の燈火美しくきらめく。清瀬の水のむ様をほれぼれと見つめる。

清瀬。 あゝ、やうやく眼が醒めたやうな想ひがする。染菊、向う岸のあの美しい夜景をごらん。
 私は十年前に未だ頼の赤らんでゐた少年の時分こちらで新聞記者をしてゐたことがある。その
 頃貧しい私には、あゝした美しい夜の景色がどんなになつかしく淋しくやるせなかつたか知れ
 ない。薄宵の惱ましい夕べには、お前のやうな美しい女の人が袂をとつてゆく後姿を見送つて
 は、一生に一度でもあんな美しい女と話さへできるかどうかしらと自分の身の貧苦を慨いたも

のだった。二十歳前後の生活の苦しさは、人の世の冷酷さは、しみじみと身にこたへて今も私の總身の血脈にみなぎつてゐて、私の一切の行動の源泉となつてゐる。かうしてお前を前にして、静かにお前をみつめてゐると、私はある勿體ない感激にさへ襲はれてくる。十年前の貧書生時代のとても叶へられさうもなかつた幻影の世界にかうして呼吸をしてゐるのだと思へば。

樂菊。 いゝえ、それはわたしが申さねばならぬ言葉でございます。十二の歳に故郷の金澤の街を離れてまる五年の間、一日も眞實にしみじみうれしい心持に打ち寛ろいだことのないわたしでございました。くる人もくる人も、會ふ人も會ふ人も、恐ろしい残酷な、表面ばかり柔和でお世辭が巧者で、それでゐて、夜になれば、恥づかしい淺ましいことのみしてゆく男ばかりでございました。私はもう少しのことで、男はみなかうしたものと、思ひ詰め、人生は淺ましい厭な陰氣なところと信じこんでしまふところでした。どんなに柔しくどんなにお世辭が整つてゐても、底を割つて見れば世間の男達は、藝妓といふものは、金で自由になる、自分達の卑しい色慾の玩弄物としか見てはるません。ほんとに、(悲しく)ほゝ、猫だなどゝはよく付けた名前ですわ。しかし、わたしは清瀬さん、それだけでは満足ができませんでした。向うが金を出してわたしの身體を玩具にするならば、此方は金をとつて、向うの身體も心も深い深い底の知れ

ぬ魅惑の底へ陥落させるとが、せめてもの復讐である事は知らぬではなかつたけれど、私はそれがどんなに恐ろしいことか、一生救はれることのない地獄に身を投げ入れて、自分自ら鬼の一人となることであることが分つてゐました。様子のいゝ男、美しい顔をした男、さう云ふ男には會へないこともなかつたけれど、わたしは、わたしを純潔な娘のやうにしてくれる男、清瀬さん、わたし程不幸な女はるまいとは云へませんけれど、世の中で一番不幸な女の一人である私は、無意識ではあるが、失はれた「純潔な娘」のために嘆き、愛惜し、返らぬ春の尊さを取りかへしたいと陰鬱になつてをりました。わたしは世の中の多くの娘達のやうに純潔なもののびしたほがらかな、自分一人丈けのために生きる光明に充ちた明るい娘の時代を持つ代りに、世の中で最も悲しい淋しい卑しい時を、晴れがましい豊麗な化粧と華やかな唄や三味の音の裏に過さねばなりませんでした。時にはその晴がましきや華やかさに眼を眩されて不自然をも自然と強ひて見た時もないではなかつたけれど、虐けられつくした私の内の魂の芽は、小さいながらも素直に、失はれたものを探し求めて止みませんでした。生一本に、眞面目に、わたしの純潔な價値を認めて、青春の娘のやうに取扱つてくれる男を。心の底からわたしの神聖な價値を認めて疑ない男を。——清瀬さん、あなたにお會ひできたことは、わたしにとつては何

と申してよいか分りません。わたしにとつては大きな救ひでございました。

清瀬。 ふむ、誰でも初めはさう言つてくれる。しかし、私はそれを全部的に喜ばなくなつて來てゐる。が、さう云ふことはどうでもよい。染菊、私とお前は今、ここにかうして二人で、二人きりで「存在」するのだね。そして、二人はお互に愛し合つてゐるのだね。少くとも私はお前を死ぬ程愛してゐることに間違ひはない。そして、お前にしても死ぬ程私を愛してゐてくれることを信じてゐる。染菊、つい思はず知らずの昔の追懐も悪くはないが、少し油断をすれば逃げてゆくこの速やかな現實の一瞬間の私共の生命を、確かにしつかりと把握しつくしてくれ。あ、(縁より外を眺める)ここは加茂川べりの別天地なのだね。空があり、空氣があり、市街があり、その間に昔ながらの加茂川が流れ、その加茂川べりの旅舎の一室に、今、染菊、お前と私とがかうしてここに、同じ空のもとに、同じ空氣を呼吸し、同じ對岸の市街を眺め、同じ水流の薄蒼い面を見下ろし、同じ淋しい水の音をきいてゐることを、かみしめて、身にしみてくれ。この世は淋しいと言切るにはあまりに深過ぎる程それ程寂しい天地なのだ。その淋しい天地に、獨り生れ獨り生き獨り往かねばならぬ人間なのだ。一人で生れて來た私が、一人孤獨で一人死に往くの何の不思議もないけれど、その淋しい孤獨であることが寧ろ當然過ぎる程當然な

現世で、染菊、お前と私が、今びつたりと魂と魂の一つに融けてゆくのを感じてゐるといふことは、恐ろしい奇蹟だと思ふ。この大事な貴重な一瞬間が永遠であるやうに、それを祈るひまさへもなしに、この一瞬をしつかりと把握してくれ。私は、染菊、何んだか勿體ない氣がする。恵まれ過ぎて、有りがたい氣がする。どうせこの世は一人ぼつちであり、どうせこの世は惡鬼充滿の餓鬼道の地獄世界だと、さう覺悟を定めてしまつた私に、染菊、お前はいぢらしい誠の愛を注いでくれる。それは、花の咲かぬ沙漠に美しい薔薇の花が咲き匂ひ出たやうな感じだ。私は有りがたい、やはりこの世に千年も萬年も生きられる丈け生きたいと思ふ。そして、信ずる道へ、正義のために、飽迄も正義のために、眞つ直ぐに進んでゆかねばならぬと、新しい勇氣を與へられる。お前が、私によつて救はれたといふ前に、私こそ、お前に救はれてゐる、と言ひたい位だ。いや、實際に、私こそお前によつて救はれてゐるのだ。

染菊。 清瀬さん、あなたは、わたしの申し上げたいことをすつかり言つて下さいます。私のこの耳に聴きたく、この眼で見たく、この胸がそのために轟きたく悶えてゐた恐ろしい眞理をあなたは今きかして下さいます。それ丈けでもわたしはどうなつてもかまひません。何時までも何時までも、命のある限り、わたしをお傍に置いて下さいませ。

清瀬。 お前さへ飽いて来なければ、私は何時までもここにゐる。私の力でここにゐられる間丈けは必ずここにゐるつもりだ。人間は、地球上何處にゐても生きてゐられる生物なのだが、それを知らぬ人は兎に角、明瞭に認識する人でもどこか一處に停まるのは、そこに愛する人がゐるからのことなのだ。お前の愛の力の衰へない限り、私はお前と別れない。

染菊。 (涙を浮べ) さう仰有つて下さるお言葉に力づけられ、私は知らず識らず深い無限の國へ身を沈めてまゐります。その國へ深く入りこむにしたがつて、自分の周囲の世界が、遠いところへ離れてゆき、今まで親しかつた友だちも、屋方の女將も、旅館の主人も女子衆も、ことには他のひいきの客達もことごとくが他人よりもよそよそしく感じられ、たゞ、自分のことゝあなたのことのみが気がかりになつてまゐります。あゝ、この頃になつていろんな苦勞が殖えてまゐりますこと。それでゐる、わたしは苦勞のなかつたむかしを幸福だとは思へません。私は、どんな苦勞にも艱難にも堪へてゆきたいと思ひます。

清瀬。 苦勞を知らなかつたお前に苦勞をさせるのも一つはこの清瀬の罪だ。しかしそれはどうにも仕方のないことだ。しまいとしたところで出来てくる苦勞ならしなくてはならず、したいと思つたところで、苦勞をしないやうになつてゐる時は出来て来ない苦勞はするわけにはゆかず、

——私はあかの他人としてなら、お前にする分、苦勞をするな、早く年を老るぞとも云ひ得られるし、云ひたい氣もするが、お前を愛する男としては、むしろ、苦勞のある時に苦勞しろと云ひたいのだ。たゞ、その苦勞の源が、今、私自身であることを考へる時、流石の私も、淋しいやるせない氣がする丈けのことだ。あゝ、みなはどうしたのだ。

染菊。 みんな未だあなたがお寢^{やすみ}になつてゐるものと考へて、休んでゐるのでございませう。

清瀬。 もうこの家でも、そろそろ私を危険がり出したのかも知れないな。

染菊。 いゝえ、そんなことはございませうまいけれど、でも、さつきも、わたしに、いつたい、且那樣はお金をどれ位持つておいでなのか分らないか、などゝたづねてをりました。

清瀬。 はッは、清瀬の金は無限だと云つておくとよい。

染菊。 それに、何んでも、近頃は、毎日毎夜、代り番で警察の方が見張りに來てゐるらしいのよ。それはわたし丈けには内密にしようとしてゐるらしいのですけれど、どうもさうらしいの。

清瀬。 ふむ、大臣程度の男には警固の者がつくのなら、私にも警固の一人や二人は附けてくれる義務が、國家にはあるといふものだ。お前はさう云ふことのために脅かされたり恐れたり心配

したりする必要は絶対にないからね。さう云ふことに驚くやうなら、初めから私とよい仲になつてはならぬのだ。さう云ふことに驚かず、しかも心配せず、また干渉もせず、お前はお前で、平常のごとお前のすることだけをしてくれ、その餘のことは私を信じてるれば差支えないことだから。

染菊。 え、わたし、何んだかうれしくて泣きたくなつてまゐりますわ。(清瀬を見て、氣を換へ) お酒を召上りますか。

清瀬。 いや、今しばらく何も要らぬ、それに、今夜は友人がくる筈になつてゐるから。酒はその友人が来てからにしてもよい。

染菊。 友人と仰有るのはどなたでございまして！ そして、どちらからおいでになるのでございませうか。——なんなら、私と二人丈で、かうしてゐて下さいませ。

清瀬。 なに、私が支那へゆく前に親しくしてゐた同じ思想上の友人だが、私が留守の間日本の方も日本へ歸つてゐることは知らさずにおいたのだ。——それは一つには人知れず、半年ばかり留守にした日本を明瞭に認識し直す必要からでもあつたが、あの京都へ着いたその最初の夜、

お前といふ女性に會つて、一度となく二度となく見捨てたこの世が惜しくなつたがためでもある。しかし、世間や警察は、やがて、私が私であることを發見し、はつはつ、ひとの戀路を物珍らしさうに騒ぎ立てゝゐるが、あゝ、あの人達は閑人だ。染菊、私のお前への戀をたゞかりその浮氣心と思つてくれるな、重大な生死を賭けての仕事と使命とを眼前にひかへながら、なほ、獲物をねらふ獅子のやうな注意を以て僅かの時日を盗んでゐる私の眞面目さをすなほに汲みとつてくれ。人がたゞ、戀と自己向上のためにのみ生きるやうな黄金時代が来る迄は、染菊、私のやうな男はお前の胸に眠りながらもわざ／＼東都よりの同志とも會はねばならぬのだ。

染菊。 え、それはよく分つてをりますけれど、會ふ人も會ふ人も、あなたを悪く言ふ人ばかり、早く手を切れの、別れるの、今のうちに別れないと恐ろしい目に會はされるの、とそんなことばかりかされますので、今度、わざわざ、東京より来る方ときいてはどんな御用か、大方、早くわたしなど、切れてしまへと仰有るのではないかと、それが案じられるのでございます。どうぞ、何時までもわたしをお傍において下さいませね。

清瀬。 はつは、お前にその純一無垢な心の盡きない限り、私とお前の間は切れはしない。あゝ、かういふことはもう云ふまい。染菊、お前も、もう言ふのは止すがよい。いらぬことを言うて

大切な一瞬一瞬の時間を無駄にするほど、私共は餘裕のある生物ではない筈だ。

染菊。 はい。(につこり淋しく笑ひ清瀬をみかへり)何か弾きませうかしら。

清瀬。(微笑をかへし) あゝ、それに私は、少し疲れたから、一寸横になるからね。

染菊。(横になつて敷枕をする清瀬に毛布をかけ、三味をとり、膝を半ば清瀬に貸して又わらふ)何をやりませうかしら。

清瀬。 何んでも。——きくしりから、片つ端から忘れてゆくのだから。どこまで私は野暮な性分に生れつたのか分らない。

染菊。 ほゝ。あゝ云ふ悪いことを仰有るのよ。(三味の調子をととのへ)三千歳でも習つてみませうかしら。お厭でして? ぢや、何を唄ひませうか。何か軽い端唄でも歌ひませうか。ほんとうはね、あなたに歌つていたゞきたくてしようがないのだけれど、あなたはお歌ひにはならないのですから。——(唄)身は粉々に骨は磯邊にさらさうとまゝよ、拾ひ集めて添ひとける。——

清瀬。(ほつきり眼に涙を浮べる)もう一度歌つてくれ、その歌を。

染菊。

(同じく涙含み、しかもうれしげにかすかに)——(唄)身は粉々に骨は磯邊にさらさうとまゝよ、拾ひ集めて添ひとける——(唄)雪の下なるあの青葉さへ、融けてるなけれや見えはせぬ。

(森然とした淋しき情景、女中かけ来る)

女中。 あら、もうお目覚めでいらつしやいますか。失禮いたしました。お風呂が沸きましてございます、今、おはひりになりますか。

清瀬。 あとで入るから。

女中。 お酒を持つてまゐりませうか。それとも、御飯を先きにいたしませうか。

清瀬。 飯は、さつき東京から電報が來てるたな、あの方が見えてからいつしよにするから、今、酒丈けを持つてくるとよい。

女中。 藝妓衆はどういたしませう。たいさう、みんなこちらの御座敷へ來たがつてをります。

染菊。(清瀬を見乍ら)あとに來て戴きませうよ、ね。

清瀬。 うむ。(女中去る)染菊。

染菊。(うつとりと)何でございます。

清瀬。 もう東京から人がやつて來さうな時刻だがね。

染菊。 でも、その方はどつちにしろいらつしやるのですもの、今、そんなことを考へないで下さいませ。(ぢいつと清瀬をみつめ)間違つてゐたら御免下さい。あなたは、今度、東京へお歸りになる

やうな気が、今、ふつとしてなりません。もしやお歸りになるのではございませんの。

清瀬。 いゝえ、私は歸りはしない。歸る位なら、今夜、丘——丘眞太郎といふのだ、その男は、——に來てもらひはしないのだから。私は行きはしない。

染菊。 あなたはお歸りにならないお心でも、でも、どうなることか分りはしませんわ。もし、お歸りになるやうな時には、私を連れてつて下さいませ。

清瀬。 はッは、私は歸りはしない。安心して、今のこのかけがへのない現實一瞬時をしつかり把握することが肝要だ。先のことは先きになつてからの心配にしておくことにするがよい。えゝ、私の言ふことが分つてくれるか。

染菊。 はい。

清瀬。 別離が淋しい悲しいことがあるなら、逢ふといふことはそれ以上に淋しい悲しいことなぐてはならぬのだ。この世には一生顔さへ知り合はずに、逢ひもしなければ、したがつて別れるといふこともなくて死んでゆく他の兄弟姉妹が無限にあるのだ。無關係な路傍の人として死んでゆくのみではなく、敵となつて血みどろに殺し合ひ傷つけ合つて死んでゆく者もあるのだ。さうした仲に、愛し愛されて、淋しいうちに絶大な喜悦に輝きふるへて逢ふといふことは、たと

へやうもない此の世以上の幸福といふものだ、してみれば、別れといふことは考へやうによつては、その絶大な幸福を獲得したことの證として寧ろうれしいことであるかもしれぬ——

染菊。 あなたは別離のことを仰有います。別れることなど、私は話をきく丈けでも、總身にぞおつと寒氣がして参ります。どんなことがあつても、わたしは、清瀬さん、あなたのお傍にゐますから。死んでもお傍を離れませんからね。

清瀬。 その一念の消えぬうちは、永遠に私はお前のものなのだ。

女中酒を運び来る。清瀬にさす。染菊酌をする。

清瀬。 (飲みをほり) お前も一つゆくといゝ。

染菊。 えゝ、わたしいたゞきますわ。ねえさん、あとは、わたしが酌しますから。

女中。 えゝ、ではどうぞ。ごゆつくり。(去る)

染菊。 (無邪氣に) わたし、追つ拂つてやつたわ。ほゝ。誰か一人でもこの座敷へ來ると、わけもなしにその人丈けが餘計な要らぬ邪魔物のやうに感じられて仕様がありませんの。黄金の世界、萬物ごとく生きふるへてゐる光明の世界へ、古い丸太棒が突つ立つたやうな感じがしてありませんの。光明を浴びて打ち寛ろいでゐるわたしから、その光りをさへぎる物は、何んだつ

て早く取り除かねばならないわけですからね。

清瀬。 お前は、お前はうれしいことを言ってくれ。それをきいた丈けでも、私は辛苦な陰鬱な、住み悪い此の世にもいつまでも生きてゐたいとさへ思へてくるのだ。染菊、こちらへおいで。

染菊。 はい。(二人、かたき、熱き、激しき、そして長いキス。女中走り来る。二人キスを止めず)

女中。(ためらひつゝ) あの、東京からお客様がお着きでございます。

清瀬。(染菊を静かに離し平然として) こちらへ通して下さい。

女中。 はい、かしこまりました。(去る)

染菊。(髪などつくるひつゝ) わたしはここにゐてもよろしいのでございますか。

清瀬。 よいとも。ただ、あとで、暫く遠慮してもらうかも知れぬが。私一人で分る仕事の話など、お前にきかしたくはないから。無邪氣で純情で、熱情を失はすにゐてくれることが、何よりのお前の命なのだから。つまらない面倒な仕事の話は、その純情の美しさと輝やきを曇らせるに過ぎないのだから。

染菊。(ぼうつと頬を赤らめ) 何んだか、わたし、恥づかしい氣がしてなりません。どうしませうかしら。

清瀬。 はッは、お前は何も言はずに黙つて美しくすわつてゐればよいのだ。

女中。 どうぞこちらへ。先程からお待ち兼ねでございます。

女中にみちびかれて、貧しけれど氣品のある二十七八の若者。丘眞太郎、その愛人綾子入り来る。

眞太郎。 先生、御無事なお顔を拜見できて、——私は、殊によつたら、とてもお目にかゝれないのかと覺悟してをりました。

清瀬。 おゝ、綾子さんもいつしよに見えたのか。

綾子。 お久し振りでございました。お無事で、お喜び申し上げます。丘が一人でゆくと申しますのをわたしがきかずに一緒にまるつたのでございます。何かと、女手の要る場合もあるからと申して。

清瀬。 君達の睦まじい仲を見、健康な顔を見て私はよみがへつたやうにうれしい。ま、ゆつくり休むでくれるとよい。(染菊に) 御膳にするやうに女中に云つて下さい。

染菊。 はい。(立上る)

眞太郎。 私達は飯を済まして來たのです。本統に。

清瀬。 もう一度食べたらよからう。

眞太郎。でも、それは無理です。はつは、こんなのなら、もう少し我慢してくればよかつた。

清瀬。(微笑し、染菊に) ぢや、酒丈け言つて下さい。(眞太郎に) わりに早く來られたのだな。

眞太郎。あなたは實に今度といふ今度はなさり方がひど過ぎると思ひます。何しろ、一月も前に京都まで來ておいでになりながら、知らして下さらないのだから。大阪の新聞が騒ぎ立てる迄留守をあづかつてゐる私共でさへが知らないといふ法はありませんからね。尤も、それには深い事情が在るのだらうとは察しられても、焦り焦りすることに變りはありません。昨日電報を受けとつた時には全く生き返つたやうに元氣づきましたよ。

清瀬。種々それには、私一身の上の事情もあることなのだ。君には、全く濟まないとは考へてゐたが。

眞太郎。私は私で、新聞に可成り大事件のやうに書いてありますし、もう貴方は少くとも警察にゐられるものと決めてゐました、そこへ、御無様な電報を受つたのですから。

清瀬。警察の方は、未だに有耶無耶になつてゐるのだ。彼の人達は火のない所に火を發見しようかとか、つてくるのだから、どれ程苦心をしてこの私の身邊に壓倒して來たところで、指一本指せるわけのものではないのだ。私が、京都を立ち退かないのも、一つには彼等に對する意地

立てもあるにはあるのさ。

綾子。それはさうですわ、清瀬先生ともある方が、田舎の警察に踏み込まれて逃げ出したと云はれては、ね、——でも、何んともなくてほんとうによござんしたこと。

清瀬。なに、もとく眼中にはない彼等に對する意地立てばかりなら此處に存在はしてゐないのだが、一生涯、ここにゐても惜しいと思はぬ美しい生命の純情が、私をしつかと抱きしめて離さないのだ。

眞太郎。それは、今の、あの娘のことではないのですか。それならば………

清瀬。さうだ、あの娘だ。染菊といふ一少女が、私をしつかと抱きしめて、この土地から、離さうとはせぬ。あの娘の純情にヒビの入らぬ限り、私はここから去らうとはせぬ決心をしてゐる。——それに就いても種々悠つくり聞きたいことも話したいこともあるのだ。どうだ、その後の東京の様子は。

(染菊、女中と共に酒を運び來る)

染菊。(眞太郎に) 一つ召上りませ。(綾子に) 奥さん、あなたも一ついかがでございますか。

綾子。いゝえ、わたくしは結構でございますわ。——わたし、丘綾子と申します。どうぞ今後とも

御懇意に願ひますわ。

染菊。(頬を染め) いゝえ、わたしこそ、失禮してをりますわ。御免遊ばせ。

眞太郎。(盃を上下しつゝ) あなたが支那へお出になつた時も、今も日本の形勢は少しも變つてをりません。私は、時々、今の世の状態に致命的な絶望を感じずにはゐられません。少くとも、革命が発生して此の世が一舉にして破壊され、その廢墟に新しい世界が建てられるといふことも、同じやうに、此の世の人類がごとく美しい淨い魂となつて、愛と信と望との理想世界が現出するといふことも、私には信じられないと言ひ切れぬ迄も、疑はずにはゐられなくなりました。

清瀬。ふむ、君は當初から、美しい、純粹な理想主義者だつた。その理想にヒビがはいりかけたことは、何を意味することになるのかな。

眞太郎。何を意味するのか、それが理解できれば疑ひもしなければ迷ひもしません。何が何んだか分らなくなつて來ました。此の世の現實といふものが、理想といふ美しい虹の消えてゆく切れ目から、だんだんにその廣大な領域を見せて來るのです。そして、一切の主觀を迷妄と斷じさせて今迄私を支持してゐた主義や熱烈な感情を根柢からくつがへし、そのあとへ、恐ろしい

絶望と、初めなく終りのない無限無窮の大現實の恐ろしい流動丈けを眞實在として残してゆかうとするのです。

清瀬。一度やつて來るにきまつてゐる、若い信仰のくづれる時代が、君にも訪れて來てゐると見える。認識の正しさと正しさに比例する恐ろしさには、男はあくまで堪へなくてはならない。が、君には綾子さんがゐる、苦しい時には綾子さんの愛が、君を宇宙が無意味で、虚無で暗黒であるとする認識から救つてくれるだらう。——私がその恐ろしい精神上の危機に打つかつた時は、全くのたゞの一人だつた。

眞太郎。民衆は馬鹿です。どこまで馬鹿なのか想像もつかない程馬鹿です。その無數の馬鹿共の上に、冷酷で無残で残忍な征服者階級が、破れ目のない物凄い網を張つてゐるのです。今日の政治も政治家も政黨も靜かに見れば、資本的征服者の手先共です。労働運動や労働組合運動など云ふものさへ、彼等の手先一つに動かされてゐるのです。少し景氣がよければ騒ぎ出し、少し景氣が悪くなれば屏息する労働運動に何の底力がありませう。婦人運動などと云ふけれど、虚榮心の強い又は器量の悪い二三の女共の空騒ぎ丈けのことですからね。要するに今の世の間は、互に樂をして自分丈けが、よい家に住み、よい着物を着、よい飯を喰べ、よい女を抱いて

寝れば、それで文句のないといふ代物ばかりなのです。どんな奴でも、底を割ればそれだけのものなのです。マルサスの人口論の結論は誤つてゐても、人間は食欲と色慾の動物であるといふ前提は永久に眞理です。彼等を救済するの彼等をして新しい道に導くなどは、青年のほかない夢か、自己の力を知らない誇大妄想か、でなければ僭越極まる飛上り思想であるのはいかかと考へられて來ました。今日、彼等を救はうなどと云つて見れば、金のある奴は少しばかりの包み金で追つ拂ひ、うるさい奴だと叱りつけ、金のない奴は顔を眞つ赤にしてどなりつけ、手前達に救はれる程お安い命ぢやないと、怒る位のことです。それで、——それで、此の世が誤つた軌道を走つてゐること、今の世が悪い世の中であること、不合理と不正が堂々と白日を濶歩してゐること、その儼然たる事實には變りはないのです。それが分つてゐながら、どうすることもできないといふことは。

清瀬。

どうすることもできぬ現世であると覺悟を一度定めてかゝる必要があるのだよ。その覺悟を定めてからの分れ道が大切だがね。西行や芭蕉の故智にならつて世を捨てるものも一つの道だが、西行や芭蕉の心を心として、その大現實の現世に、とても不可能であるところの正義の戦闘を開始し、現社會に悲壯な闘争をつづけることも亦人生の一興ではないか。社會を捨て人

清瀬
心死す
官に留り

を捨て、涯てしらぬ旅路を遍歴することが風流ならば、内心捨ててしまつた社會と人を相手に、永久に實現されさうもない正義と眞理の實現を試みるのも、ニイチエではないが愉快な遊戯だからね。現世を超越する丈けでは未だ罪が浅い。超越し盡したこの當てのはづれた、この己れを裏切りやがつた、この現世を、今度はこつちから玩具にしてやらなくては蟲が承知しないぢやないかと、私は考へる。喜ぶもかりそめの遊びであるなら怒るもかりそめの遊び、少し大仕掛な遊戯には國家があり、民族があり、戦争があり、産業があり、發明があり、學問があり、そして最後に戀愛がある。戀愛の遊びこそ、あらゆる遊びのうちの唯一つの眞實なものであるかも知れない。

眞太郎。

少し、あなたのお心持が分るやうな氣がします。それでは、今度の支那行きなども、先生にはたゞ一つの遊戯だつたのですね。

清瀬。

(沈痛に)言ふまでもなく、遊戯さ。どんなにしたところで結局遊戯さ。君、どれほど眞剣な心を抱き、どれほど必死の計畫をもつて、眞實血のにじみ出るやうな事業をやりかけても、その結果は結局、君、一片の遊戯となつてしまふのだ。ある人が私に云つた。汝は勝手なことばかりしてゐると、私は答へた、現代は勝手なことをする者はゆるされてゐるけれど、正しい

ことをすれば直ちに首が飛びますからな、私とても命の安賣りはしたくはない。もう一寸といふ危険な瀬戸際で、事を遊戯と誤魔化して、永らへ甲斐もない命を永らへてゐるといふわけさ。だからというて、初めからの一念は捨てはせぬ。丘君、この間の私の心持を、短氣な心を無理にも持久的なねばりつよい意志で守り立てゝゐる私の心持を察してくれ給へ。眞實であり、嘘であり、しかもその嘘がすでに眞實である心理を察してくれたまへ。今度の私の支那行きなども、あはよくば、四億の民衆の内外に大いなる異變を捲きおこし、その大いなる勢力で世界を一舉に回天の大業を成就したかつたのだが。はつは、たゞの支那見物としてかへつて來てしまつたわけなのだ。だが、丘君、それだからと云つて私は絶望はしない。勇氣も失はない。絶望は、現實を認識した時にすでにしてしまつてゐるのだから。現世を超越した刹那にすでにしてしまつてゐるのだから。すでに絶望してしまつてゐる現世が、私に絶望すべき事實を見せたからといつて、又々、絶望してゐる必要はないのだから。むしろ自分の認識の正しいことを喜んで、更に新しい冒険、更に新しい「悲痛なる遊戯」へと進んでゆけばよいのだから。

眞太郎。(聲をひそめて) 新聞ではあなたが大きな額の金を持つてお歸りになつたやうに書いてゐましたが、眞實のことなのです。

清瀬。新聞が書く程持つて來るわけではない。向うの同志にしたつてみな貧乏してゐるから。しかし、同じ貧乏でも日本の貧乏と向うの貧乏とはわけが違ふ。詳しいことは、後で話すが、今度は少し、日本でも仕事ができる位の金は持つて來てゐるのだ。——尤も此處にかうして、二三年も流連してゐれば減くなつてしまふ位ののはした金ではあるが。どれ程もがいても初まらない革命運動をやるよりか、好きな女のために費ひするのもし、ことはいゝのだ。(盃を眞太郎にさす)

眞太郎。(盃を受け) しかし、今、あなた迄が、さう云ふ、弱音を吐いて下すつては、日本は暗いです。たとへ大多數の奴共は馬鹿にしろ、尙ほ、少數の私共を力にしてゐる民衆や、青年の輿望を空しくするわけにはゆきません。先生、あなたは一度、東京へお歸り下さい。東京では皆が、少數ではあるがわれわれの同志が、あなたのことを心配し、あなたのお歸りを待つてゐるのです。

綾子。また、奥様の音羽子さんにしても、あなたのお歸りを一刻千秋の思ひで待つておいで下さい。世間では、音羽子さんのことを、あなたに捨てられたの、だまされたのと罵つてゐますが、さうした世間の悪口には耳も假さずに、つゝましく、勇氣をもつて、この半年以上の

お留守の間を、貞淑に、花子様の生長のみを楽しみ守つていらつしやいます。表面へこそお出しにならないにしろ、どれ程あなたの御消息を、それにもましてあなたのお歸りを待つていらつしやるか分らないことゝ存じます。先生、音羽子さんの爲めにも一度東京へお歸り下さいまし。

清瀬。 (染菊に) 染菊、酒を注げ。

染菊。 (瞳に涙を浮べ) はい。(酒を注ぐ)

清瀬。 (呑み乾し) お前も一つゆくといい。己れが注いでやる。

染菊。 はい。(盃を受けのみほす) ありがたう存じますわ。

清瀬。 (眞太郎に) 私は當分、東京へは歸らぬ。——少し考へるところがあつて。

眞太郎。 それは又何故ですか。東京では、力少ない者ではあるが、同志の者が、あなたのお歸りを今か今かと待ち遠しがつてをります。そして、何が何んだか分らないこの世界ではあるが、正義のためならば、そしてあなたと一緒にならば、いつでも命を捨てる覺悟をしてをります。東京へお歸り下さい。

清瀬。 東京へは當分歸らない。君達も折角來たのだから、少しゆつくり遊んでゆくがよい。何ん

なら久しぶりで故郷の和歌山へいつてみてくるもよからう。

綾子。 あなたは、大さうのん氣に構へていらつしやいますけれど、音羽子さんのお心を察しますと、わたしは一分間もぢつとしてをれないやうな氣がいたします。一度でもいゝから東京へお歸りになつて、御無事なお顔を見せて上げて下さいまし。

清瀬。 音羽子は音羽子の自由で自分で好きな道を歩んでゐるのだから、私の知つたことではない。尤も、それも、音羽子から直接顔を見せてくれといへば別問題だが、あの女には、私がゐなくとも十分一人で淋しく暮してゆくことに堪へ得る丈けの力ができてゐるらしいから。私もずる分會ひたいと思つてはゐるのだが、會はねばならぬ必要もないやうだからね。

綾子。 それでは、音羽子様はお可哀さうですわ。音羽子様は、あなたが支那へお出になつてからは、王立劇場の方の舞臺もお休みになつて、ピアノの内稽古をしてつゝましく暮らしていらつしやいます。花子様も、それはそれはお可愛ゆくおなりでした。

清瀬。 音羽子が舞臺へ出ないのも別に私がすゝめたわけではない。あの女自身が私の留守中に出ないことにすると申し出たに過ぎない。——少くとも、私は、あの女丈けは、どうにか一人前の女に仕上げたと信じてゐるのだから、完全な一人前の女にとつては、私が半年や一年早く歸

らうが、遅く歸へらうが、そんなことが微塵可哀さうだのなんだのと他から同情したり同情されたりするやうな筋合のものではないのだ。——むしろ、私は、私に同情してもらひたい位だ。

眞太郎。 貴方の仰有ることはよく分りかねます、私には。

清瀬。 君には分るまいな。恐らく。何故なら、君は元來が世にも稀れな幸福な人なのだから。そして、又、君と綾子さんほど仲のよい。圓滿な戀は珍らしいことなのだから。——そこへゆくと私は不幸だ。私には何事も一切がたゞ悲痛な事實として、私自身に叛逆してくる丈けのことになるのだから。丘君、×××と云ふことは大きな犠牲といふことだ。そして×××といふことは、大きな犠牲者と云ふことでなくてはならぬ。それが個人の心理的革命の場合に於ても、或ひは恐らく社會の組織上の×××に於てでも。

綾子。 あなたの仰有ることは、私共には分るやうで分りませんわ。もつと、具體的に仰有つて下さいませ。

清瀬。 萬人ごとごとくが帝王のごとく尊嚴で神聖で犯すべからざるものとなるのが、實際は、社會主義の目的なのだ。人は實際は、各人帝王のごとく、神聖で犯すべからざる自己をもつて

ゐる者なのだ。たゞ、今の世が不完全であるが故に、あるひは王と稱し貴族と稱し富豪と稱する滑稽なる猿共が、全人類の自己を蹂躪して平氣であるのだが、これはゆるす能はざる冒瀆であるのだ。私は帝王のごとく生きようと思ひ、且つそれを實行しつゝある。そして、各人に、個人的には心理上に、社會的には組織上で、只今の間違つた状態を革めて新しい境地を展開しようとする。帝王のごとく生きるといふことは、人本來の孤獨にかへるといふことにほかならぬ。獨り生れ、獨り生きる一人の自己に目覺め、その自己の生を見守り養つてゆくといふことにほかならぬ。全世界が消滅しても、自己一人をさへしつかと把持してゐればビクともせぬといふ強い底力をもつことにほかならぬ。男は帝王のごとく、女は女王のごとく、淋しく正しく、あくまで森嚴な自我を把握しつゝ二つとない道をすゝまねばならぬ。——丘君、音羽子は少くとも女一人前になつてゐる。もはや私を必要とはしない。少くとも私がるなくとも、その淋しさに堪へるだけの内實の力を獲得してゐる。ここに悲痛な戀愛の悲劇があるのだ。音羽子は私の生涯にとつては忘れることのできぬ戀人であることに間違ひはない。しかし、女一人前になつてしまつた今、もはや彼女には、全世界が消滅してもあの女自身の自我——唯一つなる生命は消滅しないで儼存するのである。彼女の自我の尊嚴の前にはすでに全世界といへども光り

を失ふ以上、この清瀬一人の存在などは物の數でもないことになる。

綾子。でも音羽子さんは、あなたお一人のために生きていらつしやいますわ。

清瀬。いや、その私一人のために生きるということは、とりも直さず、音羽子自身一人のためにのみ生きてゐるといふことにほかならぬのだ。彼女が、まだ王位劇場の花形として、旭日の登るにも似た、青春の若さ、美しさ、名聲を背負つてゐた、無邪氣な娘の時分、私といふ一人の男に身も心も投げこんで来たその時分、彼女はたゞ愛の化身であり、熱い純情の化身であつた。彼女の全部はこの清瀬のものであつた。彼女の魂も體もこの清瀬に従属してゐた。それ程從屬的で、生一本な彼女の愛にひきつけられ、彼女の愛を受け容れながら、私はそのまゝでゐることができなかつた。私が帝王で、彼女が全き被征服者であること、そのことを、そのまゝにしておけなかつた。私は彼女に愛され、あの女を愛すれば愛する程、私が帝王であると同じその世界にまで、彼女を引き上げようとせずにはゐられなかつた。そして、その努力は、その心理的革命は、彼女に於て完全に成功した。私の愛する女の音羽子であると共に、全宇宙の久遠の無始より永遠の未來劫にわたつて獨存不滅な一人の人音羽子が新しく生れ出たのであつた。あゝ、そのことは實に絶大なる私の事業の一つであつた。けれども、私の戀は破れずにはゐられなかつた。少くとも私の戀、從來の戀愛關係は、新しい音羽子の出現によつて新しくされたと言はなくてはならない。何故なら、從來の音羽子は、完全に私のものでした。しかし、新しい自我が音羽子に生じてからといふものは音羽子は私のものであると同時に、新しい音羽子のものであるのです。私が、音羽子が無くとも尙且つ生きられるやうに、從來、私が無くても生きられなかつた彼女は、その時から、私がなくとも生きられるやうになつたのです。それは、私の事業としては成功であるが、そして理性の上からは、眞に帝王と女王のごとく、人間本來の尊い生活にはいつたわけなのだが、私の感情の問題としては、それは一種の悲劇でなくてなんだからうか。何故なら、私はたゞ熱い純情を求め、私なくては死ぬる女の眞情に泣く男でもあるのだから、——しかも、ひとたびさうした女に接すれば、私は渾身の力でその女を内的に鍛へ上げ、私自身の地位にまで引き上げなくては承知ができないのだ。私は、だから、いつも淋しい。そして、結局、君達二人の間柄のいつも變らぬむつまじさを、うらやましいとも考へるのだ。

眞太郎。あなたのお仰有ることは、どうにか、分るやうな氣がします。たゞ、私は、音羽子さんは、

一生でも一人で、先生のお歸りを待つてゐらつしやることは、綾子と共に申し上げます。

清瀬。さうきくと、私は餘計に歸りたくなくなるのだから困つたものだ。私と音羽子との間にあ

るものはや戀ではないのだから。それは、會つても會はぬでも、變ることのない永久的な愛なのだから。しかも節制ある嚴肅な、極度に意識的な、そして對等的な私が彼女を征服すれば、あの女も私を征服してゐるといふ。——私はやはり東京へは當分歸るまい。同志の諸君には相すまないが。私には今、新しい戀がめぐまれてゐるのだから。恵みの薄い此の世に生れ、この貴重な恵みを受けてゐながら、そのまゝ見すて、ゆく氣にはなれないから。——それよりか、君達はゆつくりくつろいで、ゆくがよい。東京の奴等も、もし私が東京にゐなくて淋しかつたら、みんな京阪へやつてくるとよいのだ。

眞太郎。

(一種の輝やきに充ちて) みんな、京阪の方へ、来て、よいのですか。

清瀬。

東京といふ狭いところにはかりゐる必要もなからうぢやないか。はつはつ、京都は一千年政治の中心地であり、大阪は秀吉が居城を定めた土地だ。東、首府東京を壓し、支那と、太平洋と南洋を掌握するには、むしろ關西の方が、未來の中心地とは、思はないか。——それに、染菊といふ、私の好きな娘もゐる。私は當分歸らない決心だ。丘君、ま、一つゆかう。染菊、酌をしろ。

染菊。はい。

眞太郎。

ふむ、さうあなたが仰有つて下されば、私共も、關西にゐることにします。同志の者も追々、西下して來ることです。

(女中入り來り、酒、添物などを置く。かへりぎはに)

女中。

あの皆さん、お風呂へおはいりになつてはいかゞでございます。

眞太郎。

さうですな、あなたは？

清瀬。

私は今夜は、入らないから、君達二人で、一風呂浴びてくるとよい。

綾子。

では、一寸いたゞいてまゐりませうか。眞さん。

女中。

では、どうぞ、直ぐに。お加減はできてをりますから。

綾子。

では、先生、一寸失禮いたします。(二人女中に導かれて去る。清瀬と染菊残される。二人後見送つて黙然として相對する。黙つて酒を注ぐ。染菊そつと袖にて眼の涙を拭ふ)

清瀬。

お前は泣いてゐるな。

染菊。

いゝえ。泣いてゐるのではありません。(袖にて涙を拭ふ)

清瀬。

泣くのは止せ。お前を一生捨てはせぬのだ。お前の心が變らない限りお前は私のもの、私はお前のもの、よいか、泣くのは止せ。

染菊。あなたがさう仰有つて下さいますと尙ほ、わたしは胸がせまつて泣けるのでございます。どうぞ、東京へはお歸りにならないで、何時までもこちらにゐて下さいまし。

清瀬。今もきいてゐたとほり、私は東京へは歸りはせぬ。

染菊。もし、東京へお歸りの節は、わたしと一緒に連れてつて下さいまし。わたしは、どんな辛い辛抱でもして、お傍にゐたうございます。(泣く)

清瀬。よしよし、私が東京へゆく時は、お前も一緒に連れてつてやる。併し、今は私は京都にゐるのだ。お前とかうして二人きりで對ひあつてゐるのだ。泣かずに、酌の一つもしてくれろがよい。

(女將そばへと駆け来る)

女將。あの、旦那様え。

清瀬。何んだ。

女將。一寸、旦那様にお目にかゝりたいと申される方がございますが。

清瀬。誰だ。用事なら、こちらへ通すがよからう。

女將。はい、どうもお邪魔でございます。(去る、入れ違ひに、黒のソフトにマント着たる異様の男人

リ來り、清瀬の正面にびつたり坐る、帽子もマントもぬがすに。清瀬黙然として其を吹かす。

男。私は、當地の警察の者ですが、少し取調べる筋があるから答へてもらひたい。

清瀬。(沈黙)

齋田。(手帳を出し) 原籍、現住所、姓名は何んといふのだ。

清瀬。(黙然、染菊に) 酒を注げ。(染菊つぐ。清瀬、飲み乾す)

齋田。おい、職権をもつて質問してゐるのだぞ。原籍、現住所、姓名を明瞭に答へろ。

清瀬。(ザロリ睥睨して) お前は一體何者だ。

齋田。己れは、警察の者だ。今のその言葉遣ひは何んだ。

清瀬。警察の者なら警察の者らしくしたがよからう。人の部屋へはいつて来て、帽子をかむりマントを着てゐる馬鹿を相手にするわけにはゆかぬ。

齋田。ふむ、職権をもつて来てゐるのだぞ。君の指圖は受けぬ。(帽子丈けをとる) 姓名と住所を申し立てろ。

清瀬。姓名と住所は宿帳に書いてあるから、それを見たがよからう。

齋田。それが、己れに對する答へか。お前も馬鹿な奴だ。それあ、女の手前、威張つても見度か

らうが、己れの前で威張ることが、どんなに損か位るはお前も分らぬことはあるまい。己れは京都警察の齋田だ。きいてみてちつとは驚いたらう。

清瀬。 お前のやうな馬鹿を相手にはせぬ。——出ていつてくれ。

齋田。 馬鹿!? 馬鹿とは何んだ。馬鹿とは何んだ! お前は職權を行使するこの己れを侮辱するののか。

清瀬。 はつはつ。まあ、御苦勞なことだ。住所氏名は宿帳に書いてあるから、一ぱい飲んでかへつてくれるとよい。染菊、注いでやれ。

齋田。 酒は飲まぬ。清瀬! 大きなことをほざいてゐて、あとで蒼くなるな! いつたい、お前は何しに京都に來てゐるのだ。それが訊きたい。

清瀬。 それ、私の姓名は、お前の方がよく知つてゐるぢやないか。私が何のために來てゐるかも、お前の方がよく知つてゐるだらう。

齋田。 それが分つてゐれば、訊ねはしない。京都は、昔から靜かで穩かな都だ。お前などの永くゐるところではない。何しに來てゐるのだ。いゝ加減切り上げて、どこへでも去んでもらひたいんだ。

清瀬。 大きにお世話なことだ。私が京都にゐようとするまいと、お前などの指圖を受けはしないのだからな。いつたい、人が折角の酒宴の場所へ、さう職權とかを振りまはしてやつてこられては困るぢやないか。住所氏名はお前の方がよく知つてゐる私のことぢや。その己れぢや。金を出して遊んでゐるのに何不足がある。お前達の仕事はな、金の無い者を取締つて、金の有る奴を保護するが役目ぢやないか。清瀬は今、そんなに多くはないが三萬や五萬の金は持つてゐるのだ。ぐづぐづ言つてゐないで、私の身邊でも守つてくれるがよい。

齋田。 餘計なことを言はず神妙に己れの言ふことに答へればよいのだ。京都へ何しに來てゐるのか。京都へ。

清瀬。 それはお前の方がよく知つてゐるだらう。

齋田。 お前とは何んだ、もう一度言つてみる!

清瀬。 お前の方がよく知つてゐるから、答へるには及ぶまいと云ふのだ。

齋田。 (立ち上る) 清瀬!

清瀬。 何んだ!

齋田。 同行しろ! 職權をもつて、少し取調べる筋があるから同行しろ!

清瀬。己れはゆかぬ。

一八四

齋田。清瀬！今になつて未練がましいことを言ふな。お前の今の態度は、警察権の發動をそよのかしてゐるやうなものだ。成る可く穩便にと考へてゐるが、仕方がない、職權をもつて同行を命じる！（いつしよに來い！）

清瀬。行かぬ。（靜かに染菊に）酒を注げ。

齋田。清瀬！同行しろ。來なければ、引つ張つてでもゆくぞ。

清瀬。行かぬ、ゆかねばならぬ理由もなしにゆく必要がない。

齋田。うむ、來い！（清瀬の肩に手をかけてひつばる）

清瀬。何をする！（染菊に）お前は一寸わきへよけてゐるとよい。

齋田。來ないか！（強く引つたてんとす、清瀬立上る）

清瀬。無禮をするな。行かぬといつたら、行きはせぬ。

齋田。何を！（引つとらへんとする）

清瀬。（齋田の腕をねじ上げ、なげ倒す）馬鹿者め！これ、誰かゐるのか！

（はゝ、と聲がして隣り部屋の襖をあけ、若者二人出て來る）

清瀬。お、君達ゐてくれたか。ありがたう。こいつを戶外へつまみ出してくれ。酒宴の邪魔をし

やがつて。無風流な馬鹿者めが。

若者一、二。はい。（齋田を左右より引つとらへ）立て！

齋田。覺えてゐろ！

清瀬。馬鹿を申すな。清瀬は今のところ、天下の良民だ。指一本でも指してみる。お前の首が危なからうぜ。お前の役所へ來て欲しかつたら、どうぞ來て下さいと禮を厚うして頼めば、行つてやらぬこともあるまい。はつはつ。（もとの席にすわる）

（若者二人、齋田を引つとらへて部屋外に去る。染菊傍へよる）

染菊。どこもお怪我はございませんでしたか。本統に突然に、何が來たのかと思ひました。（ほれほれと清瀬を見つめる）わたし、こんな氣持のいゝことを見るのは、生れて始めてでございますわ。

清瀬。なに、こんなことは、わしといつしよにゐれば、毎日のやうに發生ることなのだ。此の間からも度々あつたのだが、お前には見せぬやうにしてゐたのだ。しかし、お前も、もうこんなこと位には驚くまいと思つて、今日は、そのまゝにしておいたわけだ。女將にさう云つて、

藝者をよんで、のみ直すことにしよう。

染菊。

はい。(立上る。そこへ、若者二人かへり来る。若者に)御苦勞様でございました。(去る)

若者。

いえ、なに。——先生、門口から放り出してやりました。本統に警察の者がどうか分るものぢやない。これで當分、こりて來はしないだらうと思ひます。

清瀬。

御苦勞だつた。東京から丘眞太郎の夫婦が來てゐるのだが、君達、今會つたがよいかな。

若者。

いえ、私共は、會はない方がよいと思ひます。どこまでも、人知れず、先生の身邊をお守りした方がよいと思ひます。

清瀬。

さうか。ありがたう。次の間でゆつくり飲んでくれるがよい。

若者。

では、先生、御油断なく、そして、御安心して下さい。

清瀬。

え、君達がゐてくれるので、實に、心丈夫に感じてゐる。——誰か來るやうだ。

若者。

先生、失禮します。(次の間へかくれ、襖をしめ切る)

(藝妓、小ゆう、ゆり香、しぐれ、その他二三人「今程は」と入り来る)

女將。

只今は、たいさう失禮でございました。

清瀬。

なに、ま、ひとつゆかう。(染菊、注ぐ)

女將。

(盃を返し)ほ、染菊さんに叱られぬうちにお返しいたしますわ。

(藝妓達一せいに調子をもち、「染菊さん御免遊ばせ」と言ひ清瀬にさす)

清瀬。

そんなにさされて、私一人ぢや困つたね、困るよ、實に。

小ゆう。

旦那、今入り三杯つ！ さ、その盃を下へおかすに、ぐつとのむのですわ。下へおろせば、

又三杯！ ようござんして、あら！ それぢや卑怯ですわよ。

(眞太郎綾子、湯上りの體にて来る)

ゆり香。

それ、助太刀がお見えになつたことよ。そちらの旦那、仲間にはいつて下さいな。今

ね、清瀬の旦那をみんなして虐めぬいてゐるところなのよ。

眞太郎。

(微笑み)大さう御盛んですな。(綾子に)これぢや風呂場へも騒ぎがきこえるわけだよ。

綾子。

さうらしいわね。この騒ぎなら、別に心配はしないのだけれど、何んだか、男の聲でどなつてゐたやうだつたから、もしやね……何んしたのかと思つて心配したのよ。

しぐれ。

奥様、あなたも、お仲間にはいつて下さるのでしょ。

綾子。

え、え、どうぞお仲間へ入れて下さいましね。

清瀬。

(眞太郎に)どうだ、風呂加減はよかつたかね。

眞太郎。

え、大さう結構なお湯でした。

清瀬。さうか、それはよかつたな。(間)君達は幸福な人達だ。

小ゆう。

(眞似して)君達は幸福な人達だ。ほ、ほ、召上りませぬ、熱いところを。

染菊。

(涙を浮べ)清瀬さん！わたしの盃を受けてちやうだい！

清瀬。

よし、よこせ！(のみほす)え、つ！

(盃を發止と部屋の向うの柱にぶちつける。盃はこつばみじんにくだけ散る。一同氣をのまれて森然)染菊、私は泣きたい。天地も轟くほどの大音あけて、泣きたい、泣きたくなつた！

染菊。

わたしも、わたしも、泣きたうございますわ。

清瀬。

しかし、私は泣かぬぞ。染菊、千萬無量の涙の大海原をしつかと腹三寸の堅きに制へ、男が一生の涙で何をするか、やつてみせる。命にかけ、天地にかけてやつて見せる。

染菊。その時は、わたしの小さな胸は、今の悲しい淋しい涙の代りに、うれし泣きに泣きつづれることとございませう。

静かに幕

第三幕

翌年冬の静かな寂しいある夜、東京、下町の街角にある小さなヨーヒー店、戸外は粉雪が降りしきつてゐる。部屋では、やゝ大きなストーアの火焰が旺んに燃えてゐて、二人の不良の若者酒を飲んでゐる。静かに幕明く。

男一。

(奥の方へ)早く持つて来てくれなけれや歸るからね、——何んなら出来なくとも、もういゝからね。

みや子。

(聲)いえ、只今、直ぐでございます。

男一。

返事ばかりだから興が醒めるよ。あの美しい聲で返事をするために、わざと焦らしてゐるわけでもなからう。はつはつ。——ひつそりと、静かで、雪がまたしきりに降つてゐるやうだね。

男二。

あゝ、大へんな雪の様だ。が、かうして、雪の降る夜は、滅入るやうに淋しいうちにも、何處か潤ひがあつて暖かな氣がするから、妙だ。——お、熱いのを早く持つてきてくれないか。熱いのをさ。

みや子。(聲)はい、只今。

男二。はつはつ、なるほど聲ばかりだね、くるかくるかと濱へ出て見れば、濱の松風音ばかり、音色ばかりでは、からだあつたが暖まりませんからね。

みや子。(正面や、右手のカーテンを分けて、お銚子をもつてでてくる。二十歳ほどの、肉附のよい秀麗な匂ひこぼれる美しい女性) お待ちどほさま、さう、せはしさうに仰有るもんぢやありませんわ、(酒を注ぐ) 熱くなるには、時間が要りますから。

男一。あゝ、何といふこのうまさだらう。おい、俺達の青春のために、また、ここにゐるこの美しいみや子さんのために、俺はこの盃を乾すぞ。ほんとにかうした淋しい雪の夜に、熱い酒と温かい女の肌がなかつたら、この世はあんまり淋し過ぎるといふものだ。

みや子。 召し上れな。——大さう靜かな晩ですわね。

男一。 う、あなたも一つ飲むとい。

みや子。 ほゝ、さうお、わたしほんの一口だけいたゞきますわ、どうもありがたう。あなたも一つ召し上れな。

男二。 これは光榮ですな。はゝ、この一とき、天下の果報は俺一人のものといふわけだ、ね、君。

男一。 さうとも、でもね、みや子さんには歴乎とした、凄い、御亭主があるんだから。それ以上の前進は用心しないと大へんなことになるからね。おい、どうしたのだ。妙な顔をするぢやないか。みや子さんに御亭主のあるのを知らなかつたのかい。そいつは氣の毒だね、みや子さんのあの人を知らなかつたとは、むしろ、失禮な男と云はずばなるまいて、ね、みや子さん。

みや子。 わたし、知りませんわ。(ストーブに薪をくべる) そんなこと。

男一。 近頃大分、世間でやかましくなりだしてゐる莊田機械製作所の同盟罷工の隠然たる立役者の廣野源一ね、あの男がこの女の御亭主なんだよ。だから、用心しないと頭からドカンとやつつけられるよ。尤も、君は女にかけては、ずる分向う見ずになれる性分だがね。

男二。(苦笑) それ位のこととは知つてゐるよ。いくら、われわれ仲間の間柄だからといつて、さう物事を變に、深くとつてくれては困る。實際、酒を飲んでゐて、理窟は禁物だ。——尤も、今夜はお互ひにする分飲んだには飲んだね。

男一。 さて、この酔つたところで、かへらうよ。他人のいゝ奴を見て、酒を飲んでゐるのも、考へてみれば、氣の利かない、たまらなく淋しいことだ。

男二。 うむ。